
死の先に待っていた使い魔の生活

Kazuya2009

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死の先に待っていた使い魔の生活

【Nコード】

N6962L

【作者名】

Kazuya2009

【あらすじ】

アルビオンでの戦闘中に、俺は黒い仮面の男に体を貫かれた。薄れ行く意識の中、俺は二度目の死を迎えると思った矢先目が覚めるとそこはトリスティン魔法学院。

瀕死の状態だったはずの俺はルイズに召還されてしまったのだ。

この話は「死の先に待っていた新たな世界」の第十九話からの分岐の話です。

完全、ご都合主義の話で更新も完全不定期。
完結するかも分からない話です。

そう言うことを踏まえた上で宜しければ目を通して下さい。

第一話（前書き）

この話は「死の先に待っていた新たな世界」の第十九話からの分岐の話です。

完全、ご都合主義の話で更新も完全不定期。

完結するかも分からない話です。

そう言うことを踏まえた上で宜しければ目を通し下さい。

第一話

黒い仮面の男との戦いで俺は敗れた。

三方向から貫かれた俺は、腹、肩、胸に致命傷を負ったのだ。

胸は焼けるように熱く、声を出そうとしても肺に血液が流れ込んで声に成らない。

動けない俺をあざ笑うように、助けに来たルイズへ黒い仮面の男が近づいていた。

「ル……ルイズ……」

ようやく出た声も空しく響き、ルイズを黒い仮面の男のレイピアが捉えようとした。

その時、何かがルイズと、黒い仮面の男の間に割って入るのを見た。

それと同時に、硬い金属音が、辺りに鳴り響いた。

ルイズを助ける者の剣と黒い仮面の男のレイピアがぶつかった音。

「ルイズはやらせねえ！」

ルイズと黒い仮面の男の間に割って入った人物。

それは、虚無の担い手の使い魔、ガンダールヴ。

サイトだった。

サイトがルイズを助けてくれた。

それに安心した俺は必死に保っていた意識を手放した。

闇はどこまでも広く、そして深かった。

俺は死んでしまったのだろうか？

漂う闇に身を任せる以外に今の俺には無かった。

時間の感覚も無く、どこへ向かおうとしているのかも分からない。

そうしていると、小さい光が目の前に現れた。

光は最初、とても弱々しかったのが徐々に大きくなっていく。

やがては俺を包む程の光になり、次の瞬間声が聞こえた。

お願い！ わたしのところに来て！
その声はルイズと同じ声に聞こえた。
必死な、とても必死な声に俺は手を伸ばすと闇は全て光に変わるのだった。

光が収まる。

俺はゆっくりと目を開けた。

目の前には、桃色掛かったブロンドの長い髪の毛の少女がそこにいた。

「ルイズ、無事だったんだね？」

俺の言葉に、ルイズは驚きの表情を浮かべている。

それと同時に、周りからも驚きの声が聞こえてきた。

周りから聞こえてくる声の内容に俺は耳を疑った。

「ゼロのルイズが貴族を召還したぞ！」

「人間を召還しちまった！」

「どうなってるの！」

召還？

人間を？

俺は深呼吸すると、辺りを見回す。

見覚えのある塔がある、ここはトリステインの魔法学院だ。

「こ、コルベール先生！」

ルイズはあたふたしながらコルベール先生を見る。

コルベール先生も驚いているようだ。

状況から察すると春の召還儀式なのか？

俺はアルビオンにいて、黒い仮面の男に殺されたと言うことなのか？

飛行機墜落の時と同様に転生したってこと……では無さそうだな。

左手は相変わらずない。

着ているものも変わらない。

変わっていることと言えば、貫かれたはずの箇所には傷がないと言

うことだ。

「君は一体どこから来たのかね？」

俺が自分の状況を確認しているとコルベール先生が尋ねてきた。
どう答えていいものか……。

とりあえず本当の事を話して、その反応を伺おう。

「私はアルビオンのレイバーミンから来ました」

「アルビオンから？　今は向こうは内乱で不安定なはずだが……。
君の着ているマントはトリステインの貴族であることを意味しているね？」

俺が着ているマントは紛れもなくトリステインの貴族の証だ。

「はい。間違っていないければ今、アルビオンとトリステインの連合軍がレコンキスタと戦っているはずなのですが？」

春の召還儀式の後、すぐに俺は招集されている。

この時はすでに連合軍が組まれて戦争になっているはずなのだ。

「アルビオンとトリステインの連合軍？　レコンキスタと戦争をしているのはアルビオンだけのはずだが……」

怪訝な表情で言うコルベール先生。

これは言うまでも無く、俺の知っているハルケギニアではないはず。

ありえないシチュエーションから考えてパラレルワールドと言う奴だろうか？

「君の名前は何と云うんだい？」

「私はアレス・ジルアス・ド・ヴァルガードです」

「ド・ヴァルガード？　そんな貴族の名前は聞いたことがないな……。」

ヴァルガードが無い？

そう言うことなのか？

「ルイズ、君はヴァルガードを知らないのかい？」

不審な眼差しで俺を見るルイズに尋ねる。

彼女は首を振りながら答えた。

「ヴァルガードなんて知らないわ。それよりどうしてわたしの名前を知ってるの？」

さらに不審な眼差しで俺を見てくる。

しかも相当に警戒している上に、どうも俺の知っているルイズでは無さそうだ。

こんな状況なんて想像もしていなかったしな。俺も随分と判断が上手く出来なくなっているのかも知れない。

「名前については後で説明するよ」

しかし、まずい事になったな。

ヴァルガードが無いと言うことは俺を知る人間は一人もいないと言うことじゃないか。

しかも、状況からルイズに召還されたことになる。

サイトじゃなくて、俺だと言うことだ。

「コルベール先生、使い魔の契約はどうなるのでしょうか？」

ルイズが不安そうにコルベール先生を見ている。

コルベール先生も判断が付かないようだ。

「うむ。まずは一度オールド・オスマンのところへ行こう。

皆は教室へ戻って自習をしたまえ」

コルベール先生が生徒にそう言うのと生徒達は各々、レビテーションやらフライで校舎へと向かっていく。

その中に、ギーシュやモンモランシーを見つけたが彼らも恐らく俺の知らないギーシュとモンモランシーなのだろうな。

皆が飛んでいくのを眺めていると、コルベール先生に肩を叩かれる。

「これからオールド・オスマン。この学院長に会いに行く。

君も付いてきなさい」

「わかりました」

俺はそう言うのとレビテーションを使う。

「っ、杖無しで魔法を！」

レビテーションを杖無しで使ったことで、ルイズとコルベール先

生が驚いている。

そうか。

ここは俺の知る世界じゃない。

俺の手袋が杖と同じ材質で出来ているとは知らないんだ。

「杖はありませんが、この手袋は杖の代用品ですよ」

右手に嵌めている手袋を見せると、二人は安心したように胸を撫で下ろしてた。

あの後、レビテーションで飛んで行こうとしたところルイズが歩いて来ようとしたため彼女に尋ねてみて驚いた。

彼女は魔法が使えないらしい。

あなたもわたしを馬鹿にするの？ と言っていた。

ルイズの反応からして、魔法が使えないのは間違いないのだろう。ここがパラレルワールドと仮定し、なおかつ俺の存在が無いことを考えればルイズがまだ虚無について何も知らなくて仕方ないのかも知れない。

学院長室へ来ると、コルベール先生が先に入り、俺とルイズが続いて中に通された。

「失礼します」

俺とルイズが同時に頭を下げた。

顔を上げると、そこにはオールド・オスマン氏が居た。

少し離れたところにロングビル。オールド・オスマンの右斜め前にコルベール先生だ。

「さて、アレス君と言ったかの？」

「はい」

オールド・オスマン氏が穏やかに尋ねてくる。

さすが慌てることなく、大きく構えているようだ。

「まず、ド・ヴァルガード家に関してじゃがの。そんな貴族はこのトリステインにはおらん」

「やはりですか……。少なくとも私の知るトリステインではヴァル

ガード侯爵家でラ・ヴァリエールに並ぶほど名を知られております」

トリステインでもヴァルガードを知らない家はない。

ヴァリエールと親交が深く、国政にも大きく関わる程だ。

「じゃがの。それでもむしろは知らんのじゃ。」

わしとて公務で王都に出向くことがあるからの。

ましてはこの学院はトリステインをはじめ各国からの貴族が留学してくる程じゃ、知らぬ貴族などおらん」

トリステイン魔法学院はハルケギニアでも名門だ。

貴族と言う点では王都の次に貴族を知る場所と言っても過言じゃない。

「存じております」

「なら、君は誰じゃ？」

「それでも名乗る名が変わることはありません。」

ところで、二、三ご質問したいのですがよろしいですか？」

俺の言葉にオールド・オスマン氏の眉間に皺が寄る。

だが、それも一瞬のことですぐに穏やかに了承してくれた。

質問の内容から俺を見極めるのだろう。

「それではまず始めに……」

まずは今日が何年のいつなのかを質問。

これに関しては俺が思ったとおりの回答だった。

新学期の始まり、春の使い魔召還儀式だ。

次に、アルビオンがレコンキスタと戦争をしていることについて。

これは今、どちらが優勢かを問うためだった。

俺の認識が正しければ、アルビオンが壊滅寸前のはずなのだ。

トリステインとの連合軍でさえ、押されていたのだ。

アルビオン単独ならばもう風前の灯であつたと考えてもいい。

その回答も予想通りだ。

最後が、俺が召還されたことについて。

召還されたと言うことは恐らく俺は使い魔と言うことなのだ。

「私は彼女にサモン・サーバントによって呼び出されました。」

私自身、サモン・サーヴァントとコントラクト・サーヴァントの経験があるので分かりますが私は使い魔として呼び出された、と理解しても良いのでしょうか？」

俺の質問に、この場にいる全員が驚きを隠せなかった。

なぜなら、俺がまるで使い魔になるのを受け入れるとも取れる発言だからだ。

状況から、俺の身分や位は無いに等しい。

ましてはこの世界では俺はいないことになっている。もちろん両親、先祖を含めてだ。

もしかしたらあつたかも知れないもう一つの世界が、恐らくここなのだろう。

それはもういい。

この状況を受け入れるとして、次の行動をどうするか？

「お主は、ミス・ヴァリエールの使い魔として受け入れると申すのか？」

オールド・オスマン氏の質問に、全員の注目が俺に集まる。

ルイズからは期待を。

コルベール先生からは好奇心ある視線を。

オールド・オスマン氏はなぜそうも受け入れられる？　と言う疑惑の目を。

少し離れたロングビルには信じられないと言う眼差しを。

皆からの好奇心な目に、俺は答える。

「私は、ここにおいて身分は愚か存在するら認められていない存在です。」

なら、私自身の身を保証してくれるものが必要です。

彼女の使い魔になることで、使い魔としての働きと引き替えに衣食住を得られると思うのです。

なら、彼女に仕えるのもまた一興だと思われませんか？」

この答えに、オールド・オスマン氏も納得がいったようだ。

今の俺は立場が悪すぎる。

身分を証明する物も者ない。

そんな世界で俺一人が生きるには落ち貴族として生きていくこと
しかない。

一人で生きること自体はいい。

だが、考えても見ればそれをするためには職を得る必要だってあ
る。

さがせばいくらでもあるが、なら使い魔になった方が無難だ。

「い、いいの？ あなた、わたしの使い魔になってくれるの？」

ルイズは喜びとも驚きとも付かない声を上げながら俺に尋ねてく
る。

「いいとも。今言ったとおり、僕は本来ここにいない存在だよ。

危険だと思われれば、今すぐこの場で殺されたって文句が言えな
い立場だ。

だったら、僕は君の使い魔として仕えるよ。

幸い、僕はメイジだ。

きっと君の力になれるよ」

「オールド・オスマン。よろしいのですか？」

コルベール先生が確認のために一度オールド・オスマン氏に尋ね
る。

ルイズは懇願するようにオールド・オスマンを見た。

ここまで、使い魔にしたいと言うことは何か訳ありなのだろうか？

「よかるう。今のところ、彼は無害じゃろう。

それに、ミス・ヴァリエールは使い魔の儀式に成功しないと留年
が決定じゃからな。

ちようどよかるう」

オールド・オスマン氏の言葉にルイズの顔がぱつと明るくなる。

「ありがとうございます！」

嬉しさなのか、勢いよく頭を下げるルイズ。

そうか、留年が掛かっていたなら俺が使い魔になるのは嬉しいだ
ろう。

「感謝なら彼にするんじゃない。」

彼が拒否すれば、わしは牢に入れることすら視野に入れていたからの」

「はい！ あなた本当にありがとう！ えっと……」

「アレスだよ。そう呼んで」

ルイズはすつと俺の手を取ると再びお礼を言ってくれた。

「ええ、アレスね？ 本当にありがとう！」

「いいんだ。」

それに、君のような可憐で可愛い子の使い魔なら男としては光栄だよ」

俺の手を握るルイズにひざまずくと、彼女の手の甲に軽く接吻をする。

女性に対する最大の礼儀として。

それに、もしこちらのルイズも向こうのルイズも本質が同じなら肯定されることこそが彼女の望みのはずでもあるから。

「いけない人ね……」

ルイズが恥じらいながら俺に言う。

言葉とは裏腹に満更でもなさそうだ。

「おっほん！ さて、話は終わりじゃ。」

ミス・ヴァリエールはコントラクト・サーヴァントをして儀式を終われせなさい」

わざとらしい咳払いをして、促すオールド・オスマン氏。

俺に男として羨ましそうな視線を送ってくるが、無視だ。

「あ、はい！ アレス、いい？」

「いつでもいいよ」

俺はそう言っただけ目を瞑ってその時を待つことにする。

暗がりの向こうにいるルイズが小さく呼吸するのが聞こえた。始めるようだ。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使

「い魔となせ」

空気が揺れて、甘い香りが鼻をくすぐる。

唇に彼女の柔らかい感触を感じると、すっと離れていく。

「終わりよ」

その声の合図と共に俺は目を開ける。

次の瞬間、俺の左腕に激痛が走った。

「つく！」

右手で左腕を押さえると、膝を床に付ける。

サイトがかなり痛がつていたがこれは確かに痛い。

こう、熱しられた何かを腕に押しつけられているような痛みだ。痛みは数秒で引いていく。

「どうやら、成功したみたいだね」

俺がそう言って笑って見せると、ルイズも安堵の笑みを浮かべる。

「さて、失礼。腕を見せさせてもらうよ」

儀式が終わったのを確認するようにコルベール先生が言う。

俺は自分で腕をまくり上げて、それを彼に見せる。

コルベール先生は、全員の使い魔のルーンをスケッチするのだ。

「ふむ、これは珍しい使い魔のルーンだな」

そう言いながらスケッチをとっていく。

自分に刻まれたルーンを俺も確認をした。

予想と反することのない、ルーンが左腕に刻まれていた。

刻まれていたルーンはガンダールヴだ。

あとでコルベール先生は驚くことだろうな。

「もういいですぞ」

そう言われて、俺は袖を元に戻す。

「もう授業という時間ではないの。ミス・ヴァリエールは彼と共に自室へ戻りなさい」

「え？ 彼とですか？」

ルイズは少し赤い顔で俺を見る。

それもそうか。

俺は男だ。男と同じ部屋にいると言うのは年頃の女性としてはやはり気になるだろう。

「学院長。私に割り当てられる部屋があればそこへ移った方が良いのでは？」

そう進言してみる。

すぐにも部屋を用意しようとしても言われると思ったが、反応は違った。

「ふむ。そうじゃな……。ミス・ヴァリエール、お主はどうじゃ？ 彼を他の部屋へやるかの？」

「えっと……。いえ、彼はわたしの使い魔です。」

わたしが責任をもって彼の衣食住を確保しますわ」

そう。そして、彼女の回答も俺の予想を覆させたのだ。

「いいのかい？」

「ええ。アレスは誠実そうですもの。」

ただし、もし変なことをしようとするならわたしのお父様に言いつけるわ。

いいわね？」

「わかったよ」

俺がそう言ってお礼に頭を下げた。

「さて、行きましょう」

ルイズが俺に促すと学院長室の出口へと向かう。

俺はルイズと共に学院長室を後にした。

ここから先、様々な試練が待ち受けているとも知らずに。

第一話（後書き）

まずはこのような作品をお読みいただけたことに最大の感謝を致します。

本編もまだ書き上がらぬうちに書き始めてしまいました。

今後、この話がどのように完全に思いつきで始めてしまったためプロット等も作っていません。

一応、原作に沿う形で書くつもりではあります。

ただ私のことですので、書き直しの出来ないシナリオの変更もあるかも知れません。

恐らく、自分の小説のキャラ使って再び二次創作をすることへ呆れている方もいらっしゃるでしょう。

こんな愚かな私ですが、もし宜しければお付き合い頂けると幸いです。

2010/5/30

第二話

学院長の部屋を出た後、俺はルイズに連れられて彼女の部屋へと行く。

彼女の部屋は俺の記憶の中の場所と同じだった。

ただし、俺が関わっていないルイズの部屋は記憶とは違う。

俺の知っているルイズの部屋は、秘薬の調査に必要な道具などが結構あった。

こちらのルイズはそういうものが無く、比較的すっきりとしており尚且つ女の子の部屋と言うものが強調されている。

さすがに部屋をジロジロと見るわけにはいかなかったためさっと流して見ただけだ。

「さてと」

ルイズは部屋の椅子に座ると、立っている俺に視線を向ける。

「まずは、使い魔になってくれてありがとう」

「いや、気にしないで」

そもそも使い魔になるのだってこっちの打算だ。

サイトのように呼び出された以上、使い魔になる運命なのだろうとも思ってたわけだしな。

「それで、どうしてわたしを知っていたの？」

どうやら俺があとで説明することを覚えていたらしい。

まあ、正直に答えていいだろう。

信じてもらえない可能性の方が高いが。

「僕は、並行して存在するハルケギニアからやって来たんだと思う」

「は？ あなたわたしをバカにしてるの？」

第一声が、並行する世界から来たと言えばこういう反応が返って来るよな。

俺だって目の前のルイズが実はわたしも並行した世界から来たのなんて言われてもいきなりは信じられないだろう。

「違うよ。まずは落ち着いて話を聞いてね？」

訳が分からないと言う顔で俺を見るルイズに、俺は説明を始める。考え方はまさに「もしも」と言う世界だ。

分かれ道があつて、片方を選び進んだ未来と、もう片方を選んで進んだ未来が存在するという仮定の下、説明した。

ルイズと共に育ってきたことは客観的に説明しつつ、どんな場所から来たのかを丁寧に話した。

考えが間違っていないければルイズはこちらの世界でも努力家。

魔法を使えないからこそあらゆる知識を得ているだろう。

彼女は頭はいいはずなのだから。

信じられないにしても、ある一定の理解できるはず。

その考えは正しかった。

最初は胡散臭い顔をしていたルイズだが、真剣な俺の説明にやがてはある一定の理解を示したからだ。

「まだ信じられないけど、あなたの仮定はありえるかも知れないわ。とりあえず、あなたが本来は貴族だったと言うことは理解するわよ」

貴族だったと言う言葉に若干違和感を感じつつまずはよしとする。

「ありがとう。」

正直、全く信用してもらえないとなると僕も悲しいからね。

それで、今後僕は使い魔として働くわけだけど」

「そうね。」

あなた、秘薬の知識はある？」

「あるよ。秘薬の研究は趣味の一つでね。」

えっと、例えば……」

俺は懐からビンを数本取り出す。

「これらの秘薬は、体を異常な興奮状態にして痛覚を鈍くし、人間の身体能力を向上することが出来る秘薬だよ」

昔使っていた秘薬の改良版だ。

異常な興奮状態に陥ると脳内麻薬の一つアドレナリンを大量に分

泌させる。

痛み等を感じなくなる。

秘薬が切れれば、痛みが戻るが前みたいに敏感になることもない。その分、身体強化も抑えられているが安全に配慮できた秘薬だ。ちなみに持続時間は約十分程。

「なんでそんな秘薬があるのよ？」

俺が取り出し秘薬を見て首を傾げる。

まあ、普通は使わない秘薬だからな。

「偵察任務や、単独での戦闘時の切り札だよ。」

実際にこの秘薬のおかげで一度危機の乗り越えさせてもらったね。改良前だったためか、半年くらい意識不明だったが。

余計なことまでは言う必要もない。

「そ、そう。あと主人の耳や目になるって方だけど……」

「あいにく僕は人間だからそういう能力はないね」

「そうよね……」

最後の主人を守る方は話を聞く限りは問題なさそうだけど、どうかしら？」

「僕も問題ないと思うよ」

トライアングルクラスだし、オリジナルのコモンスペルを持ち合わせている。

戦術、戦略も立てられる。

この世界のトリステインがどうなるかは知らないけど戦乱に巻き込まれるなら力になれるはず。

もっとも信用されていないから捨て駒扱いになるだろうけど。

「まあ、いいわ。」

それで一つ申し訳ないのだけど……。

わたし、人間が使い魔だなんて思わなかったから寢床、藁なのよ。そう言っただけが指差す先には藁が積まれていた。

結構、懐かしい。

戦場で寒さを凌いだりするのに農家から良く借りて使った覚えが

ある。

「ああ、僕は構わないよ。

慣れてるしね」

「な、慣れてるの？」

慣れていることにルイズは驚いたようだ。

藁で寝るのに慣れてる貴族も珍しいから驚くのも無理は無い。

「任務時で急激な寒気に襲われたときなんか良く家畜の藁を貸してもらったから。」

野宿とかしょっちゅうしてたよ」

「そうなの……？」

「まあ、結構危険な任務とかあったからね」

立場の違いをはっきりさせたいのか、結局俺の寝床は藁の寝床のままになった。

ふむ、こっちのルイズは随分と身分の差に拘るんだな。

その後、少しルイズと雑談するといいい時間になる。

「もついい時間ね……」

ルイズがそう言うのと、急に服を脱ぎだした。

何となく、その理由がわかって俺はため息を付きながら言う。

「ルイズ、目の前で男性が居るんだから服を脱ぎだすのはどうかと思っうよ？」

「あら、ごめんなさい。

使い魔だし、気にならないの」

これだ。

どうやらさっきの話に対して一定の理解をしてくれたみたいだが、返って俺がこの世界の貴族じゃないためか俺を下に見ているようだ。つまり良くて落ち貴族、悪くて平民の扱いである。

「使い魔でも僕は男だよ？」

変な気を起しはしないけど、目の保養ぐらいにはなるんだけど？」

僕が慌てることなく、そうさりと言うとルイズは不機嫌そうに言う。

「あなたを試してるだけよ」

本当は俺が焦るのを期待したんだろうな。

さっきのやり取りからすると、慌てた俺に使い魔如きに恥ずかしの必要が無いとか言うつもりだったんじゃないだろうか。

そう思い、俺は少しカマをかけてみた。

「ついでに言えば、使い魔だから見られても恥ずかしくない。ってことだよな？」

「物分りがいいじゃない。」

そうよ。だからわたしがここであなたの前で着替えても恥ずかしくなんて……」

ないと言ったのだらう。

だが、俺が笑みを浮かべながら視線を反らさずに胸を注視しているためボタンを外す手が止まる。

「どうしたの？ ほら、僕は使い魔だし気にせず着替えをしなよ？ それとも認める？」

僕が使い魔じゃなくて、人間の男だって事に」

少し意地悪そうに言うと、ルイズは体を小刻みに震わせた。

恐らく怒っているのだらう。

からかった上に立場の違いを分からそうとしたんだろうが、そうは行かないさ。

「き、着替えてやろうじゃないの！」

「つて！ ええ！」

俺の挑発に頭を冷やすこともなく、使い魔と言うことを曲げたくないのか自棄を起こして着替えをするルイズだった。

翌日。

俺は藁の布団で目が覚める。

慣れているとは言え、気持ちよく寝れるものじゃない。

昨日、ルイズはあのまま俺の目の前で服を脱いで下着まで脱いだ。本当に目を反らさないためにかなり睨まれてしまった。しかも涙

目で。

真っ赤な顔をしたまま裸の上にネグリジェを着て、俺にいい根性してるわねと言われた。

嫌な性格なだけだと思うのだが。

ちなみに俺はさすがにルイズが下着を脱ぐ時、何気なく立ち上がり窓から外を眺めた。

もっともそれまで目を反らさなかったんだからデリカシーはないと思われただろう。

そうは言っても単に自棄を起こしているだけの女の子の裸まで見るわけには行かないから見なかったってわけだ。

まあ、途中までは本当に目の保養になったし。

その先は恐らく毒にしかない。

俺は起き上がると、まだベッドの上で寝ているルイズを見る。

男が近くにいると言うのに、なんて無防備な。

少し寝返りをうつてむにやむにやと言葉にならない寝言を言う。

そんなルイズを見て俺は苦笑した。

「昨日、起こせと言われた時間まではまだあるか……」

さて、もう起きてしまったし今の時間なら人もあまりいないだろう。

せっかくガンダールヴと言う力も手に入れたわけだし、少し力を試してみるとするか。

なら場所は中庭つてところか。

俺は音を立てないように、部屋を出ると中庭へと向かった。

少し歩くと、俺は丁度曲がり角で誰かとぶつかってしまった。

俺は転ぶことは無かったが、相手が後ろに転んでしまう。

「きゃ」

可愛らしい声が聞こえて、次に何かが大量に床へと落ちた。

大量に落ちたのは衣類と言うことは洗濯物らしい。

と言うと、メイドの子か。

「ごめん、大丈夫かい？」

「いたたた……。あ、す、すみません！ 貴族様にぶつかってしま
って」

メイドの子はシエスタだった。

やはりこちらの世界にもシエスタはいるらしい。

「いや、僕もこの時間に人が歩いていると思わなかったからね。

それより、洗濯物を散らかしてしまつてごめん」

「そ、そ、そんな！ 滅相ありません！

わたしの不注意ですから……。って何を？」

どもりながら謝るシエスタに苦笑しつつ、俺は洗濯物を拾つてい
た。

何せ、ぶつかった原因は俺にもあるんだし。

「おやめ下さい！ 貴族の方にお手を煩わせるわけには行きません
！」

「いや、これは僕が好きでやっているんだ。

手伝わせてはくれないかな？」

俺がそういうと、シエスタは困ったように俺を見つつ分かりまし
たと答えてくれた。

洗濯物を拾い終わり、ついでに洗い場まで俺が運んでいく。

最初は拾うのを手伝ってもらったのにそこまでしていただくわけ
にはと言っていたがたまには手伝ってもらつのもいいよと言って半
ば強引に手伝った。

「それにしても、変わった貴族様もいらつしやるのですね」

「うちの家系が民は貴族、平民関係なく大切にするのが家訓でさ」

トリスティンでも稀に見る管理された領地だったのだ、うちは。

戸籍に、生活レベル、教育レベルの管理。

家臣や平民の収支を管理することによる適切な税率の設定。

そうしたことにより、平民の生活も安定し意外と貴族と平民の垣
根が少ない場所だったのだ。

俺がそういう話をするとうシエスタが首を振りながら言う。

「そんな領地なんて聞いたことありません」

「それはそうだよ。」

何せ随分前に取り潰されているからね。

実は僕は落ち貴族なんだよ」

落ち貴族という発言に、シエスタはごめんなさいと謝ってきた。貴族にとつて家を取り潰されるのは屈辱以外の何者でもない。

気にしないでは言ったが、こういう事をあまり話すのは好ましいものではない。

その後も雑談をしつつ、洗い場に着くと俺は洗濯物を下ろした。

「ここまで運んでいただいてありがとうございます」
「いいって。」

単なる善意の押し付けなんだし」

「善意を押し付けてくれる方なんて滅多にいません。
わたし、シエスタって言うんです。」

何か困ったことがあったら何でも言ってください。

わたしに出来る事ならなんでもしますから」

そう言うてにっこりと笑うシエスタ。

ルイズとはまた違った魅力がある笑顔だ。

「ありがとう。何かあったときは頼むよ」

俺はそう言つと、今度こそ中庭へと行くのだった。

中庭に來ると、俺は早速鉄でショートソードを錬金して握つてみた。

剣を握ると、左腕が熱くなり光るのが分かる。

また、握っている剣の使用用途などの情報が流れてきてどういう
場面でどういう使い方をすればいいのかまで分かった。

例えば、持っている武器をどう使えばいいのかが分かると言う
よりは初めから知っているような状態になるのだ。

俺はこの武器の使い方を「知っている」と言うわけである。

「しかし、体が軽くなると聞いていたがこれならサイトが五人のメ
イジを倒せるのも頷ける」

ガンダールヴのルーン発動時は、身体強化も加わるわけだが凄まじい。

例えば難しいほど体に力が漲っている。

「どれくらい、素早く動けるか試してみるか」

足に力を込めて、地を蹴る。

たった一踏みでハメートルくらい跳躍してしまった。

着地したのはいいものの一步間違えたら壁に激突するところだったぞ。

次に今度はステップを踏みながら近くの木を敵と想定して近づいてみる。

右、左にステップを踏みながら接近するが速い、景色が高速道路でかつ飛ばす感じた。

次は真上への跳躍。

両足に力を込めてジャンプすると真上に三から四メートルくらい飛び上がる。

で、落ちるときは特有の浮遊感もあり感じずに着地した。

「おいおい、これは凄すぎだろう。」

一騎当千と聞くが伊達じゃないかも知れないな」

作った剣を放して見ると、体が軽いのが無くなる。

ルーンの効果は凄いが、ルーンの発動が終わった後は若干の疲れを感じた。

「確認は終了だな。」

そろそろ時間だし、ルイズを起こしに行くか」

俺はショートソードの鞘もついでに錬金すると腰に挿してルイズの部屋へと戻った。

ルイズの部屋に戻ると、起こしてくれと言うだけあってまだルイズは眠っていた。

可愛らしくベッドの上で丸くなっている。

気持ちよさそうな寝顔だ。

「起こすか」

俺はそう言つて掛け布団を退かす。

すると女の子特有の甘ったるい匂いが漂い、一瞬くらつと来た。理性が無ければ襲いたくなっていただろう。

「ルイズ、朝だよ」

まずは彼女の耳元で大きめの声で起こす。

「んう」

良く分らないが可愛いらしい声を出しつつ、起きようとしなない。何度か、耳元で声を上げて起こすが効果は無かった。

一瞬、耳元に息を吹きかけようかと思つたがそれはいろいろと問題ありそうなので却下。

次に彼女の体を揺らしたところ、何とか目を覚ましてくれた。

「やあ、ようやく起きたね」

「ん？ あんた誰？」

「やれやれ、自分で召還した使い魔も忘れちゃうのかな？」

少しオーバーに首を振る。

「ん？ ああ。アレスだったわね」

ルイズは大きなあくびをしながら起き上がる。

ベッドから降りると、俺にとんでもないことを言い出した。

「着替え」

「は？」

「だから着替えさせてよ」

貴族は確かに自分の身の回りのことをさせるが、それを男の俺にやらせるか？

昨日ので懲りたかと思つたがそうでもないらしい。

仕方ない、ここは一つ貞操教育を施そう。

「僕は落ち貴族かも知れないけど、元貴族だよ？」

昨日もそうだから言わせて貰うけど、たとえ使い魔、使用人であっても男に平気で肌を見せたりましてはダメじゃないか？

第一、君はネグリジェの下は裸だよ？

女性にとって見られたら恥ずかしいところをわざわざ見せると言

うのはどうかな？

例えば下は排泄行為をするところだし、今は気にならないのかも知れないけど胸なんて男にとって見れるだけでも興奮する。

ましては着替えさせている時にどさくさにまぎれて君の体を堪能する事だつて出来るんだ。

それでも言うのならそれでもいいけど、それは単に僕を喜ばせるだけになるんだよ？

ましてはこの事を君の大好きなカトレアさんにでも知られたら彼女はどれ程悲しむと思う？

だいたいね……」

「ああー！ もう、いいわよ！

わかったからもう自分でちゃんと着替えるわよ！

そこまで言うならアレス、あんたはわたしが着替えるときは廊下に出てなさい！」

真っ赤な顔をしながら廊下を指差して、叫ぶルイズ。

「ようやく分かってくれたんだね？

君の大切な体なんだ。

この人と決めた人が現れるまで大切にしないとね」

さり気なくルイズの事を考えていることを言うが、怒り心頭のルイズはあまり効果がなかった。

「わかったから早く出て行きなさいよ！」

「着替え終わったら呼んでね」

俺はそう言つと、廊下へと出て行く。

やれやれ、俺が関わらなかつたルイズはどうも気性が激しいな。

そんな事を考えつつ、俺はルイズの着替えを待つのだった。

第二話（後書き）

さて、第二話如何だったでしょうか？

今回は原作に沿う形なのであまり新鮮味はないかも知れません。

強いて言えば、アレスがルイズを説教すると言っことくらいでしょうか？

それでは今日はこの辺で。

第三話

ルイズの着替えが終わり、朝食へ向かおうとすると部屋から一人の女性が出てきた。

赤い髪、長身でスタイルがいい。

何よりも自己主張の強い、大きな胸が女性としての魅力と存在感を存分に出している。

キュルケが使い魔のサラマンダーと出て来たのだ。

サラマンダーの名前に変わりが無ければフレ임だな。

キュルケは俺とルイズを見つけると、挨拶をしてくる。

「あら、ルイズじゃない。おはよう」

「おはよう、キュルケ」

ルイズは素っ気無い態度で返事を返す。

向こうのルイズはキュルケと親友と言うくらいの中だが、こっちはそうでもないらしい。

そんなルイズの態度には気にも留めず、キュルケが俺を覗き込むように見る。

人間が呼び出されたんだ珍しいんだろう。

「で、あなたがルイズに召還された殿方ね？」

「そうだよ。アレス・ジルアス・ド・ヴァルガード。アレスでいいよ。えっと……」

「キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー。あたしもキュルケでいいわ」

「な、何、自己紹介してるのよ！」

自己紹介をしたのが気に食わないのか、俺をキュルケから離しつつ言う。

「あら、いいじゃない。自己紹介くらい。

それにしても、いい男じゃない……。

ルイズなんてやめてあたしの使い魔にならない？」

熱い視線を俺に向けながら擦り寄ってくるキュルケ。

さすがにいきなりそれはないだろう、と思う。

心なしか、キュルケの使い魔もショックを受けているようにも見えるじゃないか。

「何、人の使い魔に色目使ってるのよ！ 自分の使い魔がいるでしょ！」

「フレイムはフレイムよ。この子は当然、あたしの使い魔だからいいの。」

でも、こういう殿方もいいじゃない？」

ねえ？ と俺に振ってくる。

どう答えるというのだ？

無茶苦茶な発言に俺は苦笑して答えることしか出来ない。

ルイズは一刻も早くここから離れたいらしく俺の腕を掴むと歩き出す。

「もう、行くわよ！」

「そうだね」

「アレス、またね」

キュルケは投げキッスをして俺を見送ってくれる。

魅力があるのは分かるが、いい男なら誰彼構わず声をかける性格は直した方がいいだろうに。

キュルケと別れて、アルヴィーズ食堂へ向かう。

ルイズはキュルケとあったからか機嫌が悪そうだ。

「あんだね！ どうしてキュルケと挨拶なんてするの！」

「挨拶くらいは社交辞令でしょ？」

「キュルケはダメなの！」

俺の前に立つと睨むように言う。

理由は分かる。

ヴァルガード領はヴァリエール領と隣り合わせだ。

その歴史はやはりゲルマニアとの戦争で共に戦っていた。

戦争になるたびに、ゲルマニアのツェルプストーとは対峙してい

たのだから。

だから理由を指摘してみる。

「トリステインとゲルマニアの国境に面しているからかな？」

戦争で常に殺し殺される立場、そして先祖代々寝取られているし。それが理由で嫌ってるのかい？」

「わ、分かっているじゃない。

そうよ。だからダメなの！

いい？ わかった？」

「そうは言ってもね。

今は平和な時代だし、戦争になるまで仲良くしてもいいんじゃないかな？

ルイズも友達が多い方がいいし、場合によってはゲルマニアと友好を結ぶ際の外交にも役立つよ」

昨日聞いた話からすると近いうちにアルビオンが落ちる。

恐らく、こちらのアルビオンも目的は聖地奪還かもしくはハルケギニア統一が掲げられているはずだ。

ともすれば、トリステインが取れる行動は三つ。

一つ目。革命後のアルビオンを国として認めて、同盟を結ぶ。

恐らく吸収されるだろうが、血なまぐさい戦争に発展しにくいはずだ。

まあ、どちらにせよ苦虫を齧るくらい辛いだろうが。

二つ目。トリステイン単独でアルビオンと戦争をする。

これはトリステイン負けが目に見えている。

俺が関わっていないトリステインの勢力は大よそ三万弱。

向こうが四万〜五万は居るはずだから単純に数で押されれば負ける。

あとトリステインはあくまでも水のトリステインだ。

浮遊大陸で、否応にも飛行技術を発達させないとならないアルビオンと比べると空軍が弱い。

また戦争において、空を制するは戦を制すると言っても過言じゃ

ないのだ。

三つ目は、ゲルマニアとの同盟。

どうやってやるかは別にして、そうなればツエルプストーとも戦場で仲間として顔を合わせるのだ。

そうなった場合を考えて仲を良くしていて損は無い。

「そ、それでも嫌なの！」

とは言え、そんなことまでルイズは分かるわけも無く拒否される。同じ学院にいるんだ。

何かをきっかけにルイズがキュルケと仲良くなることもあるかも知れない。

「そうかい。じゃあ、努力はするよ」

そう思い、俺はとりあえず応えるのだった。

アルヴィーズの食堂まで来ると俺は入り口で一端止まる。

「どうしたのよ？」

「いや、ここから先は一応、貴族の食堂ってことになってるでしょ？僕はもう貴族じゃないし、入っていいのになって」

学院在学中なら、ともかく今は違う。

ましてはこつちでは悲しいことに貴族でもない。

「僕としては食事は使用人たちと一緒に食べてもいいんだけど？」
と言うか、たぶんそちらの方がいいに決まっている。

「そうね……」

まあ、いいわ。今日は特別に入っているわよ。

わたしが許可するわ」

「いいの？ まあ、明日からは使用人の人たちと食事をするように話を付けておくよ」

「わかったわ。わたしも昨日の今日だから段取りが悪かったわ」
とりあえず俺とルイズは食堂に入ることにする。

食堂はさすが全生徒が入るだけあった、とにかく広い。
テーブルもいくつもある。

その上に花や果物が入ったバスケット等があった。

俺もつい先日までここに来ていたわけだが、まさ使い魔としてここに来るとは思わなかった。

席を探している最中、こそそとゼロのルイズが召還した使い魔だぞとか、親戚でも連れてきたんじゃないかと言う声が聞こえてきた。

特にどうせ使い魔を召還できずに先生に泣きついたんだろうなどの言葉が多い。

そのことに悔しそうに顔を歪めるルイズ。

だから、俺は彼女にこう言った。

「低俗な連中のことなんて気にしない。

紛れも無く僕は君に召還されて、使い魔になってるんだから」ルイズはただ頷くだけだったが。

ルイズが座る席まで来ると、俺は椅子を引く。

「あ、ありがとう。気が利くわね」

ルイズは引かれた椅子にスカートを内側に折りながら座る。

「女性に優しくするのは紳士として当前だよ」

「紳士だつて言うなら昨日のあれは何よ？」

そ、その、わ、わたしの、その……、見てたじゃない……」

昨日の事を思い出して顔を真っ赤にするルイズ。

恥ずかしいならやめておけば良かったのに。

「ルイズ、今朝の続きする？」

「わ、わかったから。あれはわたしが悪かったわよ。

あなたは使い魔として呼び出したけど、ちゃんとした人ですものね。

でも、やっぱり昨日のは……」

そう言つて赤い顔で俯いてしまうルイズ。

うむ、今朝の説教がだいぶ効いているようだ。

心を鬼にした甲斐があるってものである。

「わかつてくれたならいいんだ。

昨日の事は僕もやり過ぎだったからね」

「もう、いいわ。忘れましょう」

赤い顔をしたまま、ルイズは言う。

まあ、忘れた方がいいだろう。

あんな恥ずかしいこといつまでも覚えていたくはないはずだ。

もつとも、忘れることも出来ないだろうが。

その後、食事をしたのだがルイズがすっかりと席がないのを忘れていて臨時に席を用意してもらえた。

ルイズが食べる食事の半分を分けてもらったわけだが、いつ食べても朝から食べる量じゃないと改めて思うのだった。

食事が終わり、俺はルイズと共に教室へと行く。

教室に入ると一斉に俺へ視線が集まった。

ひそひそと話や、薄笑いが聞こえてくる。

ルイズ以外の使い魔は人間以外の生物だ。人間を呼び出したルイズをバカにしているのだろう。

その後、シュヴルーズ先生が教室へと入ってくるが、うかつに俺のことに触れてルイズと他の生徒で喧嘩になりそうになったりした。向こうのルイズはその辺、コモンスペルが使えるのと自分の系統の関係上気にしなかった。

だが、こちらのルイズはそうはいかないのだ。

恐らく、フォローしてくれる人がほとんど皆無だったせいかわれる度に突っ掛かってしまう。

そんな事もあったが授業は滞りなく進んだ。

今期、最初の土の授業と言うこともありまずは基本として四大元素について尋ねる。

生徒が、それに答えると土の特性について話し始めた。

ちらりとルイズを見ると真面目にノートを取っている。

「復習の内容なのにノート取るなんて偉いね」

「昨日、話したけどわたしは魔法が使えないの。」

だから、もしかしたら聞き逃してたりまだわたしが気が付いていないことがあるかも知れないわ」

真面目な子だ。

向こうのルイズもそうだったが、知ることによって現状を打開しようとするその姿に俺は尊敬する。

「さすが、僕のマスター」。

その努力は必ず報われるよ」

だから素直にそう評価したのだが、反応は不評だった。

「どーだか」

授業が進み石を金属に変える実演になる。シュヴルーズ先生がまずはお手本を見せることになった。

短い呪文を唱えて、石に向かって杖を振ると石は光り輝く金属へと姿を変える。

「ミ、ミセス・シュヴルーズ！ それは金ですか！」

生徒の一人が興奮して尋ねる。

「いえ、これは真鍮です」。

金を錬金出来るのはスクウェア・クラスのみ。

わたくしはただトライアングルなので金は錬金出来ないのです」

彼女は謙遜して言う。

いや、しかしトライアングルという所に若干の誇りを感じられた。

「さて、それじゃこれを誰かにやってみてもらいます」。

そうですね……」

シュヴルーズ先生が誰を当てようかと教室を見回す。

すると、俺達の方に視線が来て止まった。

「それでは、ミス・ヴァリエール」。

あなたが錬金をやってみなさい」

そう言う教室中がざわめき出す。

ルイズも膝の上で拳を握ったまま立とうとしない。

理由は失敗するからだろう。

しかも爆発と言う形で、だ。

そうでなければこんなに騒がないはず。

シュヴルーズ先生は何事かと注意をした時に、一人の生徒が手を上げて言った。

「ルイズはやめた方がいいと思います」

キュルケだった。

その言葉を皮切りに、周りからも賛同の声が聞こえてきた。

「何故です？ 彼女は非常に努力家と聞いてますが？」

さあ、ミス・ヴァリエール。周りのことなど気にせず、やってみなさい」

「ルイズ、ダメよ！」

叫びにも近いキュルケの言葉に、何かを決意したのかルイズが立ち上がった。

「わたし、やります！」

「ルイズ！」

「や、やめろ！」

周りからは悲鳴のような声が響く。

ルイズは一度俺の方を見た。

俺は頷いて見せると、構わず教壇の方へ歩いていく。

「さあ、錬金したい金属を思い浮かべて魔法を唱えるのです」

「はい」

石を見つめて、ルイズが深呼吸をする。

意を決したように短い呪文を唱えた。

それと同時に、教室では皆が机の下へと隠れる。

中には教室の外にまで逃げ出すものもいた。

ルイズが杖を石に向けると同時に、俺の予想通りの事が起きる。

石は金属に変わることなく、教室内に爆発が起きたのだ。

威力は凄まじかった。

爆発することは知っていたが、俺は向こうの力の制御が出来るルイズしか知らない。

つまり、こちらのルイズがまさか全くコントロールが出来ないと

は思わなかった。

机は吹き飛び、窓ガラスが全て割れる。

当然、俺も吹き飛ばされて壁に背中をぶつけてしまった。

案外、威力がある。

立ち竦む煙が収まってくると、照れ笑いをしたルイズが教壇のところに座り込んでいるのを見つける。

「ま、まあ、こんなこともあるわ」

そうルイズが言くと、教室内からいつもだろう！　と大きなブーイングの嵐が起こるのだった。

その後は授業にならなかった。

教室内にいた使い魔たちが爆発のショックで混乱して暴れるなどで、とても授業が出来る状態ではなかったのだ。

ルイズに実演を指示したシュヴルーズ先生は、生徒達に止められたのも忘れてルイズに教室の片づけを命じた。

正直なところ反論したいところだったが、ルイズが大人しくその命を受けたので俺も黙っておくことにする。

「笑っちゃうでしょ？」

教室内を片づけしていると、唐突にルイズが言う。

「何が？」

「とばけないで！　わたしの魔法が爆発することよ！
使い魔のあなたは魔法が使えて、わたしは使えないのよ！」

半ば叫ぶような声で俺に訴える。

良く見ると目頭に涙さえ浮かべていた。

「必死に努力する君を尊敬するけど、馬鹿には出来ないよ」

「わたしをからかうの！」

「いや、違うよ。」

僕は君がどうして爆発しているか知っているからね。

原因が分かれば馬鹿にすることもないでしょ？」

「え？　し、知ってるの！　わたしの魔法が爆発する原因が！」

俺の言葉に驚くと、まるで縋るように俺に掴みかかってきた。

「原因は何なのよ！ 教えて！

それが分かれば爆発させないで済むんでしょ！」

必死そのものだ。

今まで、原因すら分からなかった。

それが今、俺が知っていると云ったことで希望が見えたのだろう。とにかくそれを教えて！ と言う思いが強く伝わる。

「教えるけど、まずは落ち着いて」

俺の両腕を掴んでいるルイズに優しく言うと、はっとして俺から離れた。

「いいかい？ 教えるけど一つ約束して欲しいことがあるんだ」

「なに？」

「どんな話であつても最後まで口を挟まずに聞くこと。いい？」

僕の話信じ切っていないんだ。絶対に何か言いたくなると思う。でも、僕は真剣に話すつもりだから最後まで聞いて欲しいんだ」

真剣な眼差しでルイズを見る。

これからルイズに言うことは、彼女の系統の話。

当然、彼女からしてみればからかわれていると思つて間違いない。だからこそ、最後まで聞いてもらうことが重要なのだ。

「わかつたわ」

俺の真剣さが通じたのか、ルイズも真剣に答えてくれる。

これなら話を聞いてもらえそうだ。

ルイズの目を見て、深刻な口調で俺は語りだす。

「単刀直入に言うよ。

君の系統が虚無だから。

それが原因で虚無以外の系統の魔法が君の力に耐え切れずに爆発するんだ」

虚無と言つ言葉に明らかに困惑するルイズだった。

第四話

真面目な、そして深刻な口調で虚無の系統と言ったせいもありルイズも困惑している。

だが、それも一瞬の事でルイズの顔が怒りで歪み始める。

「ふざけて…！」

「わざわざ、ふざけるために言っていると思うの？」

強い態度で、俺はルイズの目を見る。

真剣に力強い目でルイズに訴えかけると、ルイズはそっぽを向いたものの反論をやめる。

ルイズは、俺との約束を忘れて反論しようとしたがまあ状況から考えれば仕方ない。

それは大目に見るとして改めて告げる。

「僕が並行世界から来たと話したと思うけど、向こうのルイズは虚無の系統だったんだ。

並行世界では僕とルイズが出会ったのは君が七歳の頃。

ルイズは魔法が上手く行かないと言うのを聞いて、一緒に頑張ろうと練習を始めたんだよ。

だけど、どんなに試行錯誤を重ねても、結果は同じだった。

失敗するたびに泣きそうな顔をするんだよ。

僕はそれが痛々しくて、何とかしたかったんだ。

で、とにかく調べたんだよ。

それこそ徹底的にね。

調べていくうちに一つの仮説に辿り着いたんだ」

普通、十歳の子供が徹底的に調べても限度があるんだが、一度転生している俺には出来ないことではなかった。

「仮説？」

ルイズの問いに俺は頷く。

どうやら真剣に話していくうちにルイズも真剣に耳を傾けてきた。

「虚無、もしくは未知の系統なら成功しない可能性があると言うことだよ。」

どんな文献にも四大元素に関しては書かれてた。

でも、虚無だけは書かれていない。

もし、魔法が成功しない人間がいて、その人が目覚めるべき系統が四大元素でなかったら？

そして、もし特殊な系統で他の四大元素の系統を受け付けなかったら？

常識の範囲外の事になるんだ。

だから、僕はルイズを四大元素以外の系統だと仮定して魔法の練習を力の制御を中心に切り替えたんだよ」

「力の制御？」

きょんとした表情で尋ねてくる。

俺は頷くと続けた。

「ルイズの爆発という力は実は他の四大元素の系統だとトライアングルクラスにでもならないとまともに使えないんだ。

でも、ルイズは一回の失敗の威力は半端じゃない」

「わたしをからかっているの！」

「違うよ。ちゃんと聞いて？」

僕はルイズに呼び出される前まで戦場いたんだ。

もし、あの場であれ程の爆発を連発できたら戦況は簡単に変えられる。

凄い力なんだ。

つまり、制御できずに下手に魔法を放って怪我をする場合だってある。

力を制御できれば、使いたい時に適当な威力に抑えられるようになるんだ。

それは次のステップへ繋がれることにもなる」

「次のステップ？」

「系統に目覚めればコモンスペルも使えるからね。」

その調整だつて出来るんだ。

ちなみに、僕が呼び出される時点で向こうのルイズはどの系統にも目覚めないままでコモンスペルは使いこなせるようになってるんだよ」

「ほ、ホント！」

系統魔法は愚か、コモンスペルすら爆発するルイズには寝耳に水だったはずだ。

わずかな希望が見えてか、顔が明るくなるのが分かる。

「そうだよ。」

さて、僕は力の制御をルイズにさせながら虚無についても調べを進めていたんだ。

そして、ルイズが虚無であるという根拠の元を調べ上げた」

「何なの？」

僕は左腕の袖を捲るとルーンを見せる。

サイトは左手にあったが、俺には左手が無いため腕にある。

そして、このルーンを見せた目的は一つだ。

「このルーンがどうかしたの？」

「ガンダールヴ。神の左手ガンダールヴのルーンなんだよ、これは」
告げた言葉にルイズは一瞬遅れて、驚く。

「で、伝説の使い魔のルーン！」

「そう。そして、向こうのルイズもやっぱり春の使い魔召還儀式で人間を呼び出したんだ。」

そして、その彼にもこれと同じルーンが浮かんでいたんだよ」

「……」

ルイズは少し呆然するように数歩後ろに下がるとその場にしゃがみ込む。

シヨックでも受けたのだろうか？

「ルイズ？」

「ふ、ふふふ。あっははははは！」

いや、シヨックを受けているわけでは無さそうだ。

なぜか笑っている。

「ルイズ？ 大丈夫？」

「ええ。わたし、ゼロってずっと言われて馬鹿にされてた。

でも、まさか虚無だなんてね。

誰も分かるわけじゃないじゃない？

これが笑わずにはいられないわよ！」

そういうとうっすらと涙を浮かべて笑っていた。

「ルイズ……」

ずっと辛かったんだろう。

味方は恐らくカトレアさんだけだろう。

エレオノールの性格だと、心配していても強気な面が出ているのもあって素直に心配は出来ない。

ルイズは笑うのをやめると、ずっと立ち上がる。

俺の方を向くと優しい口調で言う。

「話してくれてありがとう」

顔には不安や不満は無い、少しすっきりした顔をしていた。

「で、もちろん、このわたしもコンスperlくらいは使えるようになるんでしょね！」

そして、すぐにいつものルイズに戻ったようだ。

こっちのルイズはこの調子じゃないと駄目だ。

「もちろん、僕が教えて上げるよ。」

君はただのゼロじゃないんだ。まさに虚無^{ゼロ}なんだよ。

だから、自信もつていい」

「使い魔に慰められるなんてね。

さて、じゃあ、さっさと教室片付けるわよ！

それと今夜から早速力の制御について教えなさい！」

「マスターの仰せのままに」

俺がそう言つて丁寧にお辞儀をする。

ちよつと顔を上げてルイズの顔を見ると、どちらともなく笑い出すのだった。

教室を片付け終わると俺達は食堂まで来た。

だが、今回は俺は入らなかった。

「どうしたのよ？ 使用人と食事するのは明日からじゃない」

「そうなんだけど、今の内に言っておいた方がいいかなと思ってね」

そう、明日からではあるが先に言っておいて損はない。

こっちのマルトーさんにも挨拶しておきたいしな。

「そう？ じゃあ、また半分分けておくから」

「ありがとう。じゃあ、すぐに戻るから」

俺はルイズにそう言っていると厨房へと向かう。

「あら、確かアレスさん？」

厨房へ向かうと途中に、今朝会ったシエスタが同じく厨房へ行こうとしているのか出くわす。

これは丁度良い。

「ああ、シエスタ。丁度いいところに。」

実は僕の食事が無くてね。

今はルイズ、えっとヴァリエール嬢に半分分けてもらっているんだけど、明日からそっちでお世話になれないかと思ってるさ」

「え？ ミス・ヴァリエールに？」

と言うことは、ミス・ヴァリエールが召還したと言う人間の方はアレスさんなんですか？」

「そうだよ。あれ？ 言ってなかったっけ？」

「聞いていませんよ！

それでお食事でしたっけ？

じゃあ、コック長のマルトーさんに話をすればたぶん明日から用意してもらえると思います。

わたしも丁度、お昼に戻るところだったんで一緒に行きましょう」

「頼むよ」

シエスタと一緒に厨房へと来ると、調理のピークは過ぎたのかすぐにマルトーさんに会えた。

どうやら、俺のことはすでに話してあったらしく俺が自己紹介をする話を聞いていたのか、元貴族とは言えお前さんは良い奴らしいな気に入ったぞといきなり気に入られてしまった。

「マルトーさん、アレスさんはマルトーさんにお問い合わせがあるらしいんです」

「おお、何でも俺に言ってみろ」

「実は、今、ヴァリエール嬢に食事を分けてもらっているんです。すでに貴族じゃない僕はあそこにはいない方が波風も立たずに良いと思うのでこちらでお世話になりたいと思ひまして。

もちろんただと言うわけには行かないので、何か手伝えることがあるなら手伝わせて下さい」

頭を下げてそう言つと、マルトーさんは驚いたように言う。

「元貴族とは言え、こうまで礼儀正しく頭下げるとは、たまげたもんだ。

よし、分かった。

明日から食事を用意してやろう。

アレス、お前さんは何が出来る？」

「薪割りが出来ます。

実は左手がこれなんで、厨房の手伝いや皿洗いは難しいんですよ」

俺は左手を見せる。

手首から先は綺麗にない。

「あ、アレスさん、その手……」

シエスタが口元を抑えて青い顔をしながら俺を見る。

「お、お前……」

マルトーさんも複雑そうな目で俺を見ていた。

「いや、十四、五の時にやはり没貴族の盗賊にやられたんですよ。かなりの手練れだったんで左手と引き替えに逃げるしか道がなかったんです。

もう、昔の話なんで」

「十四、五つて言ったらまだガキじゃねえか……」。

いや、お前さんは凄い肝っ玉をしてやがる。

元貴族とは言え、それだけの修羅場をくぐった奴はこの学院にはいねえだろ。

それはともかく、それじゃ薪割りを頼めるか？」

「分かりました！」

ありがとうございます」

深々と頭を下げると、マルトーさんがそんなに頭を下げなくて良いと言ってくれた。

ルイズのところに戻ると、彼女はすでに半分近く食べ終わっていたところだった。

俺が戻ってくると、自分の隣に座れとジェスチャーをしてくる。

「どうだったの？」

「明日から、向こうで食事をするよ」

ルイズの隣に座りながら俺は答える。

目の前に置かれた食事も朝に負けじ劣らずで豪勢だ。

「そう。悪かったわね、今回は」

「いいよ。人間が召還されるなんて思わないのが普通だから」

「それを調べ上げた人に言われても説得力がないの分かる？」

わたしなんて、素敵な使い魔が現れるって期待してたんだから、少しふて腐れるように言うルイズ。

だから、俺はルイズにしか聞こえないように小声でこういった。

「僕なら人間だから、君をどこまでも支えることが出来るよ。」

君さえ良ければ、君だけの騎士になってもいい」

最初は呆然と何を言っているのか理解していないようだったが、徐々に理解し始めると顔を真っ赤にした。

「な、な、何を言ってるの！」

馬鹿なこと言っていないでアレスも早く食事をしなさいよ！」

「僕は本気なのにな」

「ばっかじゃないの！」

あなたが貴族ならともかく、没貴族じゃ話にならないわ!」
もう、ご主人様をからかうなんて最低!」

そう言っただけの残りの食事を猛スピードで平らげていく。

しかし、顔は相変わらず真っ赤なままだ。

まあ、俺も少し調子に乗りすぎたなと心の中で反省しつつ昼食を取り始めた。

昼食が終わろうとした時だった。

「も、申し訳ありません!」

聞き覚えのある声が食堂に響き渡った。

その声の主を見るとシエスタが、ギーシュに何やら頭を下げていた。

「何の騒ぎなの?」

「言ってみようか」

俺とルイズは野次馬が集まりつつある場所へと向かう。

そこでは必死にシエスタが頭を下げて謝っている最中だった。

「何があったの?」

ルイズがそう言うのとギーシュがルイズの方を見る。

「おお、ゼロのルイズじゃないか」

「ゼロは余計よ」

「そうかい? まあ、いい。」

そうだね、この子のせいで二人の女性を傷つけてしまったんだ」

「二人?」

俺がそう尋ねると、ギーシュがこちらを向く。

シエスタはまるで縋るようにこちらを見ていた。

「そうさ。」

このメイドがモンモランシーの香水を僕が落としたと言うもんだからケティがモンモランシーと付き合っていると勘違いしてしまったのだよ。

そして、それを見ていたモンモランシーが僕が浮気をしてしまっ

ているとこれまた勘違いをしてしまったわけなのだよ。

そのせいで二人の女性が傷ついてしまったのさ」

得意げに話しをするギーシュだが、俺はその香水がギーシュが持っていたのだらうと推測する。

それにしても、今の説明は自分からモンモランシーと付き合っていたのにケティと浮気していたとはつきり言ったようなものなのだが…… 本人は気がついてるのだろうか？

「えっと、君の説明だとモンモランシーさんと言う女性と付き合っていて、ケティさんという女性とも付き合っていた。

そして、君がモンモランシーさんの香水を落としたと勘違いされたことからケティさんがモンモランシーさんと付き合っているのが分かってしまい彼女を傷つけてしまったと。

しかも、モンモランシーさんもその場に出くわしてしまったために浮気をしていると勘違いされたってことで良いのかな？」

「そう言うことだね」

ギーシュは自分で肯定してしまった。

今のを俺は突っ込むべきなのだろうか？

自分で浮気をしてましたと公言してしまったのと同じだぞと。

だが、それは俺が言う必要は無かった。

「何だ、やっぱりモンモランシーと付き合っていたんじゃないか！ それじゃギーシュがやっぱり浮気してたってことじゃなかよ！」

「うわ！ 最低だな、お前」

「本当、ギーシュって最低ね」

ルイズまで賛同して来る。

どうやらそこで自分がとんでもないことを言ってしまったことに気がついたらしく今度は俺に突っかかってきた。

「君！ 君のせいで余計におかしなことになったじゃないか！

どうしてくれるんだ！」

「いやいや、僕は君が言ったことを確認しただけだよ？」

「いいや、デタラメだ！」

「おいおい……、そりやないぞ？」

俺は確かにギーシュの言ったことを確認しただけだ。それなのに逆ギレされる筋合いはない。

「みんなも聞いていたと思うんだけど、どうだい？」

「ああ、確かに君の言うとおりだ」

「僕もそう聞こえたよ」

「あたしも」

「わたしも」

と言う具合に賛同者が次々と頷き合う。

こうなると今度はギーシュの立場が悪くなつて来る。

「こういう事だからシエスタ、君は謝る必要は無いよ。」

たぶん、その香水だってモンモランシーさんが彼にあげたもののはずだよ」

「え？ でも……」

シエスタは不安そうな顔で俺とギーシュを交互に見る。

「君！ 何を根拠に言うんだ！」

「なら、モンモランシーさんに聞いてみてもいいんじゃない？」

これはえつと……彼の名前は？」

俺がルイズにギーシュを指して言う。

「ギーシュよ。ギーシュ・ド・グラモン」

「ああ。あの有名なグラモン元帥のご息ね。」

で、ギーシュ氏がモンモランシーさんからもらった香水じゃないと言ひ張るんですが間違い有りませんか？ って聞いてみようよ」

「僕を疑う気か！」

この発言はさすがに頭に來たのか、僕につかみかかってくるギーシュ。

いや、ここは素直に認めてしまえば良いことだと思っただが。

「卑しい気持ちが無ければ出来るはずだよな？」

それとも……」

「おい、ギーシュ！ 見損なつたぞ！」

「最低だな、お前は！」

再び、周りから野次が飛び始めた。

だが、俺はこの時ギーシュを追い詰めすぎたと気がついた。
なぜなら、彼が俺を完全に睨み付けていて今にも杖を抜きそうな
雰囲気があったからだ。

「こんな屈辱は初めてだよ……。」

さつき、聞こえたんだが君は没貴族らしいね……。

つまり平民と大して変わらないと言うことだ」

「そうだね。」

加えて今はラ・ヴァリエール公爵の三女であるルイズの使い魔で
もあるよ？」

「だから、何だと言ったね？」

君が貴族じゃないなら話は早い。

決闘だ！」

杖を抜くと、俺に宣戦布告をする如く僕に杖を向けてきた。

「ちょ、ちよつと、ギーシュ！」

決闘は禁止されているはずよ！」

すかさず、ルイズが反論するがギーシュは止まらない。

いや、僕が貴族じゃないから余計か。

「それは貴族同士の場合のみだ。」

彼は没貴族らしいからね。

全く、主従そろって無能ぞろいだと困るね」

「だ、誰が無能ですって！」

「ルイズ、君のことだろ？」

魔法が使えないゼロのルイズって言われているじゃないか」

見下した視線をルイズに向ける。

ルイズは一瞬言葉を失い、次に反論しようとするが俺がそれを手で制す。

正直、ルイズがここまで言われる筋合いはない。

そして、俺もこれには頭が来ていた。

だから、俺はわざわざ俺に注意が向くように言った。

「無能は君じゃないのかい？」

自分の浮気も認められず、その責任を平民のせいにしようとした
ね？

ド・グラモンの名が泣いているんじゃないかい？

まあ、決闘なら受けて立とうじゃないか。

創造のアレスが相手をしよう」

「ふん！ いい度胸じゃないか！

ならば、青銅のギーシュが君を打ち砕こうぞ！

場所はヴェストリ広場だ！」

その宣言に周りが決闘だ！ と騒ぎ始める。

「アレス！ 何を勝手なことを言ってるの！」

「ごめん。君を無能言われして我慢できなかった。

これでも結構修羅場をくぐってきたから任せてよ」

俺はそういうがルイズは、不満な顔で俺を見るのであった。

第五話

決闘となり、周りが騒ぐ中シエスタが俺のところに駆け寄ってきた。

「アレスさん、申し訳ありません。」

わたしのせいでこんなことになってしまっ……」

例えるなら獅子に脅されたウサギのように縮こまりながら謝るシエスタ。

口元に右手を持ってきて不安そうに俺を見る姿は小動物である。そんなシエスタに苦笑しつつ、こう言った。

「気にしないでよ。」

それに、あの手の坊ちゃんには少しお灸を据えないとならないからね」

「お灸？」

「お仕置きだよ」

向こうのギーシュもいっつもモンモランシーを泣かせていた。

俺が彼女を慰めてあげた時があっただくらいだからな。

もつとも、手は出していない。

それはともかく、今回は少しギーシュに反省してもらわないとならない。

二人の女性を傷つける行為をしたのは自分だと言うことを。

「本当にすみません。」

今度何かお詫びをさせてください。

わたしに出来る事なら何でもします！」

何でもしますってか。

俺がろくでなしならきつと、その体でお詫びしてもらおうか？
と言っているところだ。

まあ、からかう分にはいいが。

「じゃあ、何か考えておくよ。」

さて、僕はこれから決闘だからシエスタはもう、戻りなよ」

「でも……」

わたしのせいで決闘になったのに自分だけ戻るなんて……」

自分だけのうのうと戻れないと言うことか。

だが、決闘なんて見ていて楽しいものじゃないだろう。

「なら、あなたも一緒に来ればいいわ」

俺とシエスタがルイズを見た。

腕を組みながらため息を付くようにルイズが言ったのである。

まあさっきの騒ぎ方だと、たぶん学院中の人間が来るし仕事にならないかも知れない。

「いいんでしょうか？」

「わたしが言いと言っているんだからいいのよ」

それからルイズはジト目で俺を見る。

「で、大丈夫なんでしょうね？」

「必要であればすぐにでも終わらせてもいいよ？」

ギーシュはドットの中でも優秀なのは知ってるけど、あの傲慢さが今の彼の欠点。

まともに戦略を立てられたらドットがスクウェアに勝つことも出来る以上、僕も油断は出来ないよ。

とは言え、少しは戦いを楽しまないと。

どちらにせよ負ける気はないけどね」

「まあ、いいわ。」

だったら、あなたの力を見せてもらいましょう」

ルイズはそう言って挑発的に僕を見る。

僕は任せてくださいと丁寧に言つと、俺達は広場の方へと向かうのだった。

ヴェストリ広場に着くと、ギーシュがすでに準備して待っていた。俺が来るのを見ると、面白く無さそうに言う。

「逃げなかっただけ褒めてやる」

「それはどうも」

やや馬鹿にしたように言うと、向こうがムキになって叫んだ。

「どうやら、僕を舐めているようだけど謝るなら今のうちだ！」

せいぜい痛い思いをしないようにするんだね！」

「おお、それは怖いことだよ」

大げさに手を上げて、怖がる仕草をすると向こうの我慢が限界に達したようだ。

「いい度胸だ！」

さあ、杖を取りたまえ！」

ギーシュが薔薇を模した杖を取り出す。

だが、俺は杖を取らなかった。

「どうした！」

さあ、早く杖を取るんだ！」

「ハンデだよ。」

僕に杖を抜かせてごらん？

僕はこれで十分さ」

腰に手をやると、俺はショートソードを手にとった。

朝錬金で作った、このショートソードは刃渡りが六十五センチで小太刀よりもやや長い程度の両刃の剣だ。

剣を手にとった瞬間、左腕のルーンが反応しているのが分かる。

体が一気に軽くなった。

剣を取った俺を見て周りからざわざわと声上がる。

メイジの癖に剣だぞ、とか。

本当はメイジって嘘なんじゃないのかとか。

やっぱりゼロのルイズの使い魔も魔法使えないんじゃないかとか。だ。

「メイジなのに、剣を使って僕を倒すだと？」

どこまでも僕を愚弄する気かね？

その選択が誤りだったことを教えてやる！」

ギーシュがそう言うのと、一気に七体のゴーレムを作り出した。

ギーシュの十八番、ワルキューレだ。

「行け、ワルキューレ！」

ギーシュが杖を振ると、七体のうち六体のワルキューレが一斉に襲い掛かってくる。

迫力が違う、決闘と言うだけあって殺気が感じられた。

最初の一体が槍で突進してきた。

「貰った！」

ギーシュの声と共に槍が俺の体を貫こうと迫って来る。

速度は速い。

通常の人間の三倍の速さで動いている。

だが、ガンダールヴの力を持った俺にはそれでも遅く感じられた。

「どうも、動体視力までよくなるらしいね」

呟きながらワルキューレが槍を持つ手と同じ側に避ける。

片足を軸にしながら回転する感じた。

すると、ワルキューレが俺の横を掠めるように通り過ぎる。

俺はその回転の力を使ってゴーレムの後ろを取り、そのまま剣を振り切った。

ガンダールヴの腕力は正直、異常である。

俺が剣を振り切ると、銅で出来た人形の胴体が真横に真っ二つに切れたのだ。

ある程度予想はしていたが、実際に斬ってみると妙な感じだった。銅であるのに、まるでバターを斬る程度の抵抗しか感じられなかったのである。

これで最初の一体は、そのまま地面に崩れ落ちることになる。

「馬鹿な！」

ギーシュの驚愕の声が上がった。

同時に、野次馬達の間からも剣でゴーレムを斬り伏せたと大騒ぎしている。

だが、戦いは始まったばかりだ。

ギーシュは素早く体制を立て直して、再びゴーレムを向かわせる。

最初は油断していたのだろう、次は二体のゴーレムが同時に攻撃してくる。

今度のゴーレムも槍での突進、今度は両サイドからの挟み撃ちだ。サイドからの攻撃なら、単純に前か後ろに避ければいい。このガンダールヴの脚力ならそのどちらも簡単に出来る。

「よし、獲った！」

二体のゴーレムが後数十センチまで迫って来る。

俺はギリギリまでゴーレムを引き付けると、一気にバックステップで後ろに下がった。

次の瞬間、金属音が大きく響き渡った。

二体のゴーレムが互いの槍で体を貫き合って戦闘不能になる。

「何！……やるじゃないか！」

ギーシュは悔しそうに顔を歪めながらも、相手を称える言葉を出してくる。

「君も、なかなかいいゴーレムを操るね。」

もっと冷静に頭を働かせれば僕を倒すことくらいわけないはずだよ。」

そうだ。ギーシュだつて決して弱いわけじゃない。

ドットとは言え土系統に特化しているメイジだ。

その甲斐もあって、これだけのゴーレムを七体同時の錬金が出るだけの力量を持つ。

だが、頭に血が上っている今の彼には宝の持ち腐れだ。

本来ならワルキューレ、一体一体の役割を完全に分けてやれば彼一人で二個から三個小隊分の力はあるだろう。

何せ、名門グラモン家の子息なんだ。

戦の才能は十分あるはず。

偵察、夜闇を使った奇襲戦、室内などの限定された場所なら彼の力はさらに倍増する。

いかにメイジと言えどゴーレムの速度にまともについて来れるものは居ないのだから。

「だから真正面からの戦いって言うのが、ギーシュの敗因になるんだ」

小さく呟きながらさらに追従して来る三体のゴーレムの攻撃を右に左にとかわして行く。

ここからは避けることに重点を置いた。

切り伏せてもいいが、ギーシュの攻撃が当たらないという事を教えるためだ。

避けながらギーシュを伺うと、もう俺を舐めた風には見ていない。必死にどう俺を倒すかを考えているようだった。

冷静になっただけあって、残りの三体は連携をしつつ攻撃を加えてくる。

こっちもさつきより回避に専念する必要が出てきた。

三体のゴーレムはサイドからと、正面からの攻撃や時間差を使った攻撃などバリエーションが増えてくる。

だが、それでも俺には攻撃が当たらない。

「くそ！」

攻撃の当たらないことにイラつき始めるギーシュ。

俺はもう限界なのだろうと感じて、三体のゴーレムを一気に片付ける。

一体目に向かって俺が駆け出すと後ろから二体が付いて来るのを確認。

俺はそのままゴーレムに突っ込むふりをして、急に速度を落すとバックステップを踏む。

すると二体のゴーレムが俺を通り過ぎ、そのうち一体目掛けて俺はジャンプすると剣をゴーレムの頭に突き刺した。

俺の体重と重力から剣は深々と刺さる。刺さった剣を軽く引き抜いて迫り来る残り二体のうち一体目掛けて今度は俺が突進。

ゴーレムの勢いを使いつつ、俺はゴーレムの横を風のようにすり抜けた。

その際、剣を一閃させ、再びゴーレムは真つ二つに切断される。

「つく！」

ギーシュの悔しそうな声が聞こえて来るが、俺は止まらない。残った一体を追撃し、俺は背後から何度も剣を走らせる。

一回、二回……五回だ。

次の瞬間、ゴーレムは首、両腕、両足が切断されてその場に崩れ落ちる。

これで向かってきた六体全て叩き伏せた。

「どうする？ もう最後の一体だよ？」

負けを認めるかい？」

俺がギーシュに向かって言うと、悔しそくに敗北を宣言する。

「ああ、ここまでされたら僕の負けさ。

だけど、一つ納得が行かないんだ。

君は杖を取っていない。

メイジであるにも関わらずにだ。

僕はもう勝てない。

どうせ負けるなら、君の最高の一撃で倒してくれないか」

ギーシュはもう勝てないことを悟ったようだ。

悔しそうなのは変わらないが、認めざるを得ないと言ったところである。

「最後の一体だが、僕も全身全霊で君に向かおう！」

ギーシュの叫びに、俺も剣を治めた。

すると体の軽さが一気に無くなる。

それと同時に、疲労感が一気に押し寄せてきた。

ガンダールヴ無しでさっきの動きは出来ない。

ガンダールヴの力だとは知らないとは言え、自らの負けを認めて、尚且つ最高の一撃だ倒せと言うのだ。

そこまで貴族らしいことをする相手への礼儀はやはり全力で応えることである。

ずっと使わなかった杖を取り出すと、俺は構えた。

「アレス・ジルアス・ド・ヴァルガード。

最高の力を持って相手する」

「ギーシュ・ド・グラモン。

その好意に感謝する」

ギーシュも杖を構えなおした。

「誰か、合図を」

俺がそう言うと、一人の生徒が走り寄ってくる。

もう野次馬達も黙って俺達を見ていた。

妙な緊張感が走る。

わずかの間、静寂が流れて生徒が手を上げた。

「始め！」

生徒の合図と共に、ゴーレムが一気に突進してくる。

今度はガンダールヴの能力無しだ。

生身であれを避けるのは厳しい。

だから、俺は魔法を唱える。

「ライトネス」

身を軽くする魔法だ。

ガンダールヴ程ではないにしても、ゴーレムの一撃を避けるには

十分。

突進してくるゴーレムを見つつ、再び詠唱を開始する。

唱える呪文はトライアングルクラス。

風二つに水を加えた強力な魔法だ。

少し長めの詠唱はゴーレムの襲撃前にはやはり間に合わない。

突進してきたゴーレムに対して、俺は最初と同じく槍を持つ方に

避けると今度はバックステップで距離を取る。

それと同時に詠唱も完成する。

杖を後ろ向きのゴーレムに向けて、魔法を放った。

「ウィンディ・アイシクル！」

氷の矢が瞬時で生まれると、一気にゴーレムを貫いた。

ゴーレムはバランスを崩して大地に崩れ落ちた。

氷の矢もいくつか地面に突き刺さっていた。

戦闘不能になったゴーレムから視線をギーシュの方に移す。

「これが僕の使える最高の魔法だよ」

そついうと彼はすつきりとした顔で言った。

「まさかトライアングルクラスのメイジだったとはね。

僕の方こそ、君を見誤ったようだよ。

完敗さ」

ギーシュは杖を落す。

それは自分が負けたと言う合図だった。

「ゼロのルイズの使い魔が勝ったぞ！」

「しかも、トライアングルクラスの魔法を使ったぜ！」

「いやいや、その前に剣だけでも六体倒したぞ！」

野次馬達が一斉に騒ぎ出す。

歓声も交じり合つて、ギーシュを称える言葉も聞こえてきた。

俺はギーシュに歩み寄ると手を差し出す。

「何だね？」

「良い戦いだつたからね。

君と友人になりたいと思つてさ。

それに君だつて、あの二人を泣かしたのは自分のせいだと最初から分かつてたんでしょ？」

「参ったね。

そつさ。

ただ引つ込みが付かなくなったからね。君に決闘を申し込んだのさ。

でも、僕が馬鹿だつた」

そつ言うつとギーシュは俺の手を握ってくる。

「状況がもう少し違えば君が勝てたかもね」

「謙遜は美德じゃないな。

君は明らかに強かつたよ」

「そつかい？」

さて、あとで君の言っていた二人と、あのメイドに謝ってくれな

いか？」

「それは良いが、許してくれるかね？」

「誠実に謝ってみることだね」

こうして、俺とギーシュの決闘は終わるのだった。

決闘が終わり、俺はルイズとシエスタの下に戻る。

二人とも呆然として俺を見ていた。

「二人ともどうしたのさ？」

俺が声をかけると、最初に気を取り戻したのはシエスタだった。

「す、凄いです！」

魔法も凄かったです、剣だけで貴族様の作ったゴーレムに勝つてしまうなんて凄すぎます！」

興奮した口調でシエスタが俺の手を握って言う。

「剣もそれなりに得意なんだ。

魔法が使えないメイジは平民と何にも変わらないよ」

「確かにそうですね、凄すぎました！」

興奮冷めやまぬといった感じでずっと凄い凄いを連呼するシエスタ。

「アレス、あなたトライアングルクラスだったのね……」

驚いたと言う風に口を開く。

まあ、俺は今まで魔法が使えること以上の事は話してなかったのだ。

驚いて当然である。

「そうだよ。

使い魔を見れば、そのメイジの力量が分かる。

ルイズ、君は僕以上の力を持っている証拠さ」

「あなたの話を聞いていなかったらただの嫌味ね。

まあ、でもあなたの強さは分かったわ。

まさかあんなに強いだなんて思わなかった……」

「心配してた？」

「少しね」

赤い顔をしながらそっぽを向くルイズ。

素直じゃないけど、可愛い態度だ。

「さて、いい加減戻ろうか。」

何か野次馬のみんなが押し寄せてこようとする雰囲気を感じるからね」

「そうしましょうか」

「はい！」

俺達は周りからもみくちゃにされる前に広場を去るのだった。

第五話（後書き）

2010/8/29

調べたところジャベリンがラインクラスの魔法と言ったのが判明したので、ウィンディ・アイシクルに変更。

第六話

陽が傾き、空を茜色に染める。

燃えるような夕日は、情熱にも通じるところがあるかも知れない。俺の目の前にいる、少女もまた情熱を持つ一人だろう。

少女の桃色の髪が、夕日で赤く染まりそれがまた綺麗に見えた。努力する姿そのものも、また絵になる。

ルイズが杖を振り上げて、息を吸い込むと手を振り下ろした。

「バースト！」

俺が教えたイメージしやすいコモンスペルを唱えて対象物に魔法をかける。

瞬間、爆音と共に空気が揺れる。

爆風が木々を揺らす。

すでに鳥達は避難を済ませていて、木々から逃げ出す動物はいなかった。

魔力制御の訓練開始から三日目。

「うーん。思い切りは良いんだけどね。

もっとも力を弱めるイメージをしないと。

コモンスペルはイメージこそが大事だよ」

「分かってるわよ！ これでも頑張ってるんだから！」

「頑張っているのは分かるんだけどさ」

「だったら黙ってなさいよ！」

ルイズが腰に手を当てて、杖を俺に向けながら言う。

錬金で作った岩に対して、バーストを使って割る訓練をしている。だが、どうにも威力が強すぎて岩は一発で木っ端微塵だった。

それでも最初に比べれば良くなつては来ている。

「もう一度やるわ！ アレス、お願い」

「分かったよ」

俺は錬金で岩を作り出してやる。

ルイズは一度深呼吸をして杖を構えた。

「いい？ あの岩を割る程度の力を想像するんだ。

大丈夫、君なら出来るよ」

君なら出来ると言う言葉に、ルイズはハツとするような表情をし、
てすぐに不機嫌そうに言う。

「ふん、いい加減なことは言わないでよ」

嬉しかったんだろう。

ゼロのルイズと言われ、魔法が失敗するとばかり言われていたんだ。

たえお世辞でも言われると嬉しいのだろう。

同時に、いい加減な慰めは要らないと言うわけだ。

ルイズは目を閉じて精神を集中させる。

杖を振り上げると、今度は自然に杖を振り下ろした。

「バースト！」

威力はやはり大きいものの先程よりも砕ける岩が大きくなって来ている。

「あーあ。また失敗ね」

「そうでもないよ」

落胆するルイズに俺はさっき砕けた岩と、今回砕けた岩を手にと
ってルイズに見せた。

さっき砕けた岩はほとんど小指くらいに砕け散っていたが、今回
は子供が拳を握ったくらいの大きさになっている。

「これが何なの？」

俺の手に載せられている砕けた岩を見ても分からないのか首を傾
げて言う。

「こっちの小さいのがさっき砕いた岩の破片。で、この大きいのが
今の岩の破片だよ。

何か分からない？」

「……。今回の方が大きい？」

「そう。正解。

つまりどういうことか分かる？」

俺が質問すると、今度は俺の手にあった石を二つ持って交互に見比べた。

何かに気が付いたのか、小さく声を上げる。

「力の制御が出来るようになったってこと？」

「良く出来ました」

「ふ、ふん！ そのくらいわたしにだって分かるわよ！」

俺の言い方が子供を相手にするような言い方だったのが気に食わなかったらしい。

そっぽを向いてむくれてしまった。

とは言え、確かに力の制御が出来てきたのだ。

実は最初、バーストを使ったら文字通り木っ端微塵だった。砕かれた岩は砂と化していたくらいである。

つまり徐々には言えコツが分かってきたわけである。

「これはいい傾向だよ。」

この調子で行けば、魔力の制御も近いうち出来る。

そうなれば、コモンスperlくらい制御出来るようになるんじゃないかな？」

「それはホント！」

俺の言葉に、縋るような目で見てくるルイズ。

コモンスperlさえまともに使えないルイズにとって、それは一筋の光。希望なのだ。

「保障はしてあげられないけど、可能性としては十分あるよ」

「希望があるならいいわ。さあ、続きをするわよ！」

気合いの乗ったルイズに俺は再び岩を錬金するのだった。

本日の訓練が終わって、俺達は部屋に戻った。

さすがに疲れたらしくマントを外すとベッドの上に倒れこんだ。

「疲れたあー」

「お疲れ様。まあ、でも三日目にしていれば制御が出来るようになる

ったね」

「ふふん、わたしの手に掛ければあのくらいどうってことないわ
少し体を起こすと俺の方を向いて言う。

褒めるとこの調子だが、余程嬉しいのだろう。

上機嫌である。

訓練開始初日、二日と徐々に力を抑えられるようになって今日最後の訓練ではとうとう手のひらサイズの破片になるくらい力を抑えられてきていた。

あと一週間もすれば岩を真つ二つにするくらい分けないだろう。

「あ、そうそう。ルイズに頼みがあるんだけどいいかな？」

「頼み？」

ベッドの上で身を起こすと俺の方を向く。

「紙とペンが欲しいんだ」

「紙とペン？ そんなの何に使うのよ？」

頭を傾げるルイズ。

まあ、使い魔の俺に貴族としての雑務があるわけでもないからな。

「僕は研究が趣味でね。」

新魔法の開発とかもしてたんだ。

で、研究するにはメモを取りたいわけなんだ」

「新魔法の開発って、アレスあなたアカデミーの人間だったの！」

新魔法の開発は主にアカデミーが行っている。

趣味で研究をするとなれば、大抵は秘薬の方だ。

魔法の研究はあまり個人ではやるものではない。

「いやいや、僕は普通のメイジだよ。」

エレオノール姉さんからはしょっちゅう誘われてたけどね」

「エレオノール姉さん？ エレオノール姉さまとあなたってどういう関係だったのよ？」

「虚無についての研究レポートを見せて評価してもらった感じがかな？
向こうのルイズと仲が良かったのもあって、姉さんと呼ぶように強制させられたよ」

頬を掻きながら答える。

本当はルイズと婚約しているのが原因だけど、あまり刺激を与えてもよくないだろう。

そう言えばアルビオンに発つ前に、姉さんとは転送魔法の意見を言っただったな。

俺が居なくてもサイトは帰れるといいんだが。

「あのエレオノール姉さまと、そういう間柄だったなんて……」

畏怖とも尊敬とも言える何とも微妙な敬意が俺に向けられた。

もしかしたら同類的な見方をされたのかも？

「まあ、いいわ。両方とも今度の休みに買いに行きましょう」

「助かるよ」

「あなたには魔法のことでお世話になってるし、ちょっとしたご褒美よ」

「ご褒美と来たか。」

まあ、だいぶ棘がなくなつては来ているけど使い魔扱いだな。

「それじゃ、今度の休みはよろしくね」

「わかったわよ」

ルイズは適当に手を振ると疲れからか再びベッドに倒れ込み、そのまま寝てしまった。

俺は何となく夜風に当たりたくなり、眠ったルイズに上掛けをかけてやると廊下に出た。

地球で言うならまだ八時か九時くらいである。

精神力を使いまくったルイズはさすがに寝るだろうが、俺はそれ程付かれていない。

廊下を歩いていると、キュルケの使い魔フレイムが何故か俺の後を追ってきていた。

「どうしたんだい？」

俺が尋ねるとフレイムは近づいてくるなり、俺の服を咥えて引っ張ってくる。

仕草からして着いて来いと言いたいらしい。

「着いて行けばいいのかな？」

フレ임が頷く。

「分かったから服を啜えるのやめてもらえるかな？」

俺が知っているキュルケは確か、いろいろと気に入った男子を部屋に誘っていた。

となれば、俺も同じ様な対象になったのだろう。

向こうのキュルケにも散々誘惑されたからな。

今回はルイズと婚約しているわけでもない。

少し付き合うのもまた面白いかもしれないな。

などと考えているといつの間にかキュルケの部屋の前まで来た。

予め少し扉が開いていて、フレ임が中に入っていく。

俺も習って中に入ると、部屋は月明かりのみで薄暗い。

「ドアを閉めてくれる？」

俺は言葉どおりドアを閉めると言葉の主に目を向ける。

ベッドの上に腰掛けてベビードールと言う悩ましい姿でキュルケは俺を見ていた。

肩紐をわざとなのか片方だけ垂れ下げている。そのせいで片方だけ胸が半分しか隠し切れていない。

下は下着が見えるか見えないかくらいの微妙なところでベビードールが捲られていた。

男心を驚つかみするような格好である。

普通の男ならまず飛び掛るだろう。

「あなたはしたないと思うでしょうけど、あたしあなたに恋してしまっただの」

甘い囁くような声。

少し種類が違う熱に浮かされた感じだ。

キュルケ特有の色仕掛けでもある。

「僕は恋されるようなことしてないけど？」

「この間の決闘。とても素敵だったわ。」

ねえ、そんなところに立っていないでこちらに来て？」

やれやれと思いつながら俺は彼女の隣に座る。

するとキュルケは俺の体に寄りかかってきた。

胸を俺の腕に押し付ける。

女性特有の柔らかさと反比例するような弾力が絶妙なバランスを保ち、俺の理性を壊そうとする。

微熱の二つ名の通り、わずかに熱いと感じる体温。

ルイズとは違う、攻撃的でいて嫌味にならない香水の香りが俺の鼻をくすぐった。

「趣味がいい香水だね。」

男を誘惑するには持って来いだ」

「あら、わかるの？」

意外そうな顔で俺を見てくる。

ほとんどの男子が香水の香りまで特別言ってこなかったのだろうか？

「まあ、少しはね」

実際は俺も向こうで何度となくキュルケに誘惑されたから慣れ覚えた香りだ。

「ふふふ、今までの男と違って余裕があるわね。」

ますます好きになっちゃう」

キュルケの手が俺の胸板辺りを触る。

「遅い体。この体に抱きしめられたらうって思うとあたしは堪らない」

潤ませた瞳で瞳を覗き込んでくる。

あたしを抱いて。目がそう訴えていた。

だが、俺はキュルケを抱く気はない。

「気持ち分かるけど、そういうつもりはないから」

「連れない人ね。ルイズなんかより、あたしの方が何倍も魅力的よ？」

「魅力は人それぞれさ。」

君の魅力も十分感じてる。でもね、その魅力を安売りするようじやまだ僕をなびかせないよ？」

俺の言葉に、一瞬睨みつけらるがすぐにそれなくなる。

余裕なのだろう。

再び熱い視線で俺を見てくる。

「キュルケ！ いつまでも君が来ないと思って来てみれば、どうしてそいつと居るんだ！」

突如窓から男子生徒の一人が俺を睨みつけて言うてくる。

顔立ちは美形だ。完全に女性に受ける顔立ちである。

そしてその表情は明らかに嫉妬に浮んでいた。

「ペリッソン！ あと二時間後！」

「話が違うぞ！」

ペリッソンと言われた男子はキュルケの部屋の中に入ろうとする。

キュルケは胸から杖を出すと、短く呪文を唱えた。

小さいファイアーボール。

ペリッソンは炎と共に部屋から逃げて行った。

「やり過ぎだと思っただけど？」

「いいのよ。あなたといたいから……」

俺に寄りかかろうとしてまた妨害が入る。

「キュルケ！ そいつは誰だ！ 今夜は僕と約束が……」

最後まで言い切れず今度の男子生徒もファイアーボールによって逃げ帰る。

「キュルケ！」

間髪言わずにまた一人。

その後、もう四人程男子生徒が尋ねてきてはファイアーボールで撃墜していった。

「よ、ようやく落ち着けるわね」

「あのね……。ちよっと迂闊だよ？」

僕を招き入れるなどとは言わないけど、せめて他の男との約束がない日にしてもらわないと」

「ごめんなさい。

だって、あたし思い立ったら行動しないと気がすまないの」

「君は悪い子だね。

そんな悪い子にはお仕置きが必要だよ？」

俺がニヤリと笑う。

キュルケは待つていたとばかりに俺に身を預けるのだった。

その後、どんなお仕置きをしたか？

詳しいことは俺の口からは話せないが、まあ焦らしまくってあげた訳だ。

キュルケは決して満足出来ず、何度と無くその一步手前でお預けを食らって相当に辛かっただろうな。

萎れたキュルケが何とも言えない妖艶さと可愛らしさを現していたとだけ言っておこう。

キュルケの部屋を出ると、もう夜風に当たる気も失せていた。

向こうの誘いがあつたから遠慮なく出来うる限りの手を尽くした焦らしは、俺も十分に疲れさせていた。

だが、このまま帰るわけには行かない。

キュルケの匂いが存分に付いた服を纏って返ればルイズに明日の朝何といわれるか分からない。

向こうのルイズも十分に嫉妬していたのだ。

こっちのルイズだって、思いから来る嫉妬こそ無いものの女性としての嫉妬が向けられるに違いない。

しかも、こっちのルイズは気性が激しい。

鞭辺りで叩かれてもおかしくないのだ。

だから、俺は平民用のサウナで汗を流して体と服を洗ってから戻ることにした。

だが、それでも女の勘は鋭くて結局キュルケの部屋に行っていたことがバレてしまうのだが。

第六話（後書き）

まずは、更新お待たせしました。

本編（死の先に待っていた新たな世界）の方が進まず、こちらを先に。

それとキュルケとのシーンですが、すみません。

ちよつと趣味が入ってしまいました。

キュルケは責めるのは好きですが、責められるほうはどうなのだろうと思いが先行してしまつて。

年齢指定がR15なので、あれ以上の表現は差し控えましたが大丈夫でしょうか？

問題あるようなら表現を削ろうと思っています。

こつちのアレスはルイズと婚約していないのもあつて少し女つたらしですね。

これからも女性にちよつとだらしないアレスが出てくるかも？知れません。

それではこの辺で。

第七話

翌日の朝。

俺はルイズの嗅覚と言うか、女の勘の鋭さに感服することになった。

珍しく俺が起こす前にルイズが起きた。

早朝散歩して、シエスタとおしゃべりし戻ってくるとベッドの上でちょこんと座りながら不機嫌そうに目を擦っていたのである。

戻って来た俺を確認すると、ルイズはいきなり睨みつけて来た。

「あんだ。昨日、キュルケの部屋に行ったでしょ？」

第一声がこれである。

おはようとかじゃない。

いきなりキュルケの部屋に行ったと尋ねてくるのだ。

ルイズの勘に驚きつつも、俺は平然に尋ね返す。

「どうして、そう思うんだい？」

「キュルケの臭いが部屋中にするからよ。」

特にあんたに関するものからね。その藁の寝床とか」

ルイズ、君の嗅覚は犬並？

さすがに風呂で汗を流して、服を洗ってもわかる人間にはわかるのか。

こうやって男の浮気ってバレて行くんだろうな。

俺はごまかしたりしても無駄なのがわかるため正直に答えることにする。

「ルイズ、君はとても凄いね。」

白状すれば彼女の使い魔に連れて行かれたんだ」

「そう……。で、何をしたの？」

「おいたが過ぎたから、彼女へのお仕置きをただけだよ」

キュルケがそっち系に目覚めたらある意味ご褒美になるのか。

「ふーん。あんたのお仕置きって、女特有の匂いを纏わり付かせるようなことするのね？」

特有な匂いって……。

そこまで纏わり付いていたか？

それにしても。

黒いオーラと言っべきなのだろう。

今の彼女に近寄るのは非常に危険な気がしてならない。

「そんな最低なあんたはわたしがお仕置きしてやるわよ！」

どこから取り出したのか、いきなり乗馬用の鞭を振るってきた。

冗談じゃない。

あんな凶悪なもので殴られたら歯が数本いつてしまう。

条件反射で後ろに飛びのくと、俺がいた場所に鞭が空を切る。

一瞬、空間さえも切り取るんじゃないかと思った。

「ルイズ、それは危険すぎる！」

さすがにこれはやり過ぎだと俺が抗議するがルイズは鞭を振り上げて来た。

「うるさい！ あんたがキュルケの部屋に行くのが悪いのよ！

だいたい、何で寝ているわたしじゃなくてキュルケなの！」

ルイズは怒り任せに鞭を振り下ろし、俺は横に避けてそれをやり過す。

しかし、怒り任せにとんでもない事を口走ったのに気が付いていないのだろうか。

「ルイズ、キュルケじゃなくて君のベッドの潜り込んだ方が良かったのかな？」

「へ？」

俺がそれを指摘すると、ピタリと動きが止まる。

次に顔が徐々に赤くなっていき、ついには再び怒り出した。

「そ、そ、そんなことあるわけ無いじゃないの！ このバカ犬！」

再び鞭を振り上げるルイズに、俺は苦笑しながら鞭を持つ手を封じる。

右手で掴み上げると、ルイズがはっとして俺を見た。

「こ、こら！ 離なさいよ！」

「暴力はやっぱ駄目だよ？ それに求めてほしいならそう言わないと」

片手で動きを封じるのは正直、きついが俺はそのままルイズをベツドに押し倒した。

ルイズが顔を真っ赤にして体を硬直させる。

「は、は、は、離れなさい！」

「ご命令に従えません。」

さて、何をしてほしいのかな？ ルイズ？

「べべべ、別にあんたに何かをしてほしいわけじゃないわ！」

まあ、大方自分に見向きもせずにキュルケに出したのが許せないだけだろう。

ルイズだって寝込みを襲われたいわけじゃないのは俺も分かる。

要は自分に魅力なしと思われたことと、よりにもよってキュルケに手を出したのが癪なのだ。

だったら、ルイズにも魅力があることを教えてあげればいい。

キュルケよりもと。

「ルイズ、君は可愛いんだ。」

鞭を振り上げたり、変に意地を張らなければルイズほど可愛い女の子はいないんだよ？

僕としてはキュルケよりもルイズの方が魅力的だ」

いろんな意味でいろんな属性があるしね。

「な！」

こうボン！と音を立てそうなほど顔を赤くするルイズ。

しかも俺とルイズの顔は拳ひとつ分くらいしかない。

「ルイズに手を出さなかったのは自分の主人だから。」

寝ている主人に手を出すのはイケナイ使い魔だと思わない？」

本当は単にそんなつもりが無かったただけなんだけど。

気持ちよく寝ていたし、単に散歩程度で部屋から出ただけ。

キュルケに手を出してしまったのもどちらかといえば気まぐれだ。
「そ、それはそうね……。」

でも、キュルケに手を出したのは許せない！」

「それは謝るよ。」

でも、さっきも言ったけど本当はルイズの方がいいんだよ？

だから、ちよつと目を瞑ってくれないかな？」

「な、何をするつもり！」

「いいからいいから」

顔を真つ赤にするルイズに俺は顔を近づける。

さっきまでの勢いはどこへやら。抵抗らしい抵抗がなくなきつく目を瞑るルイズ。

まるで観念したと言う様な状態だ。

そんなルイズに苦笑しつつ、俺はルイズにキスをする。

ゆつくりと唇を離すと、ルイズは何と言ったらしいのか分からない顔をしていた。

「なんで、よ……。」

「何がだい？」

「なんで、おでこなのよ……。」

真つ赤な顔をしながらキスされたおでこに手を当てるルイズ。

何かを期待していたのは分かるだけにおでこは思わなかっただろう。

別に彼女をからかったわけではない。少しはあるけど、親愛の証だ。

「ルイズへの親愛の証だよ。」

君はまるで妹のように可愛いから」

それから少しの間、ルイズが実に面白いほどしおらしくなるのだった。

まあ、すぐ元に戻るわけだが。

数日後、俺はルイズと共にトリスタニアへと来ていた。

虚無の曜日に朝から馬を借りてこうして街へと来ていたのである。
トリステイン最大の街だが、もう少し道を整備したいところだ。

「インクとペンに紙だったわね」

「そうだよ」

ここに来た目的は俺の服と紙とインク、ペンだ。

服は着替えが無いから。

さすがに魔法で洗濯乾燥が出来るとはいえ、ずっと同じものを着続けるわけにも行かない。

あとは魔法の開発にはメモが必要だから筆記用具は揃えたいのだ。
「確か、この道歩いていれば雑貨屋があったはずよ」

メインストリートを歩きながらルイズが言う。

そう言えば俺は何だかんだ言いながら王都を昼間に歩くことが少なかったな。

どうも、呼び出されて夜に到着ということが多かった。

買い物自体も自分でやらなかったしな。

「ルイズはここには良く来るのかい？」

「そうね。」

だいたい月に二回くらいよ。

気晴らしに来るくらいだけ。

あんたはどうなのよ？」

「僕かい？」

向こうにいた時はだいたい王宮の呼び出しで来たくらいだったし、
買い物自体はする必要もないからほとんど。

まあ、十五歳から十八歳までずっと將軍として軍備を整えていた
から」

今思うと、青春もあったもんじゃないな。

ルイズがいなかったら随分さびしい人生を歩むことになっていそ
うだ。

「あんたって、ホント妙なことに関わる人ね。」

軍関係者ってところが特に」

呆れたように言う。

実際、呆れられても仕方ないか。

俺の歳で軍を取り仕切る地位にいる人間はそうはいないだろうか
らな。

せいぜい戦時下なら小隊長くらいか？

とは言え、俺も軍事だけやっていたわけじゃない。

「でも、向こうのルイズとは良く湖や山に行ったよ。」

二人つきりで、ね」

「な！」

二人つきりと言うところを強調すると、自分のことでもないのに
顔を真っ赤にする。

可愛いじゃないか。

「そ、その、向こうのわ、わたしとはどんな関係だったのよ？」

「知りたい？」

「べ、別に！ でも、ちょっとは気になるわね……」

声がだんだんと小さくなっていく。

知りたいけど知りたくないという感じが……。

ここはどうするか？

からかいモードで行くかな？

「肌を合わせる関係かな？」

「！」

声すら出ない程、驚いている。

口がパクパクと動いているが、言葉になってない。

「大丈夫かい？」

「なななな、何でそんな関係になってるのよ！」

婚約していることは伏せているから驚くのも当然か。

「どうしてか、教えてあげようか？」

「言いなさい！」

顔が真っ赤になっている。

恥かしさというよりは照れか。

向こうのルイズとはまた違ういい反応だ。からかい甲斐があるな。さて、どういう関係かを明かしてみるとしますか。

「婚約者だよ」

「婚約者あ！　だって、わたしの婚約者は！」

「ワルド子爵でしょ？　向こうもそうだったんだけど……」。

ほら、ワルド子爵の場合はお酒の席だったから非公式だったわけ
で。

僕がルイズの面倒見て、ルイズの魔法が使えない原因を突き止めた上にコモンスペルまで使えるようにしちゃったからさ。君のお気に入りになっちゃったわけ」

ただの知り合いなら少なくとも俺になびくことは無かっただろう。
「むっ」

反論しようと思ったようだが口を閉ざすルイズ。

開き直るとため息を付くように言った。

「まあ、いいわ。」

でも、向こうのわたしはこんなのと婚約しようと思ったなんて。
どうかしてるわね」

手を挙げてやれやれと首を振る。

そこまで言われる筋合いはないんだけどな。

「何、そのうち君も僕無しじゃ生きれないようにしてあげるよ」

「うげ。勘弁してほしいわ」

口に手を当てて拒否を示す。

向こうじゃ、こんな反応を見れなかっただけにこれはこれで面白いな。

「おでこでときめいたのは誰だったっけ？」

「うるさい！　それは言うな！」

あの日のことを指摘すると真っ赤になるルイズ。

すでに満更じゃなくなってるんだけど本人に自覚無しつと。
そっこうしているうちに雑貨屋までやって来たのだった。

雑貨屋で用事を済ませて、俺の服を二、三着仕立てるとだいたいの事が終わった。

「もうこれで用事は全部終了ね。」

他にどこか行く？」

他にか。

行くとするなら一つか。

「あ、剣を見に行きたいんだけどいいかな？」

「剣を？ あんた剣を持つてるじゃない」

不思議そうにルイズは言う。

「あれは錬金で作ったからね。不純物が多いし強度も決して高くないんだ」

「でも、あんたトライアングルじゃない。

だったら十分強度が高いんじゃないの？」

トライアングルの錬金は確かに錬度が高いのだが。

「得意じゃないんだ。土系統の魔法は」

そもそも錬金自体は得意ってわけじゃない。

ゴーレムとかも付属機能は付けられても強度は高くない。

トライアングルだったからこそ力技で何とかそれなりの強度に出ただけだ。

ギーシュの錬金ならワルキューレを見ても分かるが非常に錬度が高い。

あれでドットなんだから恐れ入る。

「意外ね。まるで何でも出来るようなのに」

「誰にでも欠点ってあるでしょ？」

「そうね。わたしなんて……」

ゼロのルイズだもんな。

欠点と言う点で言えばルイズは致命的とも言える欠点がある。もつとも。

「伝説の系統だって忘れたのかい？」

「まともに使えないんじゃ、自分の系統を知っても意味ないじゃ

ない」

虚無の系統と分かっていても使えないんじゃないか。
ルイズの気持ちも良く分かる。

「とは言え、訓練の成果もだいぶ出てきてるじゃないか」

「あれくらい、当然よ！」

わたしに不可能なんてないんだから！」

さっきと違ってこっちは自信满满だな。

全く、不可能がないって言うんだったら使えない系統も使いこなしてやる！　くらいに開き直ればいいのにさ。

「だったら、虚無の系統が使えないことなんて気にしないようにね」
俺はルイズの頭に手を載せると子供のように撫でる。

ルイズの髪の毛は相変わらず手入れが行き届いてさらさらしてるな。

「こ、子供扱いするな！」

「おっと、危ないよ？」

器用に回転蹴りをかまして来るが俺はいつものように横に避ける。
行き交う人たちが何事かと振り向いているが、ルイズはお構い無しだ。

「避けるな！」

「避けるに決まっているって。

危ないからね。

それよりスカート履いて蹴りはやめないと。

中が見えるからダメじゃないか」

俺がそういうとルイズは一気に顔を赤くする。

まるで瞬間湯沸かし器だ。

「ここ、このお、バカあ！」

ルイズの叫び声がトリスタニア中に響き渡るのだった。

その後疲れ切ったルイズの手を引きながら武器屋へとやって来た。
「早く買い物終わらせなさいよ」

「分かった。ちょっとだけ待っててな」

疲れたルイズは入り口に残して俺は武器屋の中へと入る。

「いらつしゃい！ 旦那、剣をお探しで？」

太った壮年の店主が出迎えた。

店内は武器屋だけあって壁にいくつもの剣が掛けられている。

見た目がいいのが大半だが。

「ええ。ちよつと店内を見させてもらいます」

「旦那、貴族じゃないんですかい？」

俺のマントを見て首を傾げて言う。

まあ確かに貴族が武器を買いに来ることは珍しいだろう。

「店主、僕は落ち貴族ですよ。」

まあ、メイジではありませんが魔法を封じられてたメイジほど無能な者はいませんよ」

「武器の価値の分かるメイジですな、旦那は。」

そんな旦那に一押しがありやすぜ」

「どんな剣ですか？」

「へえ、ちよいとお待ちを」

店主は得意気に言うのと店の奥へと行く。

一体どんな剣を出してくるんだろうか。

「お待たせしやした。この剣なんてどうでやす？」

店主が持ってきた剣はなんと装飾が施された立派な剣だ。ただし見た目だけだが。

「……店主、それは装飾用の剣では？」

「いえいえ。これは高名なゲルマニアの貴族シュペー卿の魔法が掛かった剣でやす。」

鉄をも一刀両断が謳い文句でありやすぜ？」

「貴族の魔法が掛かった剣ですか？」

「ちよつといいですか？」

俺は剣を持つてみる。

装飾用だが一応武器だ。ガンダールヴのルーンが反応すると情報

が入ってくる。

……高名なゲルマニアの貴族ね。

魔法なんて掛かっちゃいない。

一応、ディテクトマジックを掛けてみるが全く反応無しだ。

「店主、これはどこで仕入れたんですか？」

「ゲルマニアの商人でありやすが」

「店主、騙されてますね。」

これは鉄どころか銅すら切り裂けないですよ。

魔法も全く掛かってないですね」

俺がそう指摘すると店主は真っ青になっていく。

「これをいくらで売るつもりでしたか？」

「エキュー金貨で二千、新金貨なら三千でやしたが……」

非常に残念だが、これは剣としては役立たずだ。

装飾用なら何とか使えるが、それも口を上手く言わないとダメだろう。

「もし売るなら貴族にこう言って売ったほうがいいですね。」

ゲルマニアの宝石商が目利きした最高級の宝石で作り上げた装飾用の逸品だと。

剣として売るなら価値はないですが、装飾用ならいいでしょう。

使ってる宝石や貴金属から見ても、装飾用ならエキューで千くらいなら見込めますよ」

「そ、そうでありやすか……」

がつくりと肩を落とす店主。

さすがに気の毒だが、まあ言っただけの方が店主の為だ。

「全く、情けねえな。剣の目利きで客に負けるなんぞ。」

何年武器屋やってんだ」

突然、俺の後ろから声が聞こえてきた。

振り返ると誰も居ない。だけど確かに。

「うるせえぞ、デル公！」

「なんでえ、八つ当たりか！」

声が見ると、いわゆる籠売りのようなエリアから声が聞こえるじゃないか。

声がする何かと店主が口論している中、俺が声がるものに近づくに驚いた。

「インテリジェンス・ソード？」

「おう！ 兄ちゃん、俺様はデルフリンガー様よ！」

「こら！ デル公！ お客様になんて口を利きやがるんだ！」

デルフリンガーだって？

初代ガンダールヴの剣じゃないのか？

「デルフリンガーって言ったね、君」

「おう、そうさ」

「ちよつと、ごめんよ」

俺はそういうとデルフリンガーを掴む。

するとどうしたことが、必要最低限の情報しか入ってこない。

「おでれえた。てめえ使い手か？」

「使い手ってことはやっぱり君は初代のか」

「俺のことは知ってるのか？」

知ってるも何も、ルイズの虚無を調べているとぶつかるからな。

デルフリンガー、初代ガンダールヴが使用したと言う伝説の名剣。

「もちろんさ。店主、この剣を貰えますか？」

「こ、このデル公ですかい？」

「ええ、いくらで？」

「デル公ならエキユー金貨で八十でいいでさ」

「安いですね。それじゃ」

腰についた金袋から俺はエキユー金貨を百枚出す。

ちなみこのお金は一応、向こうの世界のエキユー金貨だ。

ちよつとばかり反則だがお金には変わらない。

「ちよ、ちよつと旦那！」

「二十枚はおまけで。良い剣が手に入ったのでそのお礼です」

「は、はあ？」

店主は厄介払いのつもりだろう。

だから首をひねるが、俺にとってはこれ以上に無い剣だ。

本当はもっと短い剣が欲しかったがデルフリンガーとなれば話は別だ。

「よろしく、デルフリンガー！。

僕はアレスだ」

「おう、アレス。こっちこそよろしくな！

久しぶりに使い手に使われるなんざ、こっちも嬉しくてしょうがねえや」

こうして俺は思わぬ場所でデルフリンガーを手に入れた。

もっともルイズにはボロ剣なんて買ってと怒られてしまうのだが。

第七話（後書き）

お待たせしました。

最近、忙しくてまともに小説を書く時間もないもので。

今回はちょっとルイズをいじりまくってみました。

いかがでしたでしょうか？

原作のルイズとはまた少し違ったツンが出ていればいいんですが。

それではまた次回にでも。

第八話

どうしてだ？

なぜ、こんな事になっている？

今の状況を話すと俺は何故かロープで塔の上からくり付けられているのだ。

キュルケが半ば強引にルイズの部屋へと強襲。

お目当ては俺だった。

あの夜のようにいじめて欲しいと言って来たのだ。

それが原因でルイズがキュルケに突っかかり、何がどうしてか俺をめぐって二人が争うことになったのだ。

景品は当然俺。

勝ったほうが一晩俺と共にするらしい。

「あのさ、僕のことを無視してこういうのを進めないで欲しいんだけど？」

ため息一つ。

そもそも俺をめぐって争うこと自体意味がないと思うんだ。

だが、二人はそうでもないらしい。

「キュルケの誘惑にあんたがはつきりと断らないからこういう事態になるのよ！」

それを自覚しなさい！」

「ダーリン、ごめんね、でも、すぐに助けてあげるから。」

そしたらあの夜のようにし・て・ね？」

「自業自得。女ったらし」

タバサの一言が何気にきつい。

向こうの世界ではあまり関わりが無かったから分からなかったが、何気に酷い。

まあ、事実だけに言い返せないが。

「確か、ルールは僕の縛られてるロープを切れたらってことだった

よね？」

「そうよ！ 文句あるの？」

腰に手を当ててびしりと俺を指す。

「大有りだよ。危険じゃないか。」

「そもそも外れたらどうすんのさ？」

「大丈夫よ。最近のあんたとの特訓のおかげで命中精度も上がったんだから」

ふふん。と、誇らしく胸を張るルイズ。

命中精度が高まったのはいいが、怒り任せに俺を直接爆発しないだろうか……。

「ダーリン、あたしなら確実にロープだけ焼き切つてあげるからね」

「それもそれで危ないんだけど？」

えっと、タバサでいいんだっけ？」

タバサの方を見るとコクリと頷く。

「レビテーションで落下の時に防いで貰えるかな？」

「……」

「ほら、僕が怪我すると二人がまたケンカするかも知れないしさ」

「わかった」

ほっ。

タバサはどうも俺のことを嫌ってるみたいだからな……。

たぶん、キュルケを弄つたせいだろう。

「先行はどっちにする？」

ルイズが言うと、キュルケが余裕の表情で言った。

「あなたに譲つてあげて良くてよ？」

「……後悔しないですよ？」

「あなたこそ、ダーリンをふっ飛ばさないですよ？」

火花を散らしながらにらみ合う。

どうでも良いけど、俺、本当に吹っ飛ばされないかな？

今のルイズの制御力だと下手に俺に当たればかなりの大怪我だ。

死にはしない分、痛みがめちやくちや尾引くな……。

返って完全に吹っ飛ばしてもらったほうが楽になるんだけど。

「行くわよ……。覚悟は良いわね？」

「ちょ、ちよつとルイズ何を考えてるんだい？」

「あんたのロープを切ってあげるだけよ……」

目を据わらせた状態で言われても説得力が無い。

何となくヤバイ雰囲気を感じるが、ここはルイズを信じるしかないな。

「バースト！」

ルイズの叫ぶと俺の頭上で爆発が起きる。

だが、その爆発の衝撃は多方面ではなく、ほぼ横に向かって広がった。

むしろ、平面に鋭利な刃物のような爆発である。

ロープが切れると同時に、俺は石畳にぶつかりそうになって。

「レビテーション」

タバサのレビテーションで顔面ぎりぎりで止められた。

「あ、ありがとう。タバサ」

「一応、約束だから」

素っ気無く言うがそれでも助かった。

まあ、どうしても無理なら自分でレビテーションを掛けられたくらいいいけど。

それだと杖なしで魔法が使えるってことで妙な警戒をさせることになるそうだから止めておいた。

コルベール先生とルイズだけでも十分驚かれたわけだしな。

「それにしても」

俺は切れたロープを見る。

爆発の魔法なのだが、綺麗にロープが切断されていた。

「ルイズ、あなた……」

キュルケも驚いてロープを見ていた。

ただの爆発しか出来ないと思っていたのに。

「コモンスペルはイメージが大事なんですよ」

ルイズは当然と言う様に腰に手を当てていた。

顔はとても満足そうである。

「まさか、爆発のコモンスペルに切り裂くイメージを上乗せするなんてね。」

さすが僕のマスターだよ」

「ふふん。当然よ。」

わたしの手に掛ければこのくらいちよちよのちよいよ!」

何気に嬉しそうだ。

応用が出来るということはコモンスペルとは言え魔法の根本がイメージ出来てきた事になるんだな。

そろそろ次のステップに移行しても良いかも知れない。

「キュルケ、わたしの……!」

勝ちよ。

そうルイズが言おうとしたと同時に、俺たちを大きい黒い影が覆った。

振り向くと二十メートルくらいのゴーレムが宝物庫に対して拳を振り上げる。

「何よ! あれ!」

「もしかして、土くれフーケ!」

キュルケがそう叫ぶ。

土くれフーケ。俺の世界にもいたな。

確か土メイジの怪盗つてとこだ。

「まさか、宝物庫を壊す気!」

ルイズが叫ぶのとゴーレムが宝物庫に対して拳を振り下げたのは同時だった。

岩が碎ける轟音と共に、その破片が俺たちを襲う。

「エア・ウォール」

タバサがそれを風の壁で防いでくれた。

成人男性くらいの大い岩とかを風の壁でなんとか弾いていく。

彼女はトライアングル・クラスだ。これくらいは朝飯前なのだろう。

「ルイズ、僕のロープを解いて！」

「え？」

「早く！」

俺が少し大きい声で言うのとルイズは慌ててロープを解く。

少しだけ時間が掛かったが、俺は巨大なゴーレムを見据えつつゴーレムの肩の上の人物に注視した。

その人物は黒いロープに身を包んで壊した宝物庫の中へと入っていく。

「アレス、どうするの？」

「あれは宝物庫がある塔だよ。」

つまり、フーケは学院の宝を盗もうとしてるわけ」

「だから、あんたはどうするのよ！」

「捕まえるんだよ」

俺はフライを唱えると、一気にゴーレムに近づく。

後ろでルイズとキュルケが何かを叫んでいた。

しかし、こんなことならデルフリンガーを持ってくれば良かった。何せ、用があるのは俺だけと言う事で俺が持っているのは自分で練成した剣だけ。

ゴーレムに近づくと、俺の接近に気が付いたのか手を振り上げてきた。

同時にフーケも宝物庫からなにやら筒のようなものを持ち出している。

「フーケ！」

叫ぶとフーケが俺を見上げた。

顔は良く見えない。

月明かりで返ってロープの中が陰になっていた。

フライを解除すると、俺は自由落下に任せて落ちる。

剣を握ってガンダールヴを発動。

着地と共に迫りくるゴーレムの拳を掻い潜ると一気にフーケとの間合いを詰めた。

「つく！」

フーケの焦る声が聞こえる。

巨大ゴーレムは破壊行動には適しているが、こうした対個人には不利だ。

ましては俺みたいにすばしっこいと。

「それは返してもらおう！」

俺がフーケとの距離を縮めて足で筒を蹴り飛ばそうとするが、フーケも馬鹿じゃない。

バックステップで後ろに下がるとゴーレムの腕が俺を捉える。わずかに動かしたただけだがこれだけ大きいとまるで岩にぶつかったみたいだ。

ゴーレムの腕に十メートルくらい吹き飛ばされる。

ダメージはほとんどないが、これでまた間合いが開いてしまった。「アレス！」

振り向くとルイズとキュルケ、タバサが俺の方に向かってくる。

俺が三人に気が向いたと同時に、ゴーレムが再び動き出す。

もう一度俺がゴーレムを見たときはその手に五メートル四方の大きな壁の破片が握られていて。

「三人とも危ない！」

何のためらいも無く破片を投げてきた。

さすがにあれだけの質量だと風の魔法じゃ防ぎきれるか？

あまり使いたくないけど。

「ガード・フィールド！」

俺に駆け寄ってきた三人と俺がすっぽり入るくらいの魔力障壁を作り出す。

ゴーレムの投げた大きな壁の破片が落ちてくるが、俺のガード・フィールドに阻まれて目の前で砕け散った。

「フーケが逃げていく」

タバサの言葉通り、ゴーレムは学院から徐々に離れていくのが分かる。

あれだけの大きさでは人の足で追いつくことが出来ない。からと言ってフライで追いかけるのは危険だ。

「三人ともどうしても僕を追ってきたの？」

「使い魔のあんたが戦ってるのに主人が戦わないわけに行かないじゃない！」

「ダーリン一人よりもみんなで力あわせた方がね？」

「……加勢」

ルイズの使い魔発言はちょっと後で指導するにして、とにかく三人とも心配してくれたんだろう。

「ありがとう。でも、フーケはもういない」

ゴーレムの逃げた先を指差すと、もうゴーレムは跡形もなかった。学院の外に逃げたとは言え、あれだけ大きければ目立つ。

もう追っ手が来ないと踏んで闇に紛れたのだろう。

フーケは確実にトライアングル・クラスの土メイジだ。

戦闘にも案外慣れている。

「手ごわい相手」

タバサがぼそりと言う。

全く持つて見解どおりだ。

「何にしても、全員無事でよかったってとこかな？」

俺の言葉に三人はとりあえず頷くのだった。

翌日。

朝から学院中は大騒ぎだった。

何せ、土くれフーケが現れたと言う事と学院長の私物でも有る破壊の杖が盗まれてしまったのだから。

俺たちは現場に居合わせたことで呼び出されたんだが。

「衛兵は何をしていたんだ！」

「所詮、平民だ。それより当直は誰だったんだ！」

という具合に責任の押し付け合い。

これにはルイズをはじめキュルケ、タバサも呆れ顔だ。もっとも俺も同じである。

汚い責任の擦り付けをしている中、オールド・オスマン現れると責任は我々全員にあると言ってその場を収めた。

「それで、現場を見ていたというのは君達かね？」

オールド・オスマンが俺達の方を見る。

特に俺と視線が合った時は何故か厳しい視線が注がれていた。

「詳しく話さない」

オールド・オスマンの言葉にルイズが代表して前に出た。

ゴーレムが現れて塔を壊したこと。

俺がその現場を見て、捕まえると言って向かって行ったこと。

結局逃がしてしまったことが話された。

逃げた先でゴーレムを消して闇に紛れたことを話した。

ルイズの説明から自ずとフーケと一戦交えた俺に注目が集まる。

「君はミス・ヴァリエールの使い魔じゃったな？」

「はい。先日はお世話になりました」

「その事はもういい。それで、フーケはどうじゃった？」

「はい、フーケはトライアングルのメイジ。体術はどうか分かりませんが少なくともすばしいのは確かです。

身のこなしが只者ではありませんでした。

私自身、間合いを詰めましたがゴーレムによって防がれ後は知つてのとおりです。

戦術を組んで望めば捕らえられない相手ではありません」

俺の言葉に周りがざわつく。

それもそうだろう。

何せ、捕らえられないことはないと言ったのだから。

「なるほど。して、フーケの行き先は？」

「さすがにそこまでは。」

ただ噂からすればもう私達が追ったところで見つからない可能性

が高いでしょう。

またいつまでも黒いローブでいる間抜けとも思えません」

「うむ……。その通りじゃろうな」

俺が言い終わると部屋には静寂が訪れた。

時間にして十秒程度。

その静寂を破る一人の人物が部屋に入ってくる。

ロングビルだった。

慌てた様子で部屋の中に入ってくる。

「ミス・ロングビル！　今までどこに行っておったのじゃ！」

「すみません。フーケに破壊の杖を盗まれたと伺って、朝からフーケの調査に出ていました」

ロングビルの言葉に周りから感嘆の声が上がる。

しかし朝からと言ってもこんなに早く帰ってくるものか？

「おお、さすが仕事が早い。して、その結果は？」

「フーケの居場所が分かりました」

これには部屋にいる全員が驚いた。

俺も当然、驚く。

しかし、あまりに早過ぎはしないか？

一流の盗賊がたった一人の人間に見つかるようなへまをするとは思えない。

今まで現れたフーケを捕まえることすら出来なかったと聞いているんだ。

逃げたフーケを搜索する貴族が見つけることも出来ない中、わずか数時間で見つけられると思うだろうか？

「どこにおるのじゃ？」

「はい。周辺を聞き込みしていたところ、農民の一人が黒いローブを着た男が小屋に入っていくのを見た」

「黒いローブ？　それはフーケに間違いありません！」

ルイズが答える。

確かにフーケだろうが、どうもしっくりと来ない。

俺が交えたとき、実は甘い香りがしたからだ。
あれは明らかに女性特有の甘い香りだと思う。

身のこなし、舌打ちしたときの声、あとはローブを着ていたとは
言え男とは違う体型。

近くで見たからこそ分かる。

まあ、実はルイズたちにフーケが女かもしれないと言っていないだ。

だから黒いローブの男をイコールでフーケに結びついたんだと思う。

「早速、フーケ捜索隊を組もうと思うが誰か勇気あるものはおるか？」

オールド・オスマンがそういうが誰も手を上げようとし
ない。
小さい声でお前がいつたらどうかとか、私は嫌ですよとか聞こえてくる。

「どうしたのじゃ？ 誰も手を上げんのか？」

フーケを捕まえて名を上げようと思う勇敢なものはおらんのか？
オールド・オスマンが再度言うが皆黙り込むだけだった。

静寂があたりを包んだとき、ルイズが一步前に出ると杖を振りかざす。

「ミス・ヴァリエール！ あなたは生徒じゃありませんか！」

教師の一人がそういうがルイズは手を下げない。

「だって誰も手を上げようとし
ないじゃないですか！」

わたしもあの場にいたんです。

だったらわたしにだって捜索する権利があります！」

ルイズの言いたいことも最もだ。

「なら、私も。」

主人が行って使い魔が行かないわけには行きません。

それに使い魔は主人を守るもの。

フーケからルイズを守りましょう」

俺も杖を掲げると、続いてキュルケ、タバサも上げる。

「ヴァリエールだけ行ったらツエルプストーの名が泣きますわ」
「心配」

杖を上げる二人を見てルイズが感動したように二人の名前を口にした。

俺達が杖を上げたことで教師達が彼らは学生の身で危険だと口々にするが、やはり誰も杖を掲げない。

そんな状態にオールド・オスマンが場の閉めに掛かる。

「誰か、ここにおける生徒達より勇敢だと示せるものはあるか？」
一瞬にして静寂。

ため息をつくようにオールド・オスマンは言った。

「ここにいる四人は優秀じゃ。」

ミス・タバサはこの歳にしてすでにシェヴァリエの称号を持っていると聞いている」

シェヴァリエと聞いて周りが感嘆の声を上げた。

それもそうだろう。

シェヴァリエは地位で得られるものではない。

国への忠誠の証として、その働きが認められたときのみ得られるのだ。

「ミス・ツエルプストーはゲルマニアにおいて優秀な軍人を輩出しており、また自身もライアングルメイジとじゃ。」

して、ミス・ヴァリエールは成績は優秀。

最近では失敗魔法をただの失敗とせず有効活用できるように力の制御にも精を出していると聞いている。

そして、彼女の使い魔ミスター・アレスはドットとは言えあのギーシュ・ド・グラモンを魔法も使わずに圧倒できる剣技を持ち、自身はライアングルのメイジときておる」

「そ、そうですぞ、何せ彼はあの、ガンダーっ！」

コルベール先生がガンダールヴと言い掛けてオールド・オスマンに睨まれて口を閉じる。

どうやらガンダールヴのルーンを解読したようだが、余計な波風

を立てないようにしているのだろう。

さっきのオールド・オスマンの厳しいまなざしもそれによるものに違いない。

「して、この四人に勝てるものがおるのであれば今一度問う。

勇敢なものは杖を掲げよ！」

この時、もう誰も手を上げようとすることは無かった。

こうしてルイズ、キュルケ、タバサ、俺の四人でフーケの搜索隊が編成されることになる。

俺以外、不自然な情報を持ってきたロングビルに誰も疑惑の目を向けずに。

第八話（後書き）

本編も書かずにこちらばかりすみません。
ちよいと本編は考えが纏まらないもので……。

それではまた次回に！

第九話

森の中を馬車が走る。

ロングビルが手綱を引き、フーケがいると言う小屋を俺達は目指していた。

馬車は襲撃を考えて屋根は無い。襲撃があつた際はすぐに散開するためだ。

なのだが、俺とロングビルはいいとして残りの三人を見ると小さいため息が出た。

ルイズが昨日の勝負で自分が勝った事をキュルケに主張して、キュルケが分かったからと軽くはぐらかしている。

タバサは周りがルイズとキュルケが騒ぐ隣で静かに本を読んでいた。

とてもこれから討伐に行くとは思えない団体なのだ。

まあ、変にギスギスしているよりはマシだな。

俺はロングビルの斜め後ろに場所を移すと少し首を向けて尋ねた。

「ミス・ロングビル、少々聞きたいことがあるんですがいいですか？」

「ロングビルで結構ですよ。ミスタ・ヴァルガード」

「僕もアレスで結構ですよ」

柔らかい笑みで俺の方を少し振り向いた。

近くで見るとホント美人だな。

後ろに束ねた髪、掛けられた眼鏡さえ彼女を飾っている。

それはともかく俺はある疑問を一つ尋ねた。

「僕は昨日、フーケと一戦交えているんです」

「フーケと一戦を交えたんですか！」

驚くロングビルに一度頷く。

「ええ。それでロングビルさんが持ってきた情報のうち、二つに不自然な点がありまして」

「不自然な点、ですか？」

首をかしげながら聞き返して来る。

「一つ目ですがフーケは恐らく女性です」

「え？ 男ではなくて、ですか？」

「はい。一戦交えた時に舌打ちしていたんですが、女性の声でした。それと香りですね……。女性特有の柔らかい香りがしたんです。香水の香りも微かに香ってました……」

「凄いですね。わずかの間にそれだけの事を……」

ロングビルは驚いた表情で俺を見た。

そうわずかな間でだが、声や香りと言うものはやはり分かる。

まあ、再び戦うこともないと思う相手なら声はともかく香りには気をつけないのかも知れない。

「流れ者ですが、生きていくために様々な技能を身に付けましたからね。」

それでもう一点、不審な点がフーケは未だに見つけられたことが無いということです。

ロングビルさんの言う農民如きに姿を見られるへまをするとはとても思えないんですよ」

「本当にアレスさんは着眼点が鋭いですね。」

まさか、わずかな情報にそんな不審な点があったなんて……」

何故だろう？

少し、ロングビルが苛付いているように見える？

わずかにそんな雰囲気漂っているな……。

まさか、ロングビルがフーケだというのか？

俺は情報をもたらした農民が怪しいと思ったんだが。

そう言えば、俺はフーケと一戦を交えたとは言ったがわずかな時間とは言っていなかった。

だと言うのにロングビルはわずかな間にと言っていた。

これは少し様子を伺うか？

「ええ。なので、僕はその農民が怪しいと思うんですがどうですか

？」

自分で尋ねてみてこれにも不自然さがあつた。

もし俺が言うように農民がフーケとしてわざわざ情報をもたらすメリットが無い。

だとしても腑に落ちないな。

「農民がフーケでこちらに情報を渡した」

その声に俺は前を見る。

本を閉じたタバサがこちらを見て言っている。

気が付くとルイズもキュルケも注目していた。

「何？　つまり、わざわざフーケがロングビルに情報を渡したってこと？」

何のメリットがあるって言うのよ？」

ルイズが腕を組んでそう尋ねてくる。

確かにそうなのだ。

フーケが学院側にわざわざ情報を渡すメリットがどこにある？

「おかしな点が多いわね」

キュルケもそう言ってあごに手を当てている。

「もしかしたら農民すらも雇われていたと言うことも考えられますね」

ロングビルが、真剣な表情でそう発言する。

もう苛付いている表情はない。

何だ？

何でさっきは苛付いていた？

やっぱり、ロングビルなのか？

そう言えばロングビルも土系統の魔法が得意だったはず。こちらのロングビルも恐らく同じだろう。

もしこれでフーケがロングビルなら、向こうのロングビルもフーケだったのかも知れないな。

何はともあれ警戒が必要だ。

「ともかく、農民の情報の通り小屋まで行ってその小屋を探ろう。」

上手く行けば破壊の杖を奪い返せるかも知れない」
俺の言葉に全員が頷くのだった。

途中から俺達は馬車を降りて徒歩で道を歩いた。
森を抜けると開けた場所に出る。

少し離れた場所に情報の小屋らしいものが見えた。

そこそこ館だ。廃屋のが正しいだろう。人が住むような

俺達は近くの茂みに隠れて様子を伺う。

「あの建物か？」

ロングビルに訪ねると頷いて答える。

「情報が間違えて無ければあの廃屋にフーケがいるはずですよ」

情報は恐らく間違いは無い。

問題はロングビルがフーケであるかどうかだ。

もし違うならそれに越したことが無いが……。

「偵察が必要」

タバサが俺を見て言う。

恐らく俺が行けと言いたいのだろう。

「そうだね。ここは僕が行くよ」

「じゃあ、わたしも」

偵察にルイズも名乗りを上げるが、俺は手で制した。

「ルイズは万が一ゴーレムが出てきた場合に、手加減抜きで爆発魔法を放って援護して欲しいんだ。この中でまともにゴーレムを破壊できるとしたらルイズのバーストだけ。」

僕との訓練のせいかなの見せ所だよ」

「分かったわ！」

自分が頼られている。

そのことが嬉しいのだろう。気合の入った返事が返ってきた。

「あたし達は？」

キュルケがタバサ、ロングビルを見て言う。

「キュルケは恐らくルイズはのサポートを頼むよ。ルイズは戦闘経

験が無いはずだからね。

タバサはロングビルさんに付いていて欲しい。

ロングビルさんはあまり戦闘に関わらないようにして下さい」

俺の言葉にキュルケ、タバサが頷く。

ルイズはキュルケがサポートと言う事に若干の不満があるようだが、何も言わない。

一番気になるロングビルはあまり気が進まないようだ。

もし彼女がフーケなら誰かが居ては困るだろう。

だから敢えてタバサに護衛を頼んだ。

俺が関わらないこちらの歴史でもタバサの実力は確かのはず。

ロングビルがもし、何か不信な動きをすればタバサが牽制出来るだろう。

「みんな、何が起こるか分からないから最悪、自分の身は自分で守るように」

それだけ言うとな俺は茂みから離れながら魔法を唱える。

唱えた魔法はライトネスだ。

これで身を軽くして俺は背中に背負っていたデルフリンガーを手にする。

「デルフリンガー、君の出番だよ」

「ようやく俺のお出ましか」

デルフリンガーを握るとガンダールヴのルーンが反応する。

ライトネスとルーンの力で一瞬で廃屋へとたどり着く。

壁に背を付けて入り口の方へと慎重に進む。

入り口まで来ると俺は一気にドアを蹴破って中へと入った。

もしフーケがいるなら一気に決着を付けようと思っていたのだが……。

「なんでえ、誰もいねえじゃねか」

「そうだね。まあ、予想はしてたんだけど」

「それじゃあ、俺の出番がないじゃねえか」

愚痴るデルフリンガー。

まあ、ようやく出番かと思えばこれだからな。

「何もないに越したことはないからね。」

また使う機会もあるさ」

「そうかよ。まあ、気長に待つてることにするか」

デルフリンガーを鞘に収めると、俺は廃屋から出て問題ないという合図を皆に送った。

ルイズたちも廃屋の中に入ると早速、中を調査する。

中は数年は使われていない状態で埃も多い。

蜘蛛の巣などもあり、ルイズ辺りはやや文句を言っている。

「どうだい？ 何か見つかった？」

全員に尋ねるが首が横に振られる。

まだ探し始めたばかりだ。

情報はフーケ自らよこしたと考えて間違いないはず。

ならば、ここでも何かがあるはずだ。

「あれ？ これは何かしら？」

ルイズがそう言いながら細長い箱の中から何かを取り出す。

筒のようなもの。

大きさからして破壊の杖だろう。

「ちよつと貸して貰える？」

ルイズが頷くと俺に破壊の杖らしきものを俺に渡してくる。

俺はそれを受け取ると、ルーンが反応した。

ルーンから流れ来る情報を受けて俺は驚いた。

「こんなものが、破壊の杖だって……」

対戦車ロケットランチャー、M72 LAW。

威力は戦車を大破できる程だ。

破壊の杖と言って差し支えないだろうが、こんな兵器があったら

この世界のパワーバランスが大きく壊れるぞ。

これは紛れもなく場違いな工芸品として扱われるものだ。

「これがどうしたの？」

「いや、何でも…！」
「何でもない。」

そう言おうとした時、突然地響きと共に廃屋の天井が落ちてきた。
「ガード・フィールド」

とっさに防御魔法で全員を守る。

その時ようやく俺は気がついた。

ロングビルが既にこの場に居ない。

「フーケのゴーレムよ！」
ルイズが叫ぶ。

俺も振り向くとこの前と同じゴーレムが居た。

約二十メートル級のゴーレムだ。

タバサがゴーレムに向かって魔法の詠唱をし始める。

この詠唱はトリアングルクラスの魔法。

タバサは杖をゴーレムに向けて叫んだ。

「ウインディ・アイシクル！」

数十本の氷の矢がゴーレムに向かって放たれた。

氷の矢がゴーレムに突き刺さり、わずかにゴーレムのバランスが崩れて後退させる。

「さすがね！ あたしも」

キュルケが前に出て、詠唱をする。

得意の火の魔法のようだ。

放つ魔法は。

「フレイム・ボール！」

巨大な炎の玉だ。

ファイアーボールよりも一回り大きい炎の玉がバランスを崩しているゴーレムに着弾。

ゴーレムを炎で包み込む。

だが、俺はこれで終わらないのが分かった。

「みんな今の内に廃屋から出るんだ！」

「ど、どうしてよ。今ので終わったんじゃなの？」

「相手はトライアングルクラスだ。
どれ程の技量かは分からないけど、トライアングルクラスの魔法
が一日に何回も使えるものもある。」

今のゴーレムがあれで倒せたとしても次のゴーレムを作れば危険だ！」

土くれフーケと言うくらいだ。

土メイジとして相当な使い手のはずだ。

あれで終わるわけがない。

俺達廃屋から出るとそれを目の当たりにすることになる。

「あれで倒れないなんて……」

キュルケが少し悔しそうに言う。

全力でなくても十分な火力だった。

あれで燃やしきれないとなると、やっぱり厄介だ。

ゴーレムは俺が引きつけるとして、やっぱり

「あれを僕が引きつけるから、ルイズはタバサと上空へ待避。

精神を集中させて特大のバーストの準備が出来たら合図をくれる
かい？」

「分かったわ！」

「タバサ、ルイズとキュルケをつれて上空へ。破壊の杖も頼むよ」

「ミス・ロングビルがいないわ」

「信じられないかも知れないけど、僕の考えが間違ってなければ彼
女がフーケ。」

見つけ次第、捕らえて欲しい」

俺がそういうと三人は驚いた表情をするが、詳しい説明をする時
間がない。

「キュルケ」

「何かしら？」

「上空から援護をお願い」

「任せて、ダーリン！」

「じゃあ、行くよ！」

合図すると俺はゴーレムに向かっていく。

後ろでは口笛が響き渡っていた。

彼女の使い魔を呼んだに違いない。

俺はデルフリンガーを引き抜く。

「デルフリンガー、やるぞ」

「おう！ 任せな！」

ゴーレムは持ち直したらしく、右手を振り上げてきた。

ゴーレムを引きつけると、右手を振り下ろしてくる。

その瞬間、俺は左側に避けた。

あのゴーレム程の大きさだ。拳を軌道を修正することは出来ない。

狙った通り、俺が左に避けたことでゴーレムの右手は地面に突き刺さった。

「うおおおお！」

俺はゴーレムの右手を狙って一気に剣を振り切る。

手応えは十分だ。

右手と本体が切り離されてゴーレムがぐらりと揺れる。

次の瞬間、再び巨大な炎の玉がゴーレムに着弾し、一気に燃え上がった。

着弾の衝撃にゴーレムは完全に大地に倒れる。

巨大なゴーレムだけに倒れた衝撃で地面が揺れた。

「キュルケ、ナイス！」

俺が上空に叫ぶ。

風竜の上から手を振るキュルケが見えた。

「お前さん、なかなかいい動きだな」

倒れたゴーレムを見ているとデルフリンガーをそうやってきた。ガンダーヴルの力もある。

俺は剣を構えたままの状態で少しゴーレムから離れた。

「まあね。魔法の使えないメイジは無能だから剣も嚙ったんだ」

「嚙った程度かよ。謙遜すんじゃないか」

「そんなつもりは無いけどな、おっともう復活するみたいだね」

ゴーレムは切れた右手も再生してゆつくりと起き上がろうとする。
「させないよ」

俺は一気にゴーレムに近寄ると起き上がろうとするゴーレムの腕を切り落とすと再びバランスを崩して倒れた。

まだだ。

俺は更に両足も切断する。

地面に落ちる足は重い地響きを立てて土埃を上げた。

「アレス！」

上空からはキュルケの声が聞こえて来た。

上を見上げると手でゴーレムから離れろと合図をする。

ルイズの準備が出来たのだ。

俺はゴーレムから一気に離れる上空からルイズの魔法を唱える声が聞こえてきた。

「バースト！」

風竜の上で杖を振り下ろすルイズ。

次の瞬間、ゴーレムが大爆発を起こした。

もの凄い爆風と衝撃波、爆音、地響きが巻き起こる。

ゴーレムは俺との練習時以上に木っ端みじんに吹き飛んだ。

俺は地面にデルフリンガーを突き立てて爆風に耐えながらゴーレムが砕け散るのを確認した。

爆発が収まり、辺りは土煙が覆う。

「やったな」

今のはさすがに相当凄い爆発だった。

自分で指導しておきながら何だが、予想を遙かに上回る威力。

これなら戦艦を一隻くらいなら沈められるかも知れない。

そんな力はいらないだろうが。

「アレス！」

俺は声に振り返る。

すると、そこには駆け寄ってくるルイズが居た。

そのまま俺に走ってきて。

「やったわ！ わたし、ゴーレムを倒したのよ！」

抱きついてきた。

俺はルイズを支えながら言う。

「凄かったよ。本当に凄かった」

「ありがとう！ これもアレスのおかげよ！」

嬉しくて仕方ないと言うように俺に抱きついていているルイズ。

少し先ではキュルケとタバサがこちらを見ていた。

キュルケは少し羨ましそうに、タバサは少し驚いているようだ。

喜びが醒めないようだが、俺はある気配を感じてルイズを抱えて

俺は今居る場所を離れた。

次の瞬間、俺の居たところにゴーレムの腕が突き刺さる。

振り向くと、土煙の中に巨大な黒い影が浮かび上がった。

「そ、そんな！ 今のダメだったの！」

ルイズが驚きの声を上げる。

だが、ダメだったわけじゃない。

「新しいゴーレムだよ。」

さっきのは確実に砕け散ったはずだから。

ルイズ、もう一度行ける？」

「行けるわ。でも……アレス」

俺を不安そうに見るルイズ。

「僕は大丈夫だ」

「本当ね？ もし嘘だったらただじゃおかないから」

そいうとルイズはキュルケ達の方に走ろうとして、出来なかった。

なぜならゴーレムがルイズとキュルケ達の間立っていたのだ。

「これじゃ……」

ルイズが上を見上げて後ずさるように下がる。

「キュルケ、タバサ！ 急いでここから離れて！」

俺がゴーレムの先にいると思われる二人に声を上げると、二人はすぐ様風竜に飛び乗って安全圏まで離脱する。

「ルイズは僕と」

そういうとルイズを俺が抱えるとゴーレムから距離を取る。ようやく土煙も収まってくると、ゴーレムの全容が明らかになった。

先ほど変わらない大きさ。

まさか、これ程のゴーレムをもう一体作り出すとは……。やっぱりただ者じゃない。

「ア、アレス……」

少し不安そうな顔で俺を見上げるルイズ。

「大丈夫。僕が君を守るから」

「う、うん」

少し顔を赤くしながら顔を背けた。
可愛いね。

とは言え、そんなこと言っている余裕はない。

「ルイズ、僕が逃げ回るからその間に精神をもう一度集中させてくれ」

「わ、分かったわ！」

俺がそう言うのとルイズは再び精神を集中し始めた。

これでダメなら次はロケットランチャーを使うしかないな。

正直、ルイズを抱えてだとデルフリンガーは使えない。

俺は自分にライトネスを掛けて逃げ回った。

上空から援護でタバサとキュルケが魔法を放ってくれるが、どうしても致命傷にならない。

部分的な破壊は成功するが、破壊してもすぐに再生されてしまう。俺もライトネスで身を軽くしているとは言え、ルイズを抱えながらゴーレムの攻撃を掻い潜るのには限界を感じていた。

「アレス、もういいわ！」

ルイズが俺にそう告げる。

一度ゴーレムから大きく距離をとると、ルイズを地面に下ろす。ルイズはゴーレムを見据えて大きく息を吸うと、杖を振りぬいた。

「バースト！」

ゴーレムの中心部分が一瞬光ったかと思うと再び大爆発が起こつた。

何度見ても凄まじい。

ゴーレムは完全に砕け散り、爆風も強烈だ。
立っているのさえやつと。

ルイズが自分の魔法の爆風で飛ばされそうになったので俺は彼女を抱きかかえて地面に伏せた。

「ちょ、ちよつと！」

押し倒したようにもなつてルイズが慌てるが、そんな場合じゃない。

「ルイズ、こうでもしないと二人とも飛ばされるよ！」

俺がこういうと何か言いたそうだったが口を摘むんだ。
爆風が収まると俺達はゆっくりと起き上がる。

「あ！」

ふらついてルイズが倒れそうになるのを俺が腕を掴んで防ぐ。
さすがに精神力切れか？

少し疲れが見える。

「大丈夫？」

「え、ええ……」

顔も少し赤いのは疲れからだろう。
たぶん。

気を取り直すと俺達はゴーレムがあつた場所を見る。

さすがに木っ端微塵で跡形もなくなっていた。

「今度こそやったか？」

もうゴーレムを作り出すことなんて出来ないと思うが……。
そう思った時、再び巨大なゴーレムが地面から現れる。

大きさは先ほどよりは小さいが冗談じゃない。

それでも十メートルを超える大きさだ。

「嘘でしょ！」

「まさか、これ程とはね……。ルイズ、まだ行ける？」

「さすがにもう無理よ！ さっきので精神力使い果たしてるわ！」
悔しそうに言う。

確かに悔しいと思う。

あれだけの攻撃でも相手は再びゴーレムを作り出せるのだから。
しかし、どうしたら？

「アレス！」

その時上空から声が聞こえて上を見上げた。

上空には破壊の杖を持ったキュルケが俺を見て叫んだ。

「破壊の杖を渡すわ！ それでゴーレムを！」

そういうとキュルケは俺に向かって破壊の杖を投げる。

真っ直ぐ俺の元に飛んでくる破壊の杖を、直前でレビティション
し減速させる。

破壊の杖を手にとると、俺はすぐにセッティングする。

「破壊の杖なんて使えるの？」

ルイズが不安そうに俺を見る。

学院長の私物だし、それが果たして本当に使えるのかと。

使えるには使える。

だが、問題が一つあった。

「大丈夫。これは武器だよ。」

ガンダールヴはどんな武器でも使いこなせるからね。

それより僕は左手が無いから一人じゃこれは使えないんだ。

だからルイズ、君が使うんだ。使い方は僕が分かるから」

そう俺の左手は十四歳の時に切断してそのままだ。

この手の兵器は大抵一人で使えるようになってるが、それは両
手がある場合だ。

俺のように片手がないと使えない。

全く、こんな事なら義手でも付けて置けば良かったな。

「え？」

破壊の杖を使う。

そのことにルイズが戸惑いを示した。

だが、ルイズがやらなければ俺では使えない。

「大丈夫。俺の言うとおりにもってくれば使えるから」

俺はルイズに破壊の杖を渡すと、持ち方や発射スイッチについて簡単に話す。

ゴーレムはどういう訳か、動きを止めていた。

理由はともかくチャンスは今しかない。

「こ、これでいいの？」

ルイズが何とか破壊の杖を構えることが出来た。

「オツケーだよ。後はそこからゴーレムが中心に見えるようにして」
言われるままにルイズは照準を合わせた。

「少し、反動があるかも知れないけど驚かないでね？ そのまま横のボタンを押して」

ルイズは破壊の杖 M72 ロケットランチャーの発射スイッチに指を掛けると、ゴーレムに向けてぶっ放すのだった。

第九話（後書き）

2010/09/02

アレスが片手だったのを思い出したため、ルイズに破壊の杖を使うように内容を修正。

第十話

放たれたロケット弾は一瞬にしてゴーレムに着弾して爆発を起こした。

威力はルイズのバースト程じゃないにしても、戦争に使用する兵器。大した威力だった。

「いたたた……」

放った衝撃でルイズが尻餅をついた。

ロケットランチャーを担いだまま後ろにひっくり返ったわけだ。

その先の白い布が見えてしまったわけだが、俺は知らないふりをする。

「アレス！ ちょっと、どころじゃないじゃない！」

可愛らしいお尻をさすりながら立ち上がって講義をするルイズ。

ルイズは学院長の私物というのも忘れてロケットランチャーを放り投げると俺に掴みかかってくる。

まあ、確かにちよつとじゃすまなかったか。

「ごめんごめん。でも、ほらあの通りゴーレムも倒せたよ」

俺はそう言いながらただの土の塊に成り下がったゴーレムを指差す。

「もう、復活しないわよね？」

「たぶん……」

今まで散々動き捲くついていたゴーレムがロケットランチャーを使用しようとした途端、動きが止まった。

あれではまるで使って下さいと言ったようにしか思えない。

土くれフーケの目的は威力を知ることだったのか？

「なあ、その貴族の娘っこが使った武器はなんだ？」

デルフリンガーが俺の背中越しに尋ねてくる。

「あれはたぶん場違いな工芸品で間違いないね」

「それって使用用途不明って言われてる？」

ルイズがきよとした顔で尋ねてくる。

頷いてロケットランチャーを取ろうとすると、俺とは別の手がそれを拾い上げる。

「凄い威力ですね」

「ロングビルさん」

俺は一瞬身構えた。

推測が正しければロングビルがフーケ。

そのフーケがロケットランチャーを手に取ったのだからこれから何をするのか分からない。

もともと、M72は使い捨てだと言うのが情報から分かったからこれで何か出来るわけじゃない。

「ルイズ！ アレス！」

後ろを振り向くとキュルケとタバサが走ってきていた。

二人の後ろにはタバサの風竜がおとなしく翼をたたんでいる

「ロングビル！ あなたどこにいたのよ！」

キュルケが叫ぶと、ロングビルは怪しく笑みを浮かべてロケットランチャーを俺達に向けた。

「やっぱり、あなたでしたか」

「ふふふ。そうさ。正直、あんたの発言に何度冷や汗を出したことか」

勝ち誇ったように俺達を見据える。

俺の推測が外れれば良かったわけだが、やはりそうは行かなかったようだ。

「盗賊だなんて、あなたそれでもメイジなの！」

正体を見せたロングビルことフーケにルイズが睨み付けた。

貴族、メイジに対する誇りの高さを感じられる。

「……取り潰しの恨み」

タバサの言葉に皆が振り向いた。

フーケは一度タバサを睨み付けるが、笑ってみせる。

「そうさ。下らない事で取り潰されちゃこっちもやってられないっ

てことよ。さて、ベラベラと話す前にあなた達をここで始末しないとね」

ロケットランチャーの照準を俺達に合わせてる。

全員に緊張が走った。

皆はあれにはもう弾が無いことを知らないから仕方が無い。

だから、フーケは俺を怪訝な面持ちで見る。

なぜ怯えない？　と言いたげだ。

だから俺は事実を告げてやることにしてやる。

「あのさ、それだけとすでに使えない代物だよ？」

「え？」

「うそ？」

この場に居る全員が俺の言葉に驚く。

一回限りなのだから当たり前だ。

マジックアイテムの中には当然、一度きりで使えなくなるものが多い。

これが場違いの工芸品であっても、まさか使い捨てとは思わないだろう。

「そんな出鱈目を！」

焦るフーケに俺は一步近づく。

「アレス！」

ルイズの叫びに俺は手で制しながら再び近づいた。

「死に急ぎたいのかい！」

フーケは近づいてくる俺に照準を合わせて来る。

だが、顔には不安があった。

弾が無い？

そんなわけあるか、と。

ホント滑稽だな。

「撃ってみれば？　どうせ無駄だから」

「つく！　あの世で後悔しな！」

そついうとロケットランチャーをボタンを押すが、空しく乾いた

機械音しかない。

二度、三度やるが結果は同じ。

「くそ！」

フーケがロケットランチャーを投げ捨てるのと、俺の杖が彼女を捕らえるのは同時だった。

「頭を後ろで組んで。もし抵抗するなら、この場で殺すよ？」

最大級の殺意を持ってフーケを睨み付けると、彼女は諦めたように両手を頭の後ろに回すのだった。

その後、杖を奪うと彼女を気絶させた。

いくら杖が無くても土くれフーケ。何かしらの策を持っていたら対処しきれないのだから。

俺達は気絶したフーケを連れて学院に戻った。

学院長室でミス・ロングビルがフーケだったことをルイズがオールド・オスマンとコルベールに報告すると二人とも愕然とする。

「まさかの。美人だからと何の疑い無しに採用してしまったわい」

オールド・オスマンはため息交じりで言うが、少々突っ込みたい。美人だと疑わないのかと。

「ところで、どこで採用されたんですか？」

コルベールがオールドオスマンに尋ねると彼はとんでもない事を言い出した。

「いやの、行きつけの居酒屋で給士として働いておつての？ なかなかにいい尻だったので撫でたのじゃが怒らないので僕の秘書としてスカウトしたわけじゃ」

「どこをどうしたらそうなるんですか？」

俺は少々冷やかな目でオールド・オスマンを見る。

ルイズ、キュルケ、タバサも同じだ。

まるつきり冷めた目でオールド・オスマンを見つめていた。

「察してくれんかの？」

とぼける様に言うオールド・オスマン。

つまり怒らないからセクハラし放題と思ったわけか……。

これにルイズたちは容赦ない言葉を浴びせる。

「ただのスケベ爺ね」

「最低ね」

「変態」

「仕方なからう！ 美人だったんじゃないから！」

言い訳にも聞こえない言い訳に三人はダメだこりやと首を振るのだった。

まあ、そんなやり取りはともかく。

「それで、彼女の処遇は？」

「まあ、フーケに恨みを持つ貴族は大勢いるからの。処刑になるんじゃないだろうか？」

「そうですね」

予想通りとは言え、俺は少しやりすぎたかと思った。

俺がこっちの世界に来る前にあったロングビルは守るために力が欲しいと言っていた。

もし、その守るものがこっちのロングビルにもあったのなら？

その人たちを悲しませる結果になるわけだ。

「さて君達は見事、破壊の杖を取り戻してくれた。また勇敢に立ち向かった敬意も評して君達にシェバリエの爵位の申請を王宮へ進言しておく。またミス・タバサには精霊勲章を申請することにしよう」
シェバリエの称号にルイズとキュルケが喜んだ。

タバサは特に喜ぶ様子はなかったが。

喜ぶ、ルイズが気が付いて俺を見るとオールド・オスマンを見る。

「あの、アレスには？」

「彼は貴族じゃないのでな。申請はしておらん」

「でも、彼は勇敢にフーケと対峙しました！ むしろ彼無しではフーケを捕まるのも難しかったと思います！」

俺には爵位の申請が無いということにルイズが反論をするが、俺はそれを手で制する。

「アレス？」

「僕のことはいいよ」

「でも……」

「ルイズの栄誉は僕の栄誉でもあるからさ。それに、そんなものが無くてもここにいる三人が知ってて来ればいいよ」

正直、今の立場でシェバリエの爵位を貰っても微妙なところだ。使い魔という立場だと何かと制限が付きまとうし。

「爵位は上がれんがの、アレス君には儂から褒美を出すことにしよう」

「お気遣い、恐縮です」

もともと報酬自体を期待していなかっただけにこれには素直に感謝する。

どのくらいか分からないが、多少なりともお金が入ればそれを資金に活動が出来るようになるのだ。

「さて、本日はフリッグの舞踏会じゃ。今夜は君達が主役でもある十分に着飾るが良い」

そうか今日はフリッグの舞踏会か。

向こうでは一年の時に踊った以来だ。

もつとも俺が参加できるかつてところもあるが。

ルイズ達はフリッグの舞踏会と言うことで表情が明るい。

「これにて解散じゃ。して、アレス君。君だけ残ってもらえんかの？」

「僕だけですか？」

「そうじゃ。さあ、後のものは部屋から去るのじゃ」

オールド・オスマンの言葉にルイズが不安そうに俺を見る。心配してくれているらしい。

こっちのルイズもなかなかいい子じゃないか。

「なあに、ちよつと話があるだけじゃ。心配することはない」

オールド・オスマンが砕けた感じで言うと、ルイズはキュルケたちと共に部屋を後にするのだった。

「コールベル君、君もじゃ」

「私ですか？」

頷くオールド・オスマンに彼は素直に従って部屋を後にする。
学院長室には俺とオールド・オスマンだけになった。

「それで、僕を残したのはなぜです？」

「グラモンの倅との決闘に関してじゃ」

さっきまでのお惚けな態度ではなく鋭い目つきで俺を見てくる。

歴戦の戦士を思わせる雰囲気だ。

「あれですか……」

「そうじゃ。アレス君、お主もしやルーンの力に気が付いておるんじゃないのかの？」

「ルーンですか？ どうしてそう思うんです？」

「わしもあの決闘を見ておつての。君のあの動きは普通のメイジの動きではなかったわ。メイジでありながら剣でゴーレムを切り伏せて圧倒したのはルーンの力ではないのかの？」

俺の目をじっと見て来る。

真意を確かめようというのだろう。

この目で見られたんでは嘘も簡単に見破られてしまいそうだ。

「そうです。僕はこのルーンの力を知っていました」

「知っておったじゃと？」

オールド・オスマンが身を乗り出して言う。

驚いたのだろうが、無理も無い。

「おぬしは、そのルーンが一体何なのか知っているのか」

「ええ。神の左手ガンダーヴ。あらゆる武器を使いこなしたという始祖ブリミルの使い魔のルーン」

「まさか、知っておったとは……」

椅子に深く座りなおしてオールド・オスマンは呟いた。

むしろ脱力したという雰囲気でもある。

「おぬしを引き止めたのはそのルーンについて話そうと思ったからじゃ。どうしておぬしにそのルーンが浮かび上がったのかは分から

んがの」

なるほど、ルイズが虚無だということは分らないのか。
好都合だ。このまま黙っていよう。

「それで、どんな話をするつもりで？」

「強力なルーン故、下手に周りに知られないようにして欲しいとい
いたかったわけじゃが……」

「そのことなら十分に配慮してます。さすがに王宮にでもバレたら
アカデミーで解剖しかれませんかからね」

そこまでは行かないだろうが、研究対象としていろいろと試され
そうだ。

「まあ、解剖は無いとは思うがの……。もし王宮にでも知れたら暇
な貴族達が戦争を起こすかもしれんからの。くれぐれも用心しても
らいたいのじゃ」

「分かりました。僕も戦争利用されたくありませんし」

「そうじゃの。ところで、そのルーンをどこで知ったのじゃ？」

当然、それを聞いてくるわな。

まあ、これについては本当のことを言ってもいいだろう。

「虚無について興味があつて調べたんです」

「ほう、だが君は確か……」

「実はもう一つのハルケギニアから来たのです。ここと良く似て異
なる世界から。始めの頃は下手にこの事を話すと危険人物として殺
されかねないと思い嘘を言いましたが」

「ふむ。確かに、君がこつちに来た時に今の情勢を尋ねられたの。

しかも認識がわずかに逸れていたのも覚えておる」

神妙な顔で俺を見てきた。

「はい。向こうのハルケギニアでは私は虚無について個人的に研究
をしておりました。その時にこのルーンについて知ったのです」

「なるほどな。そういうことじゃったか……。この事をヴァリエー
ルの娘は知っておるのか？」

「はい。一応話しております。口外するな、とも」

「あい、わかった。もう下がって良いぞ」

オールド・オスマンがそう言うと、俺は頭を下げて学院長室を後にする。

彼に話せたのは大きいかも知れない。

今後、何かあった場合にいろいろと助けてもらおうと思うのだった。

その後、俺はルイズの部屋に戻るとドレス選びを手伝わされてしまった。

どのドレスが今日にふさわしいかと尋ねてくるのだ。

一緒にドレスを見る中、向こうの彼女が一番お気に入りにしていた薄いピンクのドレスを見つけた。

向こうのルイズが確かカトレアさんから貰ったドレスで、彼女を慕うルイズにとっても思い入れがあるドレスである。

俺がそれを進めると、センスがいいと言って嬉しそうにそのドレスを手にした。

ドレスを決め終わると、俺はデルフリンガーを連れて部屋を後にした。

夜になり舞踏会。

女子生徒はまさに淑女の如く、男子生徒は紳士の如く各々に着飾って今日だけは誰もが主役と言う感じだった。

俺はと言うとバルコニーに出てそれを外から眺めていた。

「おう、相棒」

「相棒？ 僕のこと？」

寄りかかりながら中を見ているとデルフリンガーが声を掛けてきた。

自分で鞘から出てくるこの光景はある意味面白いな。

「お前さん以外、誰がいるんだよ」

「いや、見えない何かが見えるのかなって」

「つけ、連れね相棒だな」

俺の冗談が気に食わなかったのかふてくされるデルフリンガー。結構、いじり甲斐があるかもしれない。

「冗談だよ。で、何さ？」

「相棒はよ、パーティに出ないのか？」

「主人が来ないうちに一人で楽しんでたら悪いでしょ？」

「へえ。律儀な奴なんだな相棒は」

「今日くらいはね」

今日はルイズたちが主役でもある。

俺かもしれないが、今はあまりそういう乗り気がしない。

少しの間待っているとホールの華麗な扉が開き、ルイズが現れた。ピンク髪を後ろに束ねて、お気に入りのドレスに身を包む。

赤い絨毯の階段から降りてくるルイズはさすが公爵家の雰囲気を漂わせていた。

「ほう、飾れば綺麗なもんだな」

「デルフリンガー、彼女は元々の素材がいいんだよ」

階段から降りたルイズは周りの男子生徒が集まりだす。

あれだけ綺麗なら当然と言えるな。

「なんだ、相棒。惚れてんのか？」

「さあ、どうだろうね？」

かうような口調で言ってくるデルフリンガーに俺はどっちとも取れない返事をした。

「ホント、掴めねえ相棒だぜ」

「からかうからだよ」

面白くないというようにデルフリンガーは自分から鞘に入ってしまった。

いじけさせてしまったか。

後で謝っておこう。

「アレス！」

男子生徒の囲まれていたルイズが俺を見つけると、男子生徒に道

を開けてもらいながらこちらにやってくる。

俺の近くまでやってきたルイズはわずかな香水の香りを漂わせていた。

これも彼女のお気に入りの香水だ。

「アレス、あなたこんな所で何してたのよ？」

「いや、可愛いご主人様を待ってたんだよ」

「な、何を言ってるのよ！」

声を荒らげるも頬をわずかに染める。

こっちのルイズは褒められたりする事が無かったようだから照れているんだな。

「本当のことでしょ？ そのドレスだってとても似合ってる。何よりも君自身が綺麗だよ」

「……ばか」

完全に顔を赤くして俯くルイズ。

こんなルイズも可愛い。

顔を赤くしたまま再び俺を見てくる。

「ね、ねえ」

「何かな？」

「その、踊ってもいいわよ？」

視線をわずかにずれしながらルイズが言う。

踊ってもいいじゃなくて、踊って欲しいのだろう。

「さっき他の人たちのお誘いを断ってた見ただけど？」

「そ、それはそうだけど……」

「ちゃんと言ってくれないと分からないよ、ルイズ」

「う……」

俺と踊りたいんだろうな。

それを見越して言う俺は結構、意地悪いな。

向こうじゃこんなルイズが見れなかったから楽しんでるんだな。

ルイズは顔を赤くしながら覚悟を決めたように俺を見ると、それまで緊張した雰囲気が一気に消えた。

「もう、今回は特別だからね？」

スカートの端を両手で摘んむと、ルイズは優雅にダンスの申し込みをする。

「わたくしと一曲踊ってくださいさらないこと。ジェントルマン」

「私めでよければお相手致します」

ルイズの手を優しく取る。

手を取り合ったまま、ホールに入ると俺達は踊り始めるのだった。

- - - - -

ルイズのドレスがカトレアのドレスと言つのは独自設定です。

第十話（後書き）

お待たせしました。

こちらは二ヶ月ぶりの更新です。

第十一話

燃える第三大隊のキャンプで黒い仮面の男と対峙していた。偏在で五人になった黒い仮面の男が笑いながら俺の方へと向かってくる。

俺はといえば、身体が動かない状態だった。動きたいのに動けない。

黒い仮面の男の一人がレイピアを構えながら俺を見据えている。そして何故か、仮面に手を掛けて素顔を晒すとレイピアで俺の胸を貫いた。

掛かっていた上掛けが跳ね上がって、俺は身体を起こしていた。息が荒く、汗がひどい。

身体中から汗が吹き出ている。

「夢……か」

周りを見ると、ここはルイズの部屋だった。

当たり前だ。ルイズの部屋で寝ていたんだからな。

ここに黒い仮面の男は当然居ない。

ふと外を見ると二つの月明かりが窓から差し込んできている。

まだ夜中のようなだ。

両手を見るとわずかに震えがあった。

夢に出てきた黒い仮面の男。

その素顔を何故か奴は晒してきた。

夢の中で見た奴の正体をはっきりと覚えている。

黒い仮面の男は。

「ワルド子爵だった……」

そう。夢の中の黒い仮面の男はワルド子爵だったのだ。

夢とは言え、よりにもよってなぜ彼が黒い仮面の男として現れた？ トリステインの魔法衛士隊グリフォン隊の隊長だぞ？

だが……。あの男の動きは確かに魔法衛士隊と似ていた。
記憶の中の彼と黒い仮面の男の背丈も一致する。

「そんな馬鹿な……」

俺は頭を振りながらその考えを振り払った。

本当にそうだとしても、今はこつちの世界にいるんだ。

今の俺じゃどうしようもない。

「すっかり目が覚めたな」

俺は完全に起き上がる。

目が冴えてしまつて寝るにも寝られない。

「相棒、こんな夜中にどうした？」

「デルフリンガー、起きてたのか」

「ああ。つてか、お前さんしゃべり方がまるで別人だぜ？」

「はあ。デルフリンガーには言つてもいいか。これが本来のしゃべり方なんだ」

誰も聞いていないと思つていたのと夢を見たせいもあるんだろう。

ついつつかり本来のしゃべり方をしていた。

「へえ、いつものお坊ちゃん風よりいいじゃねえか」

からかうように言うデルフリンガー。

俺は小さくため息を吐きながら言う。

「いつもはお坊ちゃん風を装っているんだ」

家系が家系だけにしゃべり方も気をつけていたに過ぎない。

向こつちの世界じゃ、ノルンしかこのしゃべり方は知らないくらいだ。

「猫かぶりだつたわけか」

「そんなところだな」

俺はふとルイズの方を見る。

下着が見えないネグリジエを着てベッドで幸せそうに寝ていた。

散々俺が男である事を認識させたため、寝るときのネグリジエも今では下着が見えない程度生地の厚いものを着るようになった。

貞操教育も上手く誘導できていると思う。

それはともかく、だ。

デルフリンガーに猫かぶりと言われて改めて思う。

こっちのルイズは本来の自分が曝け出せないまま随分と自分を抑圧しているなと言うことだ。

誰からも理解されず、頼る人間も皆無に近い。

唯一の理解者も実家に戻らないと居ないんだからな。

俺はルイズの頬を軽く触る。

「ん……」

わずかにルイズの口から声が漏れる。

何か夢でも見ているんだろうか？

相変わらず幸せそうな寝顔のままだ。

気持ちよく寝るルイズの柔らかな頬を感じながら優しく撫でて手を離す。

「なんだ？ 相棒、まさか夜這いを掛ける気か？」

「まさか。ルイズの寝顔を見てただけだ」

軽く笑い飛ばす。

確かに寝ている女の子に手を出すというシチュエーションは魅力があるが、それではただの節操なしだ。

据え膳喰わぬは男の恥とも言うが。

「さて、俺は寝られないからちよつと外に行ってくる」

「相棒、俺は置いていくのか？」

「戦いに行くわけじゃないからな」

俺はそういつてデルフリンガーに手を振りながら部屋を後にした。

外に出ると壁に寄りかかって上を見上げる。

二つの月がやや重なっていて、周りにはかなりの数の星が光っていた。

少し冷たい風が吹き、熱くなった頭を冷やされる。

すると夢のことが急に頭の中で回りだした。

「全く偶然じゃないんだろうな……」
何となく呟いて見る。

ワルド子爵は意志が強い貴族だ。
実力だけで言うなら子爵と言う立場で終わる人間じゃない。

「だからと言って、彼が裏切り者だったと？」

自問するが答えが出るわけでもない。

俺が駆けつけた時、子爵は爆発に巻き込まれて負傷していた。
普通に考えれば自分を負傷させるメリットはあまりない。

ただし、俺がウェールズと話していた時に内通者のあぶり出しに
勘付かれていたならば話は別だ。

それならば自分を負傷させて対象から外させることも可能だ。

「まさか、こんな形でワルド子爵を疑うとは」

たかが夢だと笑っていられるならいい。

こう何故だか、嫌な予感がしてならないんだ。

向こうの世界に帰ることはほぼ不可能。

だと言うのにこんな感覚はきつとこっちの世界に関係するんだ
ろっ。

そもそもが俺の知っているワルド子爵とこっちのワルド子爵がイ
コールにならない。

こっちと向こうでは似ているようで違うのだから。

ルイズだって魔法が爆発するのは同じであっても状況が違う。

こっちのルイズはまさに“ゼロのルイズ”であった。

薬学の知識も無く、プライドばかりが高かった。

本質が同じでも環境が違っただけに辿った道がだいぶ反れたよう
だ。

こうした事からワルド子爵のことを考え直さないとならないのだ。
それにワルド子爵はスクウェアアクリスのメイジ。

偏在だって使える。

後はワルド子爵自体が、野心的な思考を持っていることだって知
っていた。

向こうの彼は俺に語ったことがある。

僕はこのままでは終わるつもりなんて無い、と。

ただの子爵で終わるつもりが無かったからこそ魔法衛士隊の隊長まで上り詰めたんだ。

俺がいるのといないとでの違いにどこまで差があるか分からない。念のため、こっちの世界のワルド子爵にあつた時は気をつけた方がいいだろう。

後は彼の情報を仕入れるしかないな。

考えが纏まると俺は部屋に戻ることにした。

翌朝。

日の光に俺は目を覚ました。

今日も外はいい天気のようにだ。

俺は起き上がると、敷いている布団を畳んで端に置く。

それからまだ気持ち良さそうに寝ているルイズを起こすことにする。

「ルイズ、朝だよ。起きないと」

「う……」

小さいうめき声。

まだ寝たいという感じだが、あまり寝かせていると朝の支度に支障が出てしまう。

「ルイズ、起きなつて」

「ん……」

何度が揺らすか、どうやら起きる気がなさそうだ。

「ルイズ、遅刻してもいいのかい？」

「……」

良くないんだろうが、どうも眠気の方が上のようだ。

ルイズは黙ったまま上掛けを更に引き寄せた。

「ルイズ……。起きる気ないの？」

「もうちょっと……」

ベッドの中でもぞもぞと動きながら答えてくる。
もう起きているんじゃないか。

「もうちよつと寝て、苦勞するのはルイズだよ？」

「いいもん」

「あのね……」

小さいため息一つ。

これじゃ子供じゃないか。

ベッドの中で丸くなっているルイズは子猫のようでもある。
全く、最近こういう事が多いんだよな。

「仕方ないな」

俺はそう呟くと上掛けを掴んで一気に奪い取った。

上掛けを奪い取ると、丸くなっているルイズが現れた。
ネグリジエが捲くりあがって尻が丸出しになっている。

まあ、下着は着ているけど。

「ちよ、ちよつと！」

上掛けを奪い取られたルイズが慌てて起き上がる。

ネグリジエが捲くりあがっているのに気が付くとネグリジエを抑
えて俺を睨んできた。

「な、何すんのよ！」

「ルイズが起きないからだよ」

「だからって上掛け取ることないじゃない！　そ、それに、し、下
着だつて見えちゃったじゃないの！」

赤い顔をしながら言うが、大したお咎めはない。

まあ、ちよつと得した感じだ。

「見られて困るなら明日からちゃんと起きるように」

「何よそれ！」

「あのね、ここ最近ずっとこんな風に起きるの遅いんだよ？　今日
だってあと少し寝かせててごらんよ、支度の時間なくなってるよ？」

「で、でも……」

「でも、じゃありません」

俺がぴしゃりと言うと、うなりながらも起き上がった。

それからちらりと俺を見る。

「着替えるから外に行つてよ」

「分かった。着替えたら呼んで。その髪直さないとならないでしょ？」

「うん」

俺はドアを開けて廊下に出ると、待つことにした。

廊下はすでに生徒達が食堂へと向かっている。

朝食まではまだ時間はあるが、早い生徒ならもう食堂へと向かう時間だ。

ちよつとしたお菓子と紅茶くらいはすでに用意されているから女子生徒は先に行つておしゃべりをする。

ルイズは友人が少ないためにあまり食堂には早く行かないらしい。「アレスさん！」

廊下でルイズを待つっていると、知った声で呼ばれたので振り返る。そこにはシエスタが大きな籠を持ってこちらの方に歩いてくるどころだった。

「シエスタ、おはよう」

「おはようございます！ ミス・ヴァリエールは着替え中ですか？」
シエスタとは廊下に立っているところを出くわす事が多い。

そのため、こうして廊下に立っていると必然的にルイズが着替え中だと分かる。

「そうだよ。シエスタはシーツの取替えかな？」

持っている籠にはシーツが詰まっている。

恐らく生徒達のベッドを取り替えている最中なのだろう。

「はい。この後、お昼までに新しいのを敷き直さないとならないんです」

「毎日、大変だよな」

「いいえ。これくらいなんて事ありません。洗濯の方が大変です」

籠を下に置きながら苦笑いを浮かべて答える。

確かに洗濯機でもあれば洗濯も楽なんだろうけどな。

「あ、そう言えば、お礼まださせて貰っていないですよ?」

思い出したようにシエスタが言う。

ギーシュとのいざこざがあった時にお礼をさせてくれと言われていたな。

「ごめん、うつかりしてたよ」

「早くお礼したいんで、今決めてもらってもいいですか?」

笑顔を向けられてそう言われるとまた今度とは言いにくい。

今、決めるのか……。

何が良いだろうか?

俺としてはお礼はなしという選択岐もあるんだが、それだと納得してくれないだろう。

「わたしに出来る事なら何でもするんで、遠慮なく言つて下さいね」
何でもって言われても本当に何でもさせるわけには行かないよな。
俺としてはこう男の醍醐味ってのを味わってみたいところだけど、それは良心が痛む。

となると、オーソドックスに行くかな。

「それじゃ、今度の休みの日に街まで出かけない?」

「そんなのでいいんですか?」

意外そうに言う。

一体この子はどんなお礼をすることを望んでいたんだろうか?

「もちろん、やっぱり僕も男だからさ。可愛い女の子とデート出来ると嬉しいんだよ」

「そ、そんな、か、可愛いだなんて……」

顔を赤くして俯くがまんざらでもなさそうだ。

可愛いと言われて嫌がる女の子なんてそうそう居ないからな。

「どうかな? 一日僕とデートしてくれると嬉しいんだけど」

「分かりました! じゃあ、次の休みの日は空けておきますから一緒に出かけましょう!」

嬉しそうに言われるとこっちも嬉しい。

デートで何をするかまでは伝えていないんだけどな。

「それじゃ、楽しみにしてる」

「はい！ あ、それじゃわたし仕事に戻りますね」

少し立ち話が過ぎたか、シエスタは籠を持ち上げると去っていった。

こっちのシエスタも元気のいい子だよな。

去っていくシエスタを見送っていると、背後に何故か寒気を感じた。

振り向くと、ドアを開けたルイズがこっちを睨んでいるじゃないか。

「ふーん、ご主人様を放っておいてあんたは女の子とデートの約束なんてしてるのね？」

怒っているのが明白だ。

だが、怒られる筋合いは無い。

別にシエスタと付き合っているわけじゃないし、俺は彼女の希望を叶えてあげたに過ぎないんだ。

お礼をさせてあげるとい希望を。

「あのね、シエスタには前からお礼をさせてくれって言われてたんだよ？」

「断ればいいじゃない」

不機嫌そうに言うが、ごもつともだ。

俺も断るとい選択はないわけではなかった。

しかし、だ。

「そんなことしたら彼女に申し訳ないでしょ？」

お礼をしたいと言う彼女の欲求を断るのはさすがに気が引けるつてもの。

とは言え、そんなのが目の前のルイズに通じるわけもなく。

「関係ないわ。いいこと？ アレスはわたしの使い魔なのよ？ ご主人様の許可もなく勝手にデートの約束なんて認められないわ」

「あのねえ……」

小さいため息をつく。

こちらのルイズもどうやら相当嫉妬深いようだな。

俺のことが好きなのかどうかは別にして自分が一番近いのに、自分を差し置いて他の人間を誘ったのが面白くないんだろっ、おそろくは。

ここで俺は視線を感じ周りを見る。

すると、食堂に向かう生徒達がこそそと話をしながら俺達の前を通り過ぎていくではないか。

小さいながらも、「やーね、二股かしら」とか「ヴァリエールも結構やきもち焼きね」などの声が聞こえて来る。

どうやらちよっと目立ってしまっているようだ。

「ルイズ、中に入るよ」

俺はルイズの手を引いて部屋の中に入るとドアを閉めた。

「離さないよ!」

「はいはい」

俺から逃れようとするルイズの手を離してやる。

「きゃ!」

思いつきり手を引いたタイミングで手を離してしまったらしくそのまま倒れそうになってしまう。

俺は再度、ルイズの手を掴むと自分の方に引き寄せた。

「危ないじゃないか」

そう声をかけると、今度は突き飛ばされる。

突き飛ばされると言っても俺とルイズじゃ体格も違うため、ルイズが必然的に離れる感じになった。

ルイズは俺の顔を見ると大声を上げる。

「あんたのせいでしょ!」

どうやら相当腹が据えているようだ。

「ルイズもあんな思いつきり手を引くからだよ」

「あんたが手を掴まなければ良かったの!」

「はあ、分かったよ。僕が悪かった」

「ふん、分かれればいいのよ。で、さっきのメイドとのデートも禁止よ！」

「悪いけど、その命令は聞けないな」

「何でよ！」

「約束したからだよ。それにお礼のためのデートだよ？ まさかと思うけど焼きもちを妬いてるのかい？」

「な！」

瞬間湯沸かし器のように顔が一気に赤くなる。

それから恥ずかしさと怒りの表情で言い放ってきた。

「べ、別に焼きもちなんて妬いてない！」

両手に握りこぶしを作りながら言われてもな。

「本当に？」

「誰が、あんたなんかに！」

「じゃあ、僕が他の女の子と一緒にいても構わないんだね？」

「か、構わないわよ！ あんたが誰と一緒にしてもわたしには関係ないわ！」

やれやれさつきはご主人に許可なくデートは禁止とか言っておきながら、今度は関係ないか。

これじゃ、まるつきり子供じゃないか。

「ルイズ」

俺はルイズを思いっきり引き寄せると抱きしめた。

一瞬、ルイズは何が起こったのかわからなかったようだが、すぐに俺の胸の中で暴れだす。

「ちよつと、やめてよ！ 何する気よ！」

「抱きしめてるだけだよ。とりあえず話を聞いてもらうかなと思つてね」

「あんたの話なんて聞きたくない！」

首をいやいやと横に振る。

子供が我がままを言っているような状態だ。

「ルイズ、下らないプライドは捨てないとダメだよ」

「下らないプライドって何よ！」

「本当はさ、自分を見てもらいたいんでしょ？ それを感情に流さ
れて放棄したらダメだ」

「か、関係ないわ！」

「いいや、関係あるね。僕は確かにルイズ以外の女の子と仲良くし
たりしてるけど、ルイズを放っておいているつもりはないんだよ？」

「うるさい、うるさい、うるさい！」

大声を上げて駄々をこねるが俺は続ける。

「僕は君を大事に思ってるんだ」

「そんなの嘘よ！ じゃあ、どうしてわたしの言うことを聞いてく
れないの！ わたしがいやだって事どうしてするのよ！」

「ルイズ？」

感情に任せて言った言葉にルイズは息を呑むのが分かる。

急にルイズはおとなしくなった。

やっぱりルイズは寂しいのだろう。

だから、こういう事を言ってしまったのだと思う。

「ねえ、ルイズ。僕は君のことが一番大切なんだよ？」

「……」

「最初、君は僕の前で着替えようとした。僕がルイズの事を何とも
思わなければそれを受け入れなかったと思う。使い魔と言うのに甘
んじて君の身体を堪能しただろうからね」

「最低ね」

「ごもつとも。で、フーケの件もルイズを大切に思わなかったら見
捨てることも出来た。たとえ君が死んでも事故で済ませることが出
来たからね？」

さすがにそれはしなかったとは思うものの、全くありえない話し
やない。

「ひどい使い魔もいたものね」

本気で俺がそんなことをするとは思わないのか、それだけしか言

わなかった。

「でも、それらをしなかったのはルイズが大切だからなんだよ」

「都合のいい事ばかり」

「ルイズにとつて都合がいいことの方がいいでしょ？ だからたとえ、シエスタとデートしてもルイズのことは大事にし続けるから。僕達は主人と使い魔という関係でもあるんだし、仮に君が結婚してしまっても僕は君の側から離れるつもりはないよ？」

「……分かった。もういいから離して」

解放してやるとルイズは不機嫌そうな表情でありながら顔を赤くしていた。

「今の話、嘘だったら承知しないわ」

声こそ不満そうに言うものの、一応理解してもらえたようだ。

「もちろんさ。男に二言はないよ」

「どうかしらね。はあー、あんたとこんなやり取りしてから時間なくなっちゃったじゃない」

確かにルイズとのやり取りに時間を掛けすぎて時間がなくなってしまった。

髪を整えないとならないのに、そろそろ朝食の時間が終わってしまっ
まう。

「とりあえず急いで髪を整えるからルイズ、椅子に座って」

「分かった」

素直に座るルイズ。

俺は彼女のブラシを手にとると寝癖の付いた髪を整え始めるのだ
った。

結局、ルイズは授業に遅れる形で出席することになった。

俺は授業には参加しないため、広場で適当に時間をつぶしていた。
本当は新しいコモンスペルの構想を考えようと思っていたんだが
……今はそんな気分になれない。

俺のせいだったとはいえ、まさかルイズがあそこまで荒れるとは

思わなかったんだ。

少し気を抜きすぎていたのかもな。

こっちのルイズは余裕がある子じゃないんだから。

「とは言え、嫉妬深いのも困ったもんだ」

「誰が嫉妬深いんですか？」

その声に振り向くと、シエスタがいた。

持っている籠に何も無いのを見ると仕事が一段落ついたのだろう。

「シエスタ、仕事は終わったみたいだね」

「はい。それでたまたまアレスさんを見かけたんで。それで誰が嫉妬深いんですか？」

「いや、ルイズがね君とデートするつてのを聞いて嫉妬してさ」

「ミス・ヴァリエールがですか？」

シエスタは首をかしげながら尋ねてくる。

「そうだけど、どうしたんだい？」

「いいえ。ミス・ヴァリエールが嫉妬するようなお人に見えないものですか」

「あの子はあれで、精神的な余裕がないんだよ」

普段のルイズは出来るだけ人と関わらないようにするような生活を送っている。

一番の理由は彼女が虐げられているからだ。

前に聞いた話では授業が終われば一人で図書館に行き、魔法書を借りては部屋で勉強と言う生活だったらしい。

友達と言える程の中の人間はいない。

だからひたすら勉学に時間を費やしてたんだ。

そんな姿を見れば誰かに嫉妬するようには見えなかったんだろう。

「そうなんですか？」

「そうなんだよ。彼女の二つ名を知ってるかい？」

「はい……」

答えにくいという風に答える。

確かに“ゼロ”と言う二つ名はシエスタのような立場の人間は口

に出にくい。

「ルイズは常に必死なんだよ。最近こそ少し余裕が出てきたけどやっぱり今までが余裕がなさ過ぎて感情のコントロールが上手く出来ないんだ」

「わたしには難しいことは良く分かりません」

「まあ、彼女は知識がある子供みたいなものだと思うってつくればいい」

本当に甘えたい時期に甘えるものがあまりなかった。

それがゆえに彼女の心は意固地になってしまったのだろう。

俺も認識を改めて変えて彼女への接し方を変えないとならない。

「ん？」

俺はなにやら外が騒がしくなったのに気が付いた。

「何か騒がしいですね」

シエスタもそういうと騒がしい方向をしてみる。

授業中のはずなのに生徒達が外にぞろぞろと出て来ていた。

そして何やら整列し出している。

「シエスタ！」

「え？」

シエスタが声の方向を向くと恐らく先輩メイドと思われるメイドが立っていた。

「これからアンリエッタ姫殿下がいらつしやるらしいわ。大急ぎで歓迎式典の準備をしないとならないからあなたも手伝って頂戴」

「アンリエッタ姫殿下がですか！」

シエスタは驚いたように声を上げる。

俺もアンリエッタが来ると聞いて驚いた。

普通、アンリエッタのような要職の人物は前もって連絡を入れてくる。

何か急のような気がするが一体なんだろうか。

「アレスさん、すみません。また今度お話ししよう」

「そうだね。仕事頑張って」

「ありがとうございます！」

シエスタは俺にお辞儀をすると先輩メイドと共に去っていった。

俺はというと外に出てきた生徒の中からルイズを探すことにするのだった。

第十一話（後書き）

お久しぶりです。

一ヶ月ぶりの更新になります。

この話より小説本編第二巻相当の話がスタートになります。

第十二話

正門に集まりつつある生徒達の中から俺はルイズを探し出すと声をかけた。

「ルイズ」

俺の声にルイズが振り向くと一瞬顔が明るくなるが、すぐに不機嫌な顔になる。

「探しに来るのが遅いんじゃないの？」

「そう？」

「そうよ。今度からはもっと早くわたしを見つけなさい」

不機嫌ではあるものの、それはわたしの側に出来るだけ居なさいと言っているようにも聞こえた。

「今度から一緒に授業出ようか？」

「いい心がけじゃない。そうしなさい」

「わかったよ」

素っ気無く言っているつもりなんだろうが、何となく声に弾みを感じられる。

素直じゃないけど、まあ可愛いもんだ。

「アンリエッタ姫が来るんだって？」

「そうよ。姫様がここにいらっしやるの。だから今日は授業は全部中止だって」

「良かったじゃないか」

「姫様が来るのは嬉しいけどね。ところでアレスは何してたのよ？」
「ちらりと俺を見ながら尋ねてくる。」

「気になる？」

「別に……」

言葉と態度が逆だった。

別にと言ったのにも関わらずそわそわした態度をしている。
まあ、隠すほどのことじゃないので素直に話すことにした。

「そう？ 広場でちよつと考え事をしてたんだよ」

「考え事？」

「そう、君の事を考えてたんだよ」

真剣な表情でルイズを見る。

ルイズは顔を赤くしてそっぽを向いてしまった。

「わ、わたしの何を考えてたのよ」

「君をどうしたらもつと大切に出来るかなってね？」

周りに人がいるのもお構いなく、俺はそつとルイズを引き寄せた。肩が触れるくらいの距離だ。

慌てたルイズが講義しようとするが、その前に耳元に顔を寄せていう。

「騒ぐと周りから変に思われるよ？」

「っ」

あまり目立つのは良くないためルイズは大人しく俺と密着した感じになった。

何人かの生徒が俺達を横目で見てくるが、これからアンリエッタが来るのもあるのか特に何も言ってこない。

「あんたって女つたらしよね」

「ルイズが可愛いからいけないんだ」

「ふ、ふん。可愛いのは当たり前よ」

強がっては居るが動揺しているのが良く分かる。

さて、甘いムードはこのままでワルド子爵について聞こう。

「あのさ、ルイズ。君はたしかワルド子爵と婚約してたよね？」

「そうね。向こうのわたしもワルド様と婚約してたの？」

確認するかの様に聞いてくる。

だから、俺はそのまま頷いて答えた。

「そうだね。で、僕は向こうのワルド子爵は知っているんだけど、こっちのワルド子爵ってどんな人？」

「わたし、ワルド様のこと良く知らないわ。魔法衛士隊で隊長、優しかったことくらいしか……」

そういつとルイズは俯いてしまう。

自分の婚約者なのに良く分からないからだろうか？

「ルイズ」

ルイズの肩に手を乗せようとした時、学院の入り口の方で大きな声が聞こえて来た。

「トリステイン王国王女、アンリエッタ姫殿下のおなーりー！」

マザリーニ枢機卿が馬車から現れて、一瞬生徒達が鼻をならした。その直後に、馬車から出てきたのは白い服に身を包んだアンリエッタだ。

マザリーニ枢機卿がアンリエッタの手を持ち、優雅に馬車から降りてきた。

「姫様……」

ルイズは懐かしそうにアンリエッタの方を見ている。

それから何かに気が付いたように息を呑むのが分かった。

「ルイズ？」

「ワルド様……」

ルイズの言葉に俺はルイズの視線の先を見る。

グリフォンに跨がり、まさに紳士と言うにふさわしい程の身のこなしをしたワルド子爵がそこにはいた。

警護で来たのだろう。

さすが隙がない。

「こっちのワルド子爵もやはり一流の戦士だね」

「当たり前よ。トリステインの魔法衛士隊の隊長だもの」

「しかも、グリフォン隊の隊長。僕も彼には憧れるよ」

「ふーん。アレスでもワルド子爵は憧れるのね」

「まあね」

スクウェアクラスで遍在を操り、トリステイン一の武芸を持っている。

攻守共に申し分なく、単独での戦闘能力はハルケギニアでも屈指だろう。

その強さには憧れるものだ。
しかし。

しかしだ。今日の夢が何かの警告だとするなら、俺はワルド子爵を全面的に信用するわけには行かない。

彼の真意が分かるまでは様子を見るしかないのだろう。

とは言え、俺が彼と対等に話をする機会がない。

俺はあくまでルイズの使い魔なんだ。

そう思うと、いかに向こうの世界が自分にとって都合が良い環境だったかを実感するのだった。

夜。

歓迎式典も終わり、俺とルイズは部屋に戻ってきていた。

ルイズは何か考え事をする事が多く、どうも式典では元気が無い状態だった。

ベッドに倒れこむと、小さいため息がルイズの口から漏れる。

「さっきからどうしたのさ？」

「ワルド様、とても凛々しかったでしょ？」

「そうだね。そんな人がルイズの婚約者なんだから凄じくないか」

「そうなんだけど……。ワルド様、本当にわたしの事婚約者だっと思っているかしら？」

ベッドの上で丸くなりながら切なそうに言う。

「どうということさ？」

「だって、とても格好いいんだもの。わたしみたいな子じゃなくても他にいくらでも綺麗な女性は居るわ」

胸もないし、背も低し、と呟く。

恋する少女と言うわけか。

可愛いじゃないか。

俺が知っているルイズは俺にべったりだったが、こういう恋するルイズを見るのもいい。

「僕が居た世界では変わらずルイズを思っていたよ。数年ぶりの再

開でも君を大事に思っていた」

向こうのルイズは俺と婚約している関係上、ワルド子爵とは親しい知り合いくらいになってしまっている。

それでもやはりルイズの事を思うのは変わらなかった。

戦争に行くのも反対してくれたしな。

「それはあなたの世界でしょ？ こっちは分からないわよ」

「そうかい？ でも、少しは自信持たないと」

「持てないわ。わたし、魅力ないもん」

いじける様にシーツを掴む手に力が籠る。

もどかしいのだろうが、全く。自分の魅力くらい気が付けって言いたい。

「そんなことないよ」

俺はそういいながらルイズが寝ている隣に座った。

それから優しく頭を撫でる。

「子ども扱いしないで」

「子供じゃないさ。立派な女性だよルイズは」

そう言いながら徐々に顔へと撫でる場所を変える。

ルイズは睨みながらも抵抗はしない。

「いやらしい手つきね」

「でも、抵抗しないよね？」

ルイズの顎に指を当てて、くいつと顎を持ち上げる。

寝ているルイズに俺は顔を近づけた。

「このままキスしたくなるくらいルイズは魅力的だよ？」

「よくも、そんな恥ずかしいセリフを言えるわね」

憎まれ口こそ叩くが、逃げようとしなない。

俺は逃げないルイズの顔に息が掛かるくらいまで顔を近づけた。
顔を赤くして、目を背けるルイズ。

「可愛いね」

「うるさいわね……」

「キス、するよ？」

「か、勝手にすれば」

ぎゅっと目を瞑ったルイズを微笑ましく思いながらゆっくりと唇を合わせようとする。

その時、部屋のドアが規則正しく鳴らされた。

長い間隔で二回、短い間隔で三回だ。

この叩き方は……。

「っ！」

ルイズは、はっとして飛び跳ねるように俺から離れる。

顔が真っ赤をしながら俺を睨んだ。

「拗ねない、拗ねない」

「べ、別に拗ねてないわよ！」

照れ隠しなのかどうかドアの方へと歩いてく。

ドアを開けると、そこには黒い頭巾を被った女性が立っていた。

「あなたは？」

ルイズの問い掛けに女性は口元に指を当てながら部屋に入った。

それから杖を取り出す。

掛けた魔法はディテクト・マジックだ。

俺はディテクト・マジックを掛けた女性　アンリエッタに苦笑いをしながら答える。

「耳や目はありましたか？」

その言葉に驚いたようにこちらを向くと、勢いで頭巾が取れる。ぽすつと音を立てて床に落ちる頭巾。

「姫殿下！」

ルイズは女性の正体に慌ててひざまつく。

アンリエッタは今度はルイズの方を向いて

「ああ、ルイズ！　懐かしいルイズ」

「姫殿下、このような下賤な場所にお越しになれてはいけません」

「ああ、ルイズ！　そんな堅苦しい行儀はやめて頂戴！　あなたとわたくしはお友達じゃない！」

「姫殿下！　もったいないお言葉です！」

「やめて！ ここには枢機卿も母上もわたくしを利用しようとする宮廷貴族もいないのですよ！ ああ、もうわたくしには心を許せる友達はいなのかしら？ ルイズ、あなたにまでよそよそしい態度を取られてしまつてはわたくし生きていけないわ！」

「姫殿下……」

それから俺がいる目の前で二人の世界に入つていつてしまった。

俺はとりあえず、アンリエッタがここに来た事を考えていた。

しかし、全然思い当たる事がない。

こつちの政治の状況は知らない。

せいぜい、アルビオン国内の戦争に関与せずに来てアルビオンが滅んだ後はトリステインというくらいだ。

考え事していると俺はアンリエッタに声をかけられた。

「ルイズ、あの方は誰なのですか？」

懐かしがつっていた表情から一転して厳しいまなざしを向けるアンリエッタ。

「僕ですか？ ルイズの恋人です」

ルイズに歩み寄るとそのままルイズの肩を抱く。

一瞬ルイズは顔を朱に染めるが、次の瞬間突き飛ばした。

「う、自惚れるんじゃないわよ！ わ、わたしはあんたを恋人にした覚えはないわ！」

目の前にアンリエッタがいるのもお構い無しに大声を上げる。

「あれ？ でも、さっきまでキスする寸前だったのに？」

「あ、あ、あれは、その……、キ、キスぐらいなら許そうと思っただけよ！」

「恋人でもないのに？」

「う……な、なによ！ だったらキスなんてしようとしなないでよ！」
少し涙目で叫ぶルイズ。

ちよつとからかい過ぎたな。

「ごめん。でも、君はそれくらい魅力があるんだからね？」

そう言いながらルイズの頭を優しく撫でた。

「子供扱いはやめてって言ってるでしょ」

口ではそう言うものの大人しく撫でられるルイズ。

「ルイズ？　そ、それでこの方は？」

やや引きつりながら尋ねるアンリエッタ。

「あ！　す、すみません！　彼はアレスと言ってわたしの使い魔です」

「つ、使い魔ですか？　彼は人間のようにしか見えませんか？」

アンリエッタが驚いたように俺を見る。

上から下までさつと流して見たようだが、人間には変わらない。

「真正正銘の人間ですよ。姫殿下」

「そうですか……。驚きました。人が使い魔なんて聞いたことありませんでしたから」

「僕もですね。まさか自分自身が使い魔になろうとは思いませんでした」

こっちの世界に呼び出された事の方が俺としては驚きだ。

死んだはずがもう一度命を与えられて何の因果かこっちの世界のルイズの使い魔なのだから。

「それであなたに聞きたいことがあるんですけど、いいでしょうか？」

疑いの眼差しで俺の方を見る。

さっき不用意な言葉を言ったからだろう。

「どうぞ」

「あなたは耳や目がないといいました。どうしてわたくしが耳や目を探っていると分かったんですか？」

鋭い目つきで俺を見る。

俺が怪しいものかどうかを知りたいのだろう。

「簡単ですよ。人の部屋に入ってディテイクト・マジックを使う理由は二つしかありません。

即ち、部屋に罠が仕掛けられていないか、マジックアイテムなどによる情報の漏洩がないかの二つですね。

だから、私は殿下に耳や目はありましたか？ と聞いたのです」

アンリエッタは感心と驚きの感情を表して言った。

「鋭い洞察力なのですね」

「生きるために必要だった。それだけです」

政治に関わる事が多かったからこそでもある。

マザリー二枢機卿やヴァリエール公爵と会って政治的な話をする際は良くやっていったことなのだ。

それで見つけたマジックアイテムなども少なくなかった。

「そうですか。わたくしの疑問は晴れましたわ」

「それなら良かったです」

俺が笑顔で答えると、アンリエッタも釣られて笑顔を返してくる。

「姫様。そう言えばどうしてわたしの所へ？」

ルイズはアンリエッタに尋ねる。

するとアンリエッタは少し表情が硬くした。

話しにくいことなのか？

それとも俺がいるからだろうか？

「席外しましょうか？」

俺の問いにアンリエッタは少し考えてから首を振った。

「あなたにも聞いてもらった方がいいかも知れません」

真剣な表情でアンリエッタはルイズの方を見る。

ルイズが小さく頷くとアンリエッタが口を開いた。

「……。わたくしはお友達にとんでもないお願いをしに来たのかも知れません」

この時点で俺は、小さく魔法を唱えて周囲を警戒した。

いくら目や耳がないと言っても盗み聞きされる可能性がある。

まあ、言ってみれば念のためだ。

「何ですか、姫様？ わたしに出来ることなら何でも言っして下さい

！」

「ルイズ……。わたくし、結婚することになったの」

沈んだ声で言うアンリエッタ。

とてもめでたい話ではないのが分かる。

ルイズも一瞬驚くもアンリエッタの様子に表情を曇らせた。

「姫様、その結婚は良くないものなのですね？」

「同盟のためとは言え、ゲルマニアに嫁ぐの」

「ゲルマニアに！」

ルイズが大声を上げて驚く。

当然だ。

トリステインはゲルマニアを野蛮な国と罵っているからだ。
しかし、皮肉だな。

今のトリステインにはレコンキスタと戦えるだけの戦力は無い。
ゲルマニアの戦力を充てにするためにアンリエッタがゲルマニア
に嫁ぐことになるのだろう。

「ええ。そうよ。礼儀知らずのアルビオン貴族に対抗するためには
こうするしかないの」

「そんな……姫様も心に思う方がいらっしやるはずなのに……」
悲しそうに俯くルイズ。

アンリエッタはそんなルイズに寂しそうな笑顔を浮かべて言う。

「いいのよ、ルイズ。好きな方と結ばれることが無い事くらい物心
が付いた時から諦めていたわ。それよりも、アルビオンは今トリス
ティンとゲルマニアが同盟を結ばないようにするため婚姻の妨げに
なるものを探しているの」

最後の方を俯いて話した。

アンリエッタの婚姻を妨げるものがあるのだろうか。

「まさか、姫様……妨げるものがあるのですね？」

「おお、始祖ブリミルよ……。この不幸な姫をお救い下さい」
顔を両手に当てると床に崩れ落ちた。

何というか、こっちのアンリエッタは演技派のようだな。

ルイズはこんなアンリエッタを見たら……。

「姫様！ わたしに言って下さい！ ご婚姻を妨げる材料とは何の
ですか！」

ほら、このとおりだ。

基本的にルイズは優しい。

だからこんな落ち込んだアンリエッタを見たら助けたいと思うに決まっているさ。

アンリエッタ、まさかとは思うがルイズを利用しようと思っていだらうな……。

「……わたくしがウェールズ様に宛てて書いた手紙ですわ」

ルイズは小さく声を上げた。

男に書いた手紙。

それを何を意味するのか分からないほど子供じゃない。

恋文。いわゆるラブレターだ。

「姫様！ その手紙はどこにあるのですか！」

「……。アルビオンです」

「アルビオンですって？ まさか、もう敵の手に落ちたと！」

「いいえ。アルビオン王家に手紙がありますわ。まだウェールズ様がお持ちになっています」

「確か、アルビオン王家は風前のともし火と伺っていますか？」

俺の言葉にアンリエッタは力なく頷いた。

「後、どれくらい持つかわたくしにも分かりません。王軍だけの戦なんて高が知れていますもの」

王軍だけだと、おおよそ千から三千くらいだろうか。

いつから王軍だけなのかは知らないが、アルビオンの総戦力は約五万といったところだろう。

そこから考えて王軍が持つて一週間。

火薬等の物資があればの話だが。

メイジだけで戦える数じゃない。

「破滅ですわ！ ウェールズ様は奴らの手に落ちて、手紙も奴らの手に……」

ややオーバーな肩の落とし方をするアンリエッタ。

なるほど。俺が関わらないアンリエッタはこういう性格になるん

だな。

相手の良心を刺激して自ら動かそうというのか。

「姫様！ そんな事ありません！ わたしに、わたしに行かせて下さい！」

思ったとおりルイズが声を上げた。

どんな危険な地だろうと、ルイズのような子ならこうなってしまう。

「ルイズ！ いいえ、無理よ！ わたくし混乱してたに違いないわ！ あんな恐ろしいところにあなたを向かせるわけには行きません！」

「トリステインの危機に、公爵家が何も出来ないのでは笑いものです！ それに姫様のためなら例え死地にでも身一つで行きましょう！」

「ルイズ！ 何と心強いでしょう！」

アンリエッタはそう言つてルイズに抱きつく。

ルイズもアンリエッタをきつく抱きしめていた。

美しき友情。

そう言つべきなのだろうが。

ある意味、謀略としか言いようが無い。

「いい、アレス！ あなたも来るのよ！」

アンリエッタから離れるとルイズは俺にそう命じた。

まあ、分かりきつたことだな。

「いいよ。話を聞いた以上、嫌だとは言えないからね。

それで、算段は付いているのかい？」

「え……。そ、そんなのこれから考えるのよ！」

「あのね……。姫殿下、ウェールズ皇太子は今どちらにいるかご存知ですか？」

「はい。ニューカッスル城で籠城していると聞いていますわ」

「ニューカッスル城ですね……」

厄介なことこの上ない。

アルビオンの港町からニューカッスル城までは馬でだいたい一日くらいだと記憶している。

しかも籠城である以上、アルビオン王軍は囲まれていることになるわけだ。

敵陣突破しなければニューカッスル城には辿り着けない。

「姫殿下、ニューカッスル城へはどのようにして行くかを何かご名案ありますか？」

通常ルートで行くならば敵陣突破は必至となります。

また空から行くにしてもレコン・キスタ軍が制空権を握っているはずですので、下手には近づけないと思いますが？」

「それは……」

俺の問いにアンリエッタは言葉を失った。

まるでそんなことを考えていませんでしたと言わんばかりだ。面を食らった顔とはこういうの言っただろう。

「アレス！ 姫様になんて事を！」

ルイズが声を荒げて叫んだ。

「ルイズ！」

ルイズを一喝すると、一瞬体を震わせてそれから大人しくなった。「いいかい？ どんな事でもそうだけど準備と言っものは必要なんだ。」

姫殿下は僕達を頼ってくれている。それ自体は悪いことじゃない。でも、何かを為し得たいならそれなりのお膳立てをしておくくらいしないと駄目なんだ。

姫殿下も良く覚えておいってください。

これがもし戦で重要な戦局の時に、何も準備も無くただ敵を討てと兵を送り出したらどうなるか？

場合によっては全滅。良くて捕虜を取られて重要な情報を引き出されるかも知れないのです」

「そ、そんな……」

俺の言葉にアンリエッタは顔を青くした。

自分の考えの浅はかさに悔いているようだ。

「アレス！　いくらなんでも言いすぎよ！」

「ルイズ、必要な事だよ。僕は落ち貴族だけど、生きるために必要な知恵を身につけなければ生きて来れなかった。それこそ、途中で命を落としてもおかしくない場面はいくらでもあった。」

でも、こうして生きているのは生きるのに必要な情報や状況の把握、また心構えと言うものがあつたからなんだよ」

別に落ち貴族と言うわけじゃないが。

まあ、この方が今のルイズには通じるからな。

「そ、そうかも知れないけど……」

ルイズの勢いが弱まる。

ちらりとアンリエッタの方を気遣うように視線を送った。

俺もアンリエッタを見ると、小刻みに体を震わせているのだ。

「姫殿下」

「は、はい……」

「解つて頂けたでしょうか？」

「はい……」

返事をするもアンリエッタはうな垂れていた。

公式の場合なら確実に俺は殺されていただろう。

王家にここまで意見していい立場ではないんだから。

だが、こっちのアンリエッタは少々自分の立場と言うものを解つていない。

王家である自覚、そして誇り。

今のアンリエッタを見るに、籠に繋がれた哀れな小鳥にしか映らない。

心一つで大空を羽ばたく鷹のようにも成れると言うのに、だ。

「しかし、姫殿下。今回の件は僕の主であるルイズが引き受けました。」

主が受けたならば、その命を為しえるのに最大限の知恵を絞りましょう。

実は、策が全く無いわけでもありません」

「ほ、本当ですか！」

俺の言葉にアンリエッタが顔を上げた。

わずかな希望に縋る様な目だ。

「ええ。もちろんです」

こっちに来る直前にニューカッスル城には居たんだ。

ニューカッスル城の構造をわからながらも知っているからこそその策でもある。

これは本当に俺の希望的観測でしかないわけがだ。

だが、その前に。

「しかし、その話をする前に招待しないと知らないお客がいるようなので」

俺はそういつて立ち上がるとドアの前に立ち、ドアノブを引いた。部屋の外から人が一人倒れて入って来た。

風の魔法で周囲を探っていたんだが、実は途中から盗み聞きしている人間がいたのに気が付いていたのだ。

その人物は。

「ギーシュ、盗み聞きしたからには協力してもらっけど異論はないね？」

苦笑いしながら俺を見上げるギーシュ・ド・グラモンだった。

第十二話（後書き）

いよいよ風のアルビオンへの旅立ちへととなります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6962/>

死の先に待っていた使い魔の生活

2010年12月31日00時40分発行